
流星のロックマン 連鎖する運命

冬の結晶

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

流星のロックマン 連鎖する運命

【Nコード】

N 4 2 6 3 W

【作者名】

冬の結晶

【あらすじ】

メテオGの事件から数カ月後、スバル達は6年生になり平穏な生活を送っていた。そんな中FM星では、アンドロメダの鍵の設計図を盗み再び地球侵略を企むFM星人達が、地球に向かってきていた。陰で糸を引く者達から、スバル達は地球を守ることが出来るだろうか？

ブローグ

- ??? -

カタカタ・・・暗闇の中キーボードを打つ音が部屋に響く。影が画面と向き合いキーボードを叩いている。音は休むことなく続いていた。そんな中ドアが開き暗闇の中に光が差し込んだ。

「こんな遅くまで計画の確認？体調崩すよ？」

ドアから入ってきた人物は、キーボードを叩いている影に言った。

「・・・計画の最終確認だ。そっちこそこんな遅くまで起きていたら体調崩すぞ。」

影はそう言いながら手を止めた。

「最終確認って『核^{コア}』を集めるだけじゃなかった？」

「そうだけど・・・失敗は出来ないからな。それより例の件うまくいったか？」

「バッチリだよ。うまくいった」

「分かった。俺はもう少し起きとくけど、お前はもう寝ろよ」

ドアから入ってきた人物は、「分かった。無茶はするなよ」というと外に出て行った。

部屋に残った影は、再びキーボードを叩き始めた。

- F M 星 -

現在時間は午前零時。ここに住むF M星人の人々も寝ているように電波体の気配がほとんどない。そんな中F M宮殿では、警報が鳴り響いていた。

「なにことだ」

緑色の電波体が現れた。彼の名前はケフェウス。F M星の王であり、かつて地球侵略を企んだ。しかし、その戦いでスバルと出会い絆の大切さを知った。今は過去の罪を償うために過去に滅ぼしたA M星の復興を手伝っている。

宮殿の扉が開き一人の兵士が入ってきた。

「大変ですケフェウス様。F M星人の数々が、アンドロメダの鍵の設計図を盗み地球に向かっています。」

「何、地球との連絡は？」

「電波がジャミングされていて連絡が出来ません。」

報告を聞くとケフェウスは、宮殿の出入り口へと足を運んだ。

「ケフェウス様どちらへ」

「地球の民達にこのことを伝えに行く。」

「！ダメですケフェウス様。今あなたがFM星を離れては、FM星の民達の信頼をなくしてしまいます。どうかここにいてください。」

「我々も同じ意見ですFM王」

突然後ろから声が聞こえたため反射的にケフェウスは振り向いた。そこには、AM星の三賢者ペガサス・レオ・ドラゴンがいた。兵士は三賢者を見ると一礼をして外に出て行った。

「地球には、すでに我々の使者が向かっています。」

「ですからFM王は、ここを離れずすべきことをしてください。」

ケフェウスは、「・・・分かった」といつて承諾した。

「・・・お主達も離れるわけにわいかないのか？」

「はい、AM星の復興が忙しいため我々も離れるわけにはいきません。しかし、大丈夫でしょう。地球には、星河スバル達があります。彼らならやってくれるでしょう。」

ケフェウスは「そうだな」といった。しかし、そこにいた四体の電波体は嫌な胸騒ぎを感じていた。

プロローグ（後書き）

初投稿のうえ僕は国語能力が欠けているため、いろいろおかしなところがあると思いますが、これからがんばっていこうと思います。
感想・アドバイス等お願いします

いつもの朝

・コダマタウン・

現在AM8：10 ある青い屋根の家で、叫び声が聞こえる。

「いい加減起きろー！ー！！」

「あゝもう、うるさいよ。ウォーロック」

「何がうるさいだ。今何時だと思ってやがる」

「んゝえつと・・・！！」

布団の中にいた少年は、近くにあった時計を見るなり飛び起きた。

「8時過ぎてるよ！ウォーロック何で起こしてくれなかったの！
？遅刻するー！」

「俺がお前を起こすために何回叫んだと思ってるんだよ！！」

少年は学校の準備をすると部屋を出て階段を降りて行った。

彼の名前は星河スバル。彼はロックマンになって、『FM星人の地球侵略』『ムー大陸の事件』『メテオGの事件』の三つの大きな事件を解決し地球を救った英雄である。他にも平行世界でアポロンフレ임とブラックホールサーバーでシリウスと戦っている。

朝スバルを起こそうとしたのが、スバルの相棒であるウォーロック。彼は元AM星人だったが、今はスバルのウィザードとして生活している。スバルと電波変換することで、シューティングスターロツクマンになれる。

「おはよ、母さん」

「おはよ、スバル。朝食は机の上にあるから速く食べなさい。ルナちゃんたちたち来てるわよ。」

彼女は星河あかね。スバルの母親で、優しく料理が得意。

「あれ、父さんは？」

「大吾さんならもう仕事に行ったわよ」

星河大吾。スバルの父親で、行方不明だったがメテオGの事件後、ウォーロックと共に地球に戻ってきた。今はWAXAで働いている。

スバルは異常な速さで朝食を食べた。

「ご馳走さま」

その後、荷物を持って玄関に向かった。

「行ってきます」「いつてらっしゃい」の会話を交わすとドアを開け外に飛び出た。

「おっそーい！！今何時だと思っているの!?!」

「ごめんなさい！委員長」

スバルが謝った彼女の名前は白金ルナ。高飛車な面がある。ウィザードはモードで礼儀正しい。

「おっせーぞ。スバル」

「ゴンタ君が言えることではないと思いますよ。」

「うつ・・・」

牛島ゴンタ。単調だが喧嘩には強い。ウィザードは元FM星人のオックス。電波変換でオックスファイアになれる。

メガネを掛けた背の低い彼は、最小院キザマロ。ウィザードは計算が得意なペディア。

「とにかく、時間がないわ。走るわよ」

ルナを先頭に四人は学校へ走り出した。

いつもの朝（後書き）

感想・アドバイス等待着てます。

転校生（前書き）

「プロローグ」と「いつもの朝」を編集しました。
注意、アドバイスありがとうございます。

転校生

ーコダマ小学校ー

あれから全力で走った結果時間ギリギリで間に合った。

「ギリギリセーフ。疲れた」

「誰のせいでこうなったのかしら？」

ルナがオーラを放ちながら聞いてきた。

「（ま、まずい・・・ゴンタ、キザマ口助けて！）」

スバルが二人に視線を送るが、とぼつちりをくらわないようにするため二人は視線をはずし授業の準備をしていた。スバルが長い説教を覚悟したとき、教室のドアが開き先生が「ホームルームを始めるぞ」みんな席につけ」といいながら入ってきた。

ルナは「次からは速く起きるように」といつて席に着いた。スバルは「（助かった）」意外何も思っていなかった。

「よし、みんな席に着いたな。今日は知っている人もいると思うが転校生が来るぞ。」

周りを見ると確かに席が四つ空いていた。周囲が騒がしくなり「どんな子が来るんだろ」「楽しみだね」などのお決まりの会話が聞こえてきた。

「まあ、みんながよく知っている人たちだからすぐに仲良く出来るだろう。じゃ、入ってきてくれ」

先生がそういうと教室のドアが開き三人の転校生が入ってきた。転校生を見るなりクラスのみんなは、言葉を失った。なぜならその転校生は……

「双葉ツカサです。みんな久しぶり、のほうが合ってるのかな？」

「ジャックだ。元気にしてたか」

「ベイサイドシティーから転校してきた響ミソラです。よろしくをお願いします。で、いいのかな？」

双葉ツカサ。幼い頃、親に捨てられたため、親への憎しみが大きくなった。その結果もう一つの人格ヒカルが生まれた。FM星人侵略のとき、FM王の右腕ジェミニと電波変換してジェミニスパークになりFM星の最終兵器アンドロメダを復活させた。しかし、スバルに阻止され、スバルと接することで親への憎しみが薄れていきヒカルと向き合って生きていくため、和解の旅に出ていた。

ジャック。ディーラーの元幹部で、キングのメテオG計画を手伝っていたが、その計画を利用しメテオGを地球にぶつけようとするが、スバルに止められた。今は罪を償うためにWAXAで働いている。

響ミソラ。幼い頃父親を事故で、母親を病気で亡くしつらい日常を送っていた。しかし、スバルと出会うことでつらかった日常が変わっていった。国民的歌手で、スバルの始めてのブラザー。ウィザードは元FM星人のハープで、電波変換することでハープノートに

なれる。

「あと一人いるんだが、用事ができたらしくてあえるのは明日になるな。さあて、三人はこの席がいいかな？」

先生が言ったとたん教室の男子（スバル以外）が人気アイドルのミソラを自分の隣にしようとあちこちから「ミソラちゃんは僕の隣に」と言う声が聞こえ始めた。

「ツカサ君、ジャックここ空いてるけど、どう？」

男子生徒がミソラを自分の隣にしようとがんばっている中、スバルはツカサとジャックに声を掛けた。そんな中、ミソラが希望を言った。

「先生、私スバル君の隣がいいです。」

「うーん、星河はいいか？」

「え、いいですけど・・・」

その瞬間クラスの男子（ツカサ、ジャック以外）から、殺気のもった視線を向けられた。ルナはそれに加えて不気味（嫉妬？）なオーラを放っていた。

「（・・・なんかみんなからの視線が痛いし、委員長がすごい怖いんだけど）」

そんな空気を気にせずミソラがスバルの隣の席に来ていた。

「これからよろしくね。スバル君」

「うん、うん。こっちこそよろしくね、ミソラちゃん」

スバルはさらに殺気のこもった視線を向けられていた。

「響の席は決まったな。ツカサとジャックはどこがいいか？」

「僕はどこでもいいです。」

「俺もどこでもいいぜ」

先生が二人の席を決めた後、今日の予定を言う。「よし、これでホームルーム終了。みんな授業の準備しとけよ」と言う教室から出て行った。授業の準備が終わるとスバル、ミソラ、ルナ、ゴンタ、キザマロ、ツカサ、ジャックの七人の雑談が始まった。

「ツカサ君帰ってきてたんだね」

「うん、一週間ぐらい前に戻ってきたかな」

「それにしても驚きましたよ。転校生がツカサ君にジャック君、ミソラちゃんだったとわ」

「本当よ、三人とも何の連絡もなしに来るんだから」

「それよりさ、ジャックやミソラちゃんは何でコダマ小に転校して来たんだ？」

「俺は暁に『お前はまだ小学生だから学校に行け』って言われて、強制的にこさされた。」

「私は勉強を長い間ほとんどやってなかったから、そろそろ勉強しないといけないかなと思って転校してきたんだよ。」

「あれ、ミソラちゃんってベイサイドシティの学校に通ってたんだから無理に転校しなくてもよかったんじゃないの？」

「そういえばそうね、何か理由があるの？ミソラちゃん」

「え、ええ〜と・・・スバル君やみんながいるからだよ。」

ミソラは答える間少しスバルを見た。それにきずいたツカサはミソラとスバルを見てくすぐすと小さく笑っていて、ルナは再び不気味なオーラを放っている。他の四人は話に夢中でききしていない。

「（・・・なんか委員長が怖いんだけど、なんかやったかな）」

「でも、学校に行き始めたら仕事がやりずらくなるんじゃないの？」

「ツカサ君の言うとおりなんだよね。だから、次のライブが終わったらしばらくの間仕事を休むつもりなんだ」

「ええ、じゃあミソラちゃん歌手やめちゃうのかよ」

「しばらくの間って言ったでしょう。」

「じゃあ、みんなでミソラちゃんのライブに行かない？」

スバルの提案にほとんど全員賛成したが・

「俺はいかねえぞ、騒がしいところ嫌いだから」

「だめよ、ミソラちゃんの引退ライブなんだから拒否権ないわよ」

ルナの言葉にいいかえそうとしたが、後がうるさいのでしぶしぶ承諾した。

「ということで、全員行けるそうよ。」

「分かった。全員分のチケット取っとくね」

そんな会話をしているとクラスの男子がスバルを呼んだ。スバルは「（何だろう）」と思いながら行くと、スバルの周りを囲んだ。

「え、な何？」

「お前ミソラちゃんとどういう関係なんだ？」

「え、ブラザーだけど・・・」

「なんだと！詳しく説明してもらおうか、スバル？」

「（な、なんかみんなの目が怖いんだけど・・・）」

助けてもらおうとみんなのほうに視線を送るが、ライブの話に夢中で誰も気がついていない。クラスの男子による尋問（？）が始まろうとしたとき、再び教室のドアが開き先生が「おい、なにしてい

る。授業始めるぞ」と言いながらはいってきた。スバルを囲んでいた男子は悔しそうに席に着いた。

「（た、助かった・・・なんだか今日は良い一日でもあって、ひどい一日だな）」

スバルはそう思いながら席に座り、授業が始まった。

転校生（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

大量発生（前書き）

投稿遅れてすみません。これから気をつけようと思います。では、どうぞ。

大量発生

- 屋上 -

今ここには僕と^{スバル}ワイザードのウォーロックしかない。え？どうしてかだってそれは・・

みんなが昼食を食べ終わると、ミソラがコダマ小に転向してきたことをかぎつけたファンの人でクラスの中がいつぱいになった。ツカサとジャックも「今まで何していたんだ？」などと質問されている。委員長たち三人は教室にきたミソラのファンの対処で忙しいようだ。スバルは教室にいとクラスの男子にいろいろ問い詰められそうなので誰もいないと思われる屋上にいる。

そんな訳で屋上に来たスバルは芝生の生えたところに座って空を見上げていた。

「にしてもツカサ君やジャック、ミソラちゃんが転校して来るなんて驚いたね。」

「俺にとつてはいい迷惑だけだな」

「え、なんで？」

「ハープのやつがいるだろ」

「・・・何でウォーロックは、ハープが苦手なの？」

「前にいろいろあつてな」

「ふん」

スバルはそう言つと話を止めて再び空を見上げた。

「・・・なあ、スバル」

「うん？何、ウォーロック？」

「暇だゝ何か事件とか起きないかなゝ」

「暇ならハープの所に行けば？」

「いや、それは無理。それよりウイルスとかをぶつ倒すほうが良い。」

「えゝ、僕は嫌だよ。戦つたりするの。それに、それに事件なんてそう簡単に起きないよ。」

スバルはウォーロック意見にさらつと答えるとまた空を見上げた。

「・・・事件起きろ」

「え？」

「事件起きろ、何でもいいから事件起きろ・・・」

「ちよつとウォーロック、物騒なこと言わないでよ。それにそん

なこと言っ たって事件が起きるわけが」

そのとき町に爆発音があった。

「お、おいスバルウイルスが大量に出てきたぞ」

「ウォーロックがあんなことを行っ てたからだよ」

「俺のせいにするなよ。それより、速く行かなくていいのか？」

「もう、行くよウォーロック。電波変換」

そういうとスバルはロックマンの姿になり、ウェーブロードに乗ってウイルスがいるところに向かっていった。

・ウェーブロードー

「スバル君」

スバルがウェーブロードで移動していると後ろから声を掛けられた。そこには、ハーブノートがいた。

「ミソラちゃん、どうして」

「教室でみんなと話していると、外から爆発音がきこえてハーブがウイルスが出たって言っ たから急いできたの。それから・・・」

「スバル（君）」

声がした方を見るとジェミニスパークとジャックコーヴァスも来ていた。

「ツカサ君、ジャックそれにヒカルも、三人ともどうして電波変換ができるの？」

「その話はまた後で、それより」

「おい何話してんだ。さっさと行ってかたずけるぞ」

「う、うん。行こう。」

五人は、ウェーブロードを使い現地に移動し始めた。

・コダマ公園・

「うわ」

「な、なにこれ」

四人の目の前には、百体をゆうに超えるウイルスの大群が暴れていた。

「とりあずさっさと終わらせようぜ」

「久し振りに暴れるぜ」

「ヒカル、ほどほどにね」

五人は手分けしてウィルスを倒し始めた。

「ブレイクサーベル」

「パルスソング」

「フェザーシックル」

「エレキソード」

「ロケットナックル」

五人の攻撃によりウィルスの大群は減る・・はずだった。

「ねえ、もうずいぶんウィルスを倒したよね。」

「うん、でも」

「数が減ってないね」

「逆に増えてきてるな」

「ねえ、それになんかウィルスの動きが速くなってきてない」

「僕もミソラちゃんの言っているとおりだと思う」

そう、ウィルスの動きが速くなり当たっていた攻撃が少しずつ当たらなくなってきた。

「！ミソラ後ろ」

ミソラが目の前ウィルス不倒すと残っていたウィルスがミソラを後ろから攻撃しようとしていた。しかし、そのウィルスが突然真つ二つになりデリートされた。

「ミソラ、大丈夫？」

「うん。大丈夫だよハープ。ありがとうヒカル君」

「口を動かす暇があつたら手を動かせ」

「いくらなんでも数が多すぎる」

このままだと、体力が減っていくスバルたちが不利なのは明らかだ。スバルは広範囲攻撃のバトルチップを使うが、ウィルスたちは一向に減る様子がない。

「！おい、スバル。何か変な周波数があるぞ」

「え、ウォーロック場所は？」

「目の前のウィルスの中だ」

「分かった。ソードファイター」

バトルチップを使いウィルス不倒すが、残ったウィルスが邪魔をしてスバルの行く手を遮っている。

「どうしよう、これじゃ何があるのかが分からない」

「スバル、少し離れてろ」

声が聞こえたほうを見るとジャックが空にいて両手からは紫色の炎が出ていた。スバルはジャックのすることが分かると上にあったウェーブロードに移動した。

「ペインヘルフレイム」

すると無数の炎がウォーロックの言った場所にいたウイルスを半分以上燃えた。燃えている炎の中からは奇妙な光を放つ装置が現れた。その装置の周りを中心に焼き払ったウイルスが出現していた。

「あれは！」

「どうやらあの装置を壊さないとこのウイルスは消えてくれないみたいだね。」

「そうみたいだね。行くよツカサ君、インパクトキャノン」

「ロケットナックル」

二人の攻撃は装置にあたり音を立てて壊れた。装置が壊れた瞬間ウイルスたちの動きが始めの速さに戻った。

「すべてあの装置のせいだったってわけか」

「そうみたいだね。けど、もう増えることはない」

「よし、ショックノート」

「ジェミニサンダー」

「ペインヘルフレーム」

「ジャイアントアックス」

スバルたち五人の一斉攻撃でさっきまで減ることのなかったウイルスがほとんど消えていった。残りのウイルスをかたずけるのにそんなに時間は掛からなかった。ウイルスがかたずくとスバルたちは電波変換を解いた。

「やっと終わった」

「さすがに疲れたね」

「俺とツカサがいなかったらお前らやられてたな。」

「そういえば気になってたんだけど、なんで二人は電波変換が出来るの？ジェミニとコヴァスがいらないのに」

「それはね」

スバルの質問にツカサが答えようとしたとき、スバルのハンターが鳴った。

「スバル電話だ」

「分かった。ありがとう、ウォーロック」

スバルはウォーロックにお礼を言うと「誰だろう」と思いながら

ハンターを操作してエアディスプレイを出した。そこにいた人物は・

「ひさしぶりね。スバルちゃん」

「ヨイリー博士」

ヨイリー博士。WAXAの科学者。メテオGの一件で、スバルに力を貸してくれた人だ。

「あ、おひさしぶりです。ヨイリー博士」

「ひさしぶりね、博士」

「あら、ミソラちゃんにハープちゃんひさしぶり。二人とも元気にしてた？」

「はい、元気にしてます」

「そうよかったわ」

「ところで博士、何かあったんですか？」

「ええ、ちよつとそつちで妙な周波数を感知してね。そつちで何か起きてない？」

「ついさっきまでウイルスが大量に発生していました。」

「もう、俺たちが倒したけどな」

「そう、そのことでちょっと話があるから、そうね、学校が終わったらWAXAに来られる?」

「あ、学校があつたの忘れてた。」

「あ、私も」

「じゃあ、まず学校に戻って、話はWAXAでつてことになるね」

「そうだね。学校が終わったらWAXAに行かせてもらいます。」

「ええ、分かったわ」

ヨイリー博士はそう言つと電話を切つた。

「学校に戻ろうぜ」

「うん」

四人は再び電波変換をして学校に向かった。

大量発生（後書き）

戦闘描写を書いて見ました。

アドバイスを、感想等よろしくお願いします。

とぼっち

・コダマ小学校・

「よし、ホームルーム終了。気をつけて帰れよ」と言うと先生は教室から出て行った。

あれからヨイリー博士と話し終わり、スバル達が学校に戻ると六時間目の授業が始まっていた。なぜいなかったのかと理由を聞かれて素直に「電波変換してウイルスを倒していました」なんて言えるわけがないため、「保健室に行ってみました」などと適当な理由を言っ

って授業に参加した。

「で、スバル君たちは、私たちに何も言わずに戦いに行っちゃったことね」

「はい、そうです」

今は教室でさっきのウイルス戦のことをルナ、ゴンタ、キザマロに説明していた。

「それで、今からWAXAに行くの？」

「うん、ヨイリー博士に学校が終わったら行くって言うてあるから」

「分かったわ。ゴンタ、キザマロ、私たちもWAXAに行くわよ」

「え、委員長たちも来るの？」

「当たり前でしょう。それにゴンタだって電波変換できるんだから私たちも話しに参加させてもらうわよ」

「そうですよスバル君。僕たちもついていきますよ。そうですね、ゴンタ君」

「え、ああ、そうだぜスバル」

ゴンタは、何か考え事をしていたようで、キザマロに声を掛けられたとき少し驚いていた。

「ねえ、スバル君。速く学校を出ないと出られなくなるよ」

「？何で、ツカサ君」

「スバル、あれをみてください」

ジャックが外を指したので見てみると、そこには大勢の人が校門の前にいた。

「・・・なんなの、あれ」

「多分ミソラちゃんのファンの人たちじゃないの」

「ミソラちゃんってすごいね」

「そんなこと言ってる場合ですか、あれじゃWAXAまで行くの

に時間が掛かりますよ」

「あそこにいる人たちは、ミソラのファンなんだろ」

「多分そうだろうね、それがどうかしたのジャック」

「それなら、ミソラが電波変換してWAXAに行けばいいんじゃないの？」

「確かにそうね、それでいいかしらミソラちゃん」

「うーん、それだったらスバル君も一緒に行こうよ」

「ちょっと待ちなさい。何でスバル君もなのよ」

「だって、みんなは一緒に行って私だけ一人で行くのって嫌なんだもん」

「僕は別にいいけど」

「本当？スバル君。じゃあ速く行こう」

そういうとミソラはスバルを引っ張って教室を出て行った。そのさい、ミソラと一緒にいるスバルを目撃した男性陣が「スバル、何してやがる」などと叫びながら二人の後を追っていった。

「ミソラちゃん教室出るの速かったな」

「スバル君逃げられますかね」

「スバル君も大変だね」

「なあ、委員長のやろぅがマジで怖いんだが、何とかしてくれないか？」

ジャックの隣には話しかけただけで怒りそうなルナがいた。

「うゝん、多分無理。ウェーブライナーに遅るといけないから先に駅行っておくね。」

ツカサは笑顔で言うと言った教室を出て行った。残された三人はルナに声を掛けるが「何？」と恐ろしい目で見られたが、「駅に行きますよ」というとツカサの後を追っていった。ルナは、自分が置いていかれたことにきずきさらに機嫌が悪くなっていた。

ー ウェーブロード ー

「はあゝ疲れた」

「大丈夫？スバル君」

教室を出た後スバル達を追いかけてきた男性陣たちから逃げるため、全速力で走り何とか逃げ切った。今は電波変換してウェーブロードにいる。

「それにしてもすごい人数だったね。スバル君って人気者なんだね」

「いや、僕じゃなくてミソラちゃんだと思うよ」

ミソラはスバルの言った事が聞こえてないようでウェーブロードのうえを歩いている。

「どうしたのスバル君。おいていくよ」

「あ、まってよミソラちゃん」

スバルはミソラのところまで走っていった。それから少しの間二人はWAXAに向かって歩いた。

「それにしてもこうしてスバル君と二人でいるのって久し振りだね」

「そういえばそうだね」

「ああ、なにいつてんだ、俺も・グハ！」

ウォーロックがウイザードオンして出てきたところをハーブが発K.O.にしまった。気を失ったウォーロックをハーブが「ごめんなさいね。このガサツは私が預かっておくわ」と言いながらウォーロックを引きずってどこかに行ってしまった。

「ウォーロック、大丈夫かな？」

「大丈夫なんじゃない、それよりスバル君もう少しゆっくり行かない？」

「え、いいけど」

スバルはそういつとペースを落とした。それから二人はWAXAまで楽しそうに会話をしながら向かった。

「WAXA前」

WAXAの前に青とピンク色の二人の電波体が現れた。二人は電波変換を解き周りを見渡した。

「みんなまだ来てないみたいだね」

「そうみたいだね」

スバルとミソラがルナたちより先についたようだ。（当たり前だが）

「あ、スバル君来たみたいだよ」

ミソラがそういつとウェーブライナーが駅に止まり。ツカサ、ゴンタ、キザマロ、ツカサが出てきた。しかし、ツカサ以外のゴンタ、キザマロ、ジャックはウェーブライナーから出てくると同時にその場に倒れた。

「！ちよつちよと、どうしたの三人とも」

スバルはそういつとミソラと一緒にツカサ達に近づいた。

「スバル・・・牛丼あるか？」

「スバル君、僕はもうだめです」

「スバル・お前らがいるってことはやつとついたか」

ゴントは、スバルが近づくなり好物の牛丼の事を聞き、キザマロは消えそうな声で一言いい、ジャックは何とか立ち上がった。

「ねえ、ツカサ君なにがあつたの？」

ミソラが四人の中で一番大丈夫そうなツカサに聞いた。ツカサはウェーブライナーの方を見た。それにつられてスバルとミソラを見ると、ルナがウィルスの大群が脅えて逃げだすんじゃないかという不気味なオーラを放っていて、何か言っていた。

「委員長になにかあつたの」

スバルはルナに聞こえないように質問した。

「スバル君とミソラちゃんが教室から出て行ってからああなつたみたいだよ」

ミソラは、なるほどと分かったようにうなずいたが、スバルは何でという顔をしている。

「それで、始めは一人でいろいろ言つてたみたいなんだけど、なぜか僕たちが怒られて」

「委員長に説教されてたつてわけだね」

「そうだぜスバル」

ツカサが説明していたところにある程度回復したジャックが話し

に入ってきた。

「あ、ジャック。もう大丈夫なの」

「俺はな。くそ、あのドリル女め、ウェーブライナーに乗ってからずっと俺達説教されてたんだぞ。」

「それで、キザマロ君とゴンタ君があんなことになったんだね。」

キザマロとゴンタはまだ回復していらしく地面に倒れていた。

「どうする。ヨイリー博士も待っているだろうしそろそろ行っただ方がいいんじゃないの」

「でも、置いていくわけにはいかないよ」

しばらくスバルたちがどうするか考えているとツカサが「・・・ウイザード達に頼めばいいんじゃないの」と言った。

「あ、そうだね。オックス、ペディア、モード委員長たちを頼めるかな？」

「いいぜ」

「了解です」

「ルナちゃんはどうでしょ」

「委員長は落ち着くまでいてあげて」

「分かりました」

「これでいいと思うんだけど」

「いいんじゃないの」

「速く行こうよスバル君」

「そうだね」

ルナ達三人はウィザードにまかせ、スバルたち四人はWAXAの中に入っていた。

とばっちり（後書き）

会話文が多いような・

感想・アドバイス等よろしくお願いします

WAXAで

- WAXA -

WAXAの中はサテラポリスの人たちが忙しそうに働いていた。スバルたちが中に入ると、ヨイリー博士が出迎えてくれた。

「すみません。遅くなって」

「いいのよ、スバルちゃん。会議室で話をしましょうか。ついてきて」

スバル達はヨイリー博士についていった。

「ここが会議室よ」

ヨイリー博士はドアの前に止まりドアを開け中に入っていた。スバル達は「失礼します」と言って中に入った。すると中から聞いたことのある声が聞こえた。

「よお、久しぶりだな、スバル」

「あ、暁さん」

暁シドウ。元ディーラの一員だったが、メテオGの事件ではスバルと一緒にキング達と戦った。しかし、戦いの中で大爆発に巻き込まれて行方不明になっていた。

「え、あ、暁さん、生きてたんですね」

「おいミソラ、何だその言い方。まるで俺が死んでいたようじゃないか。・・・まあ、確かに一度死んだけど。」

最後の言葉はスバルたちには聞こえないよう言った。

「でもどうしてですか。あの爆発に巻き込まれたらとても生きて戻れるなんてこと・・・」

「スバル、俺あるとき電波変換してたよな」

「え、はい。してましたけど」

「電波変換した状態だったから爆発に巻き込まれた時データとして電脳の中とかに散らばってたらしいんだ」

「でも、それがどう関係・・・あ」

「?どうしたのスバル君」

「ほら、委員長がジョーカーにやられたとき、散らばったデータを集めて再構築したじゃない」

「そう、それで私とジャック、サテラポリスの人たちでシドウのデータを集めて再構築したのよ」

「クインティア先生」

クインティア。ジャックの姉で、元ディーラの幹部。ジャックと

一緒にメテオGを地球にぶつけようとしたがスバルに止められた。
そのさい、ウィザードだったヴァルゴは、コーヴァスとともにブラ
イにデリートされた。

「久し振りね。あと、もう先生じゃないわ」

「はい。でも、暁さんアシッドは・・・」

「ああ、アシッドもちゃんというぞ。ウィザードオン」

暁が言つと白を中心としたウィザードが出てきた。

「お久し振りです。みなさん」

「アシッド！久し振り」

「暁さん。もしかしてアシッドも再構築したんですか？」

「お、鋭いなミソラ。そのとおりだよ」

「そうなんですか・・・あ、もしかしてツカサ君やジャックが電
波変換出来た訳って」

「気がついた。僕のハンターからジェミニのデータが見つかって
スバル君の手助けが出来ると思って再構築してもらったんだ。」

「俺はコーヴァスがいれば戦うことが出来るからな」

「へえ、え、コーヴァスが再構築できたってことはヴァルゴも」

「ええ、再構築してもらったわ」

「さて、そろそろ本題にはいつていいかしら」

「あ、すみませんヨイリー博士」

スバル達は指定された席に座ると周りの雰囲気が変わった。

「じゃあ、まずウイルスを出していたと思われる装置のことだけ
ど．．．」

「え、何で装置のことを知ってるんですか？まだ報告してないの
に」

するとシドウが「スバルたちが話している間にジャックが装置を
回収してメールで報告してくれたんだ」といった。

「話を戻すわね。その装置についてなんだけど作りが複雑でまだ
分からないけど、その装置の中にこんなものが在ったの。」

ヨイリー博士はそう言うのと白くて丸いものを見せた。スバル達は
順番にその丸いものを見た。

「これって石ですよね」

「ああ、ツカサの言ったとおり石なんだが、これただの石じゃないんだ」

シドウは見終わったスバルたちから石を預かり言った。

「どうゆうことだ？」

「この石は少しだけ周波数を持つてるのよ。」

「え、石が周波数を持つことってあるんですか？」

「時々あるんだよ。電波を沢山浴びることで周波数を持つのが」

「シドウちゃんの言ったとおりの石ならたいしたことないんだけど、この石は特別のようだね。」

ヨイリー博士が言うといつの間にかクインティアがウイルスを連れて来ていた。

「姉ちゃん、そのウイルスは？」

「まあ見てなさい。ヴァルゴ」

「はあゝい。ティアやつちゃっていいのね？」

「ええ」

「りょゝかゝい。ゴッドレイン」

ハンターから出てきたヴァルゴが杖を振るとウイルスの上に雨が降り出し、ウイルスがデリートされた。シドウが持っていた石をデリートされたウイルスの近くに置いた。しばらくすると突然、石がしかりだしデリートされたウイルスが現れた。クインティアは再び現れたウイルスを持って会議室から出て行った。シドウは石を拾い机の上に置いた。

「今、見たとおり、この石にはデータを自動で再構築することが出来るみたいなのよ」

「やっぱりウイルスが減らなかったのはその石が関わってたんですね。」

スバルが言うとシドウが答えた。

「そうゆうことになるな。だが、この石は力が弱いようだな。短時間で何体ものウイルスを再構築するのは無理なはずなんだ」

「それを装置を使って強引に力を底上げしたってところね。」

「そうだったんですか」

スバルが答えると沈黙がおとずれた。その沈黙を始めに破ったのはミソラだった。

「あゝ、その石っていったい何なんですか」

「それがな、分からないんだ」

ミソラの質問にシドウが答えた。

「え、分からないんですか？」

「そうなのよ。地球でできたとは考えにくいし、ムーの物でもないのよ」

スバルの質問にヨイリー博士が答えると、ツカサが「このものが分からない石か・」とささやいた。
シドウが石を持ち言った。

「だが、この石があつた装置を作つたやつがいるはずだ」

「・・・また戦いが始まるんですか」

スバルが言った言葉に会議室にいたほとんどの人たちが息を飲んだ。

「・・・たぶんな。敵が分からないため手の打ちようがないが、一応頭に入れておいてくれ」

「分かりました」

「よし、今回の話し合いはここまでだ。帰っていいぞ。あ、ジャックは上に行つてティアを手伝つてくれ」

ジャックは「何で俺が・・・」とぼやきながら部屋を後にした。ジャックが出て行くとヨイリー博士がスバルに声を掛けた。

「あ、それとスバルちゃん、あなたに渡す物があるのよ」

「何ですか？」

「ハイ、これ。預かつてた『エースノジョーカPGM』よ。ノイズチェンジはできないけど、ファイナライズはできるようにしてあるから」

「あ、ありがとうございます」

「いいのよ。けど、メテオGがあるわけじゃないから不完全で前のような力を出せないから気をつけてね。じゃあ、気おつけて帰るのよ。」

スバル達は「はい」といって会議室から出て行った。

「・・・あのPGM、渡してよかったんですか？」

「スバルちゃんなら大丈夫よ。さあ、シドウちゃんは私と一緒に研究室に来て石があった装置の解析を手伝ってちょうだい」

「え？今からですか」

「当たり前でしょ。さあ行くわよ。」

「はあゝまた夜勤か・・・」

シドウはそう言いながら研究室に向かった。

拾い物と

- W A X A 外 -

スバルたちはシドウたちの話が終わるとWAXAから外に出てルナたちがいるウェーブライナーに向かった。

「それにしてもずるいよ。スバル君ばかりPGMとか貰って強くなって」

「いや、ミソラちゃんも十分強いと思うけど」

「それでも・・・肝心なときには一緒に戦うことができない・・・」

ミソラは思いつめたような顔をしてうつむいた。

「・・・だったら、ヨイリー博士に頼んでみたら？もしかしたらPGM作ってくれるかもしれないよ」

「・・・そうだね、そうしてみるよ」

ミソラはスバルの言った言葉で少し元気が出たようであつむいていた顔を上げた。それからスバルとミソラは楽しそうに話し始めた。ツカサはそんな二人を少し離れたところで見ていた。そうしているとき、遠くから三人が近づくのが見えた。

「おい、スバル」

「あ、ゴンタ」

ルナ、ゴンタ、キザマロの三人がスバルたちに近づいてきた。WAXAについたときのルナの悪かった機嫌は元に戻っているようだった。

「ゴンタ、キザマロ、委員長の機嫌が直ってるようなんだけど何かあったの？」

スバルはルナに聞こえないようにゴンタとキザマロに聞いた。

「モードとペディアたちががんばってくれたそうです」

「本当に大変だったんだぞ」

キザマロは理由をいいゴンタは恨むぞという顔をしている。そんなルナが聞いてきた。

「ちょっとスバル君話し合いは終わったの」

「うん、もう終わったよ」

「せっかく今から行こうとしていたのに・・・まあいいわ、ウェーブライナーに遅れるから話はそこで」

スバルたちは駅に向かって走り出した。

- ウェーブライナー -

今はスバル、ミソラ、ツカサの三人でルナたちにWAXAでの出

来事を説明していた。また戦いが始まるかもしれないことも一応話した。

「・・・そう、また戦いが始まるのね」

「大丈夫なんですか？」

「多分ね。もし始まったら、今までと同じようにできることを精一杯するだけだよ」

「がんばってください。僕はスバル君たちを応援しています」

「ありがとう、キザマロ」

キザマロはスバルと話をしているが、ルナは心配している顔をしながら、ゴンタは何か考え事をしている。そんな時ウェーブライナーに放送が掛かった。

『次はコダマタウン。お降りの方は忘れ物がないように・・・』

「あ、コダマタウンに着いたみたいだよ。」

ツカサが言うとミソラが言った。

「私はベイサイドシティーだから、また明日」

「そうだったね。じゃ、また明日学校で」

「うん、また明日みんな」

ミソラが手を振ったのでスバルは手を振り返してウェーブライナーを出た。それからしばらくの間スバル達は夕日に染まる町を歩いた。分かれ道来るとツカサは「僕はこっちだから、また明日みんな」といつてスバルたちと別れた。それからルナ達と別れてスバルも家に帰った。

- スバルの家 -

「ただいま」

「お帰り、スバル」

スバルは玄関に入るとあかねがエプロンの姿で迎えた。

「今日はやけに遅かったわね。何かあったの？」

「ちょっと、WAXAに呼び出されてね。後で話すよ」

「分かったわ。大吾さんは夜勤で今日は帰らないそうよ。」

「え？今日もなの？」

「ええ、なんだか一週間前からFM星だっけ？そことの連絡がでないそうなのよ。」

「そうなの？」

「らしいわよ、そのために働いているそうよ」

そう言つとあかねは台所に向かった。

「なんかあったのか」

「うわ！驚いた。ウォーロックいつから戻ってたの。」

「ついさっきだ。畜生ハーブのやろつ。いきなり気絶させやがって。ブツブツ……」

ウォーロックが一人でいろいろ言い始めたので、スバルはウォーロックを置いてリビングに向かった。机にはカレーがあった。

「わあ、今日はカレーなんだ」

「沢山あるわよ」

「いただきます」

スバルはカレーを食べ始めた。あかねも椅子に座ってカレーを食べ始めた。

「そういえば今日学校に転校生が来たんだ」

「へえ、どんな人？」

「それがね、ツカサ君にジャック、それにミソラちゃんだったんだよ」

「え、ミソラちゃんが転校して来たの」

「うん、本当みんな何の連絡もなしに来るんだから驚いたよ」

あかねは「だからミソラちゃん頼んできたのね」と言った。

「?どうしたの」

「いや、何もないわ。それより、WAXAで何の話をしたの」

「ええと」

スバルは暁が生きていること、昼にウイルスの大量発生があったこと、また戦いが始まるかもしれないことを話した。

「そう、あまり無茶しないのよ。」

「うん、分かってるよ。御馳走様」

スバルはそう言うと自分の部屋に行った。

スバルは部屋に入ると近くにあった分厚い本を取り読み始めた。
ウォーロックは何もすることがないようでハンターの中で寝ている。

- 展望台 -

周りが暗闇に染まっている中、突然空間に赤い光があたりを照らした。その光が収まると紫色の石一つ地面に落ちた。

- スバルの家 -

静かになった部屋の中で、さっきまで寝ていたウォーロックがハ
ンターから飛び出てきた。

「おい、スバル」

スバルは本を読みながら「なに、ウォーロック」聞いた。

「ちょっと、展望台に行かねえか」

「・・・明日は雨でも降るのかな？」

「何だこのやろう」

「だって今までウォーロックが自分から展望台に行こうって言っ
たことなかったんだよ」

「確かにそうだがよ。・・・少し妙な周波数を感じてな」

「分かった。行ってみよう」

スバルは準備をすると部屋を出て行った。

「あら、スバル。展望台に行くの」

「うん、ちょっと遅くなるかもしれないから」

「分かったわ。いってらっしゃい」

「いつてきます」

スバルはそう言うと展望台に向かった。

・展望台・

「・・・何もないね」

「おかしいな。さっきは確かに感じたんだが・・・」

スバルは今展望台に来てウォーロックの感じた周波数を探している。

「あれ？ねえ、ウォーロック。これって何だろう」

スバルは落ちていた紫色の石を見つけて拾った。

「その石からはなにを感じねえぞ。それがどうした」

「いや。ただ、昨日ここに来たんだけど、そのときはこんな石なかったから」

「そうか。・・・どうやらなにも無いようだな」

「うん。ウォーロックの勘違いだったのかな？」

スバルは辺りを見回しながら言った。

「確かにあの時は感じたんだがな。まあいつか。とっとと家に帰ろっぜ」

「ちょっと待ってよ。せつかく来たんだからもう少しここにいようよ」

ウォーロックはいやな予感を感じながらスバルに「何だと？」と聞いた。しかし、スバルはウォーロックが言ったときにはもう星を見ていた。ウォーロックはしばらくの間「おい。」「スバル」といったがまったく聞こえてないようで返事もしない。ウォーロックは諦めたように静かになった。

展望台の近くである電波体が話してるようだ。

「本当にスバル君があのお洛克マンなの？」

「ええ、だから話のついでに確かめてみたらどうですかとさっきから言っているでしょう。」

「あゝもう、分かったわよ。行くわよ、ユニコーン」

「了解」

電波体たちはスバルがいる場所へ向かって行った。

「！おいスバル。星を見る時間は終わりだ。」

「え、何で？」

スバルは体を起こすと前から電波体が来ているのが見えた。電波

体の周りには青い球体が現れていた。

「フリースボール」

「っち！」

ウォーロックは体を起こして身動きが取れないスバルを突き飛ばした。青い球体が飛んできてスバルがいたところに着弾し、氷付けになっていた。スバルたちの近くには、白いアーマーをつけた淡い青色の電波体がたっていた。

アイスユニコーン

- 展望台 -

スバルは今ウォーロックのおかげで電波体の攻撃をかわすことができた。淡い青色の電波体は頭に白い小さな角があり、右手には鉾を持っていた。スバルはウォーロックにお礼をいいいつでも電波変換ができるようにハンターを構えた。すると電波体がスバルに質問してきた。

「星河スバル君だよ。地球を三度救った英雄のロックマン」

「・・・君は何者？」

「この姿の名前は、アイスユニコーン。手合わせをお願いしたいんだけど、どうかな？」

「へ、なにが手合わせだ。いきなり攻撃してきやがって、戦えって言ってるもんじゃねえか。強引なやつだぜ」

「それ、ウォーロックがいえること？」

「うるせえ。それよりどうするんだ。あつちは俺らのこと知ってるみたいだぜ」

「戦うしかないみたいだね。いくよ、ウォーロック。電波変換」

スバルは光に包まれロックマンの姿になっていた。

「うわ、本当だったよ」

「?どうゆうこと」

「気にしない、気にしない。じゃ、始めよう」

「ウェーブバトル ライド・オン」

「エドギリブレード」

スバルは手から剣を出すとアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは持っていた鉾の先で受け止めた。

「ちょっと、手加減とかないの」

「よくゆうぜ。余裕って顔してるぜ」

ウォーロックが言うとアイスユニコーンはふつと笑うと距離を取り鉾を振った。スバルはエドギリブレードで受け止めたが簡単に折れてしまった。

「その剣って脆いね」

「それは、どうかな?」

スバルは再びエドギリブレードを出しアイスユニコーンに斬りかかった。アイスユニコーンは受け止めずに鉾を振り、剣と鉾が交わったがエドギリブレードは折れなかった。

「！・・・強度だけじゃないね。威力も上がってるね」

「エドギリブレードは連続で使えば使うほど強くなるんだよ」

「便利な剣だね」

そう言うときアイスユニコーンは再び距離を取ると周りに青い球体を複数出現させた。

「フリーズボール」

アイスユニコーンは鉾をスバルの方に向けると球体がスバルに向かって飛んできた。

「スバルあの攻撃はあまり当たるなよ。凍って動きずらくなるぞ」

「分かった」

スバルは周波数変換を使いかわした。

「ちょっと、少しぐらい当たりなさいよ」

アイスユニコーンは再びフリーズボールを使いスバルに向かって飛ばした。スバルは「敵の攻撃には素直には当たらないよ」と言うときマッドバルカンを使い襲って来る球体を撃ち落とし始めた。

「・・・！スバル上だ」

「スノウフロウズン」

アイスユニコーンが持っている鉾が雪を纏い振り下ろした。スバルはとっさにエドギリブレードを出し受け止めたが、吹き飛ばされた。スバルはたとうとするが地面にはっている氷に足がとられてうまく立てない。さらに、受け止めた方の手が凍っていた。

「くそ。あの攻撃もか」

ウォーロックが言うとアイスユニコーンがスバルに向かって鉾を振り下ろした。が、喉元で鉾を止めた。

「どうする？降参する？」

そのとき炎を纏った剣がアイスユニコーンに突きつけられていた。アイスユニコーンが後ろを向くとスバルが凍っていた手からファイアスラッシュを出していた。

「・・・なんで？」

アイスユニコーンは焦った様子も驚いた様子もなしに聞くとさっきまでスバルがいた場所を見た。そこにはスバルの姿はなかった。

「ヘンゲノジュツだよ。つまり君が攻撃したのは偽者だったってこと」

スバルは構えを解かずに言った。ウォーロックは出てきて「どうだ。降参するか？」と言った。

「あゝあ、降参。変わり身ってあり？」

アイスユニコーンはそう言うと電波変換を解いた。そこには瞳

と髪が薄い青色で、背はスバルと同じぐらいの女の子が立っていた。スバルも電波変換を解いた。

「君は誰？」

「・・・私のこと覚えてないの？」

女の子はスバルを見ながら聞いた。スバルは思い出そうと記憶を探った。

「ごめん。分からない」

「そっか。まあ、仕方ないかな。小学二年生の頃だったし」

「小学二年・・・あ、もしかしてアオイちゃん？」

「思い出してくれたんだ。そうだよ。久し振りスバル君」

スバルは思い出したようで、アオイと呼ばれる女の子と話し始めた。そんな中状況が呑み込めてないウォーロックはただボーとしていた。

「・・・おいスバル。この女だれだ？」

「あ、ウォーロック。この子は海月アオイちゃん。小学二年生の時の友達だよ」

「ウォーロックだね。はじめまして」

ウォーロックは気が合わないのかそっぽを向いた。

「そういえば。何で僕がロックマンだって知ってるの？」

「ああ、それね。この子に聞いたの」

アオイはそう言うのとハンターから頭に角がある白色の電波体を出した。

「スバルさんにウォーロックですね。初めまして、私はペガサス様の使者ユニコーンと申します。」

ユニコーンはスバルとウォーロックに自己紹介をした。

「え、ペガサスってあの三賢者の？」

「はい。ペガサス様からFM星で起きたことをスバル様に伝えるようにと言われて参りました」

「・・・FM星で何かあったのか？」

「実はアンドロメダの鍵が盗まれたのです」

「アンドロメダの鍵が盗まれただって」

ユニコーンはスバルの驚きように少し戸惑っている。

「いえ、鍵じゃなくて鍵の設計図が盗まれたのです」

「鍵の設計図？そんなものがあったの？」

「何でケフェウスのやろうはそんなものを持ってたんだ」

ウォーロックはユニコーンに聞くと今まで三人の話を聞いていたアオイが言った。

「・・・そのFM王だっけ？その人がどんな人かは分からないけど多分持っておきたかったんじゃない？いざとゆうときのための力を」

「話が逸れました。それで、設計図を盗んだものはFM王に不満を持つFM星人の反逆者だそうです」

「そんなことが起きてたんだ。ケフェウスは大丈夫かな」

スバルはケフェウスを心配しているようだがウォーロックは興味ないと言う顔をしている。

「それで、設計図を奪った電波体たちって何処にいるの？」

「それは・・・実はここ地球に居るらしいんです」

「!!!ち、地球に来てるの？」

「はい。それを伝えようにも地球との連絡が取れなので我々が来たのです。」

「我々ってことは、てめえ以外にも誰か来てるのか」

ウォーロックは珍しくまじめそうな様子で聞いた。

「私以外に二人。レオ様、ドラゴン様の使者のものが来ています」

「そうだったんだ。え、てっことはユニコーンはアオイちゃんのウィザードなの？」

「ええ、実はそうなんです」

スバルはユニコーンに聞くとユニコーンは申し訳ないような様子で言った。スバルはアオイを見た。

「スバル君どうしたの？」

「アオイちゃんはいいの？危険な目に遭うかもしれないんだよ」

「うーん、まあそうなるんだろうけど、私はいいわよ」

スバルは何か言いかけたがアオイに止められた。

「それから、明日このことを電波変換だっけ？それができる人たちに教えておきたいからスバル君集めてくれる？」

「だったら、明日WAXAに行こう。そこなら暁さんたちも居るし」

「分かったわ。明日レオとドラゴンの使者たちもここに連れてくるから後のことはよろしく」

「うん、明日学校が終わったらここに来るね」

アオイは「了解。じゃあ、また明日」と言うと電波変換をして帰っていった。スバルはしばらくの間立ったまま考え事をしていたよ

うだが、ウォーロックに「そろそろ帰らないと怒られるぞ」と言われて家に帰ることにした。

スバルは玄関に入ると「ただいま」と言っけてリビングに向かった。リビングにはあかねがテレビを見ていた。

「あらスバルお帰り。遅かったはね何かあったの？」

「うん。展望台でアオイちゃんにあつたよ」

「アオイちゃんって小学二年生のときにいた？」

「用があつたらしいよ」

「そう。お風呂沸いてるわよ」

「うん。分かった」

スバルはそう言うと言分の部屋に行つて荷物を置いた後お風呂に入るために降りていった。

スバルはお風呂から上がると自分の部屋にあるベットに寝ころんだ。すると、ハンターからウォーロックが出てきた。

「さつきから何考えてんだ」

「いや、ケフェウスのが心配でね。それにしても、FM星人がまたやって来るなんて」

「そうだな。けど、地球を守るためだったら戦うんだろ」

「うん。当たり前だよ」

ウォーロックは「明日遅れるぞ。さっさと寝ろ」と言った。

「分かった。お休みウォーロック」

スバルは布団に入り眠りについた。

アイスユニコーン（後書き）

戦闘描写が短かったですかね。

感想・アドバイスよろしくお願いします。

自己紹介

「コダマ小学校」

スバルは昨日ユニコーンに聞いたことを考えていたらしく遅刻ギリギリで学校に来た。教室に入った瞬間ルナに怒られたのはいうまでもない。スバルはみんなに「おはよう」と言って席に座ると先生が教室に入ってきた。

「（・・・昨日ウォーロックの言うとおりにすぐに寝ればよかった）」

スバルはまだ眠たそうにしていた。先生が出席を取り終わったようで今日の日程について話していた。

「よし。これで一通りは終わったな。じゃあ、今から昨日こられなかった転校生を紹介するぞ。入ってきてくれ。」

先生がそういうとドアからスバルより少し背が高くて頬に傷がある男の子が入ってきた。

「緋哉^{ひかい}竜牙^{りゅうが}です。これからよろしくお願いします」

「えーと、席はスバルの隣だな」

竜牙は荷物を持って席まで歩いて行くとスバルの前でとまった。スバルは竜牙に見られていることに気づいてスバルも竜牙を見た。竜牙は笑顔を作って「よろしく」と言って席に座った。スバルも「よろしく」と言った。

「よし、ホームルームはこれで終わりだ。授業の準備を忘れずにな」

先生は教室から出て行った。スバルの周りにルナたちが集まってきた。

「まったく、昨日注意したばかりじゃないの。何でギリギリで来るのよ」

「本当ですね。今日なんか遅すぎてスバル君を置いてきましたし」

ルナとキザマロが朝のことを話しているとミソラが「何かあったの?」と聞いてきた。

「うん。ちょっといろいろあってね。あ、そうだみんな今日WAXAに来れる?」

みんなは行けると言った。ツカサがスバルに聞いてきた。

「何か分かったの?」

「うん。学校が終わったら展望台で待ち合わせしてるんだ」

「そうなんだ」

「ん?けど、先生らが俺とツカサ、スバルにミソラは昨日授業に出てないから放課後補習授業があるらしいぞ。」

「え、なにそれ聞いてないよ」

スバルは本当に？と聞くように言つとツカサとミソラが「そうらしいよ」と言つた。そこにドアが開き先生が入ってきた。

「なにしている。授業始めるぞ」

みんなは席に着いた。スバルは困つたなという顔をしていた。ウオーロックはハンターからスバルに聞いてきた。

「何だ、遅れたら何かまずいのか」

「あゝうん。遅れたら委員長みたいに説教するときがあるからね」

「スバル。ま、あれだ、がんばりな」

スバルは「連絡の取り方を聞いておけばよかった」といつていた。

「よし、これで終わりだ。みんな気おつけて帰れよ。それと、スバル、ミソラ、ツカサ、ジャックは補習があるみたいだから終わってから帰れよ。」

あれからスバルはルナ、ゴンタ、キザマロに展望台に行つてアオイに遅れることを伝えてほしいと頼んだが生徒会の仕事があるようで断られた。それ以外にもいろいろ考えたがアイデアが思いつかなかった。ホームルームが終わってから、少したつと先生が入ってきた。

「四人ともいるな。じゃ、補習授業を始めるぞ。」

「あの〜先生、用事があるので補習は今度ではダメですか？」

「来週からは時間が取れなくなるから無理だな。急用か？」

「いや、急用と言うほどじゃないですけど」

「だったらいいな。始めるぞ。教科書の23ページを・・・」

先生は補習授業を始めた。ミソラ、ジャック、ツカサは授業をしっかりと受けていたが、スバルはこのあとのことを考えていて先生の話があまり耳に入っていなかった。

- 約三十分後 -

「よし、これで補習授業は終わりだ。気おつけて帰れよ」

先生は持ってきたノートや教科書を持って教室から出て行った。

「やっと終わったね」

「長かった」

「三十分ぐらいしかたってないけどね」

「え、そんなにたってるの？まずい・・・」

ミソラ、ジャック、ツカサが話している中、スバルあせり始めたと思うと荷物をまとめた。

「スバル君どうしたの？」

「ごめん。ちょっと展望台に行ってくるね」

スバルは荷物を持つと走って行った。ミソラは「ちょっと、スバル君待つてよ」と言ってスバルを追いかけた。ツカサとジャックはどうしたんだろと思いつながら荷物を持ってスバルたちを追いかけた。スバルは廊下を走って角を曲がったとき誰かとぶつかった。

「イタタタ・・・」

「ご、ごめんなさい大丈夫ですか？あ、」

スバルがぶつかって謝ったときミソラたちが来た。

「大丈夫スバル君？あ、たしか君は緋哉君だったよね」

ミソラはスバルが大丈夫か聞いた後ぶつかった方の相手を見て言った。竜牙はスバルとぶつかったところを手で押さえていた。

「・・・なんなんだよいきなり飛び出してきて」

「ごめん。緋哉君ちょっと急いでいて、その・・・」

緋哉はため息をつく、「べつにいいよ」と言っ立ち上がった。

「ところでやけに急いでいたようだけど何かあったの？」

「あ、やばい速く行かなきゃ」

スバルは立ち上がるとまた走り出した。緋哉はミソラたちに「何があったの・・・？」と聞いた。

「うーん、まあ、話は後にしてスバル君を追いかけてようよ」

ツカサが言うところミソラ、ツカサ、ジャックは後を追いかけた。緋哉はまたため息をついて四人の後についていった。その途中に仕事が終わったのかルナたちと合流した。

スバルが学校の校庭に出て校門に向かった。スバルが校門から出て展望台に向かおうとしたとき声を掛けられた。スバルは声のした方を見るとアオイ達がいた。アオイはものすごい不機嫌な様子だった。アオイの近くには藍色の髪が肩まであり、寂しそうな目をしている男の子と瞳が赤色で髪は黒の力が強そうな男の子二人がいた。

「何なのよ。学校が終わったらすぐにWAXAいくって言ったのにどれだけ待たされたと思ってるのよ。」

「アオイちゃんごめん。ちょっと急用ができてそれで・・・」

「うるさい！もう、言い訳するところは変わってないんだね」

スバルは遅れた理由を説明しようとしたが、言い訳扱いされた。スバルは肩を叩かれたようで振り向いて見るとミソラ達が出た。ミソラとルナは不機嫌そうだった。

「ねえ、スバル君子の人たち誰なの？」

「あ、もしかして響ミソラちゃん？わあ、本物だ。あれ？でもな

んで居るの？」

ミソラがスバルに説明を求めたときアオイがミソラの手を取っていた。

「おい海月。先に自己紹介をした方がいいんじゃないのか？俺もまだアレスに事情を聞いただけでよく分からないんだが」

アオイの近くにいる赤い瞳をした男の子が言った。

「それもそうだね。私は海月アオイ。よろしく」

「俺は赤瀬宵磨あかせしやうま」

「僕は空慰照矢そらいであや」

アオイ、赤い瞳の男の子、藍色の髪をした男の子の順に言った。

「星河スバルです」

「響ミソラです」

「コダマ小学校生徒会長の白金ルナよ」

「俺は牛島ゴンタだ」

「最小院キザマロです」

「・・・ジャックだ」

「えっと、双葉ツカサです」

「コダマ小学校に転校してきた緋哉竜牙です」

アオイたちが自己紹介したのでスバルたちも順番に自己紹介した。自己紹介が終わると宵磨がスバルに近づいた。

「星河スバルってことは君が英雄のロックマン？」

「あ、えっと、それは・・・」

スバルは宵磨のいきなりの質問に対して竜牙を見ながらどう答えようかと考えていた。スバルの視線に気づいたようで竜牙は落ち着いたまま言った。

「安心して。誰にも話さないよ」

「ありがとう。うん、僕がロックマンだよ」

スバルは竜牙にお礼を言々と宵磨の質問に答えた。

「ところでさ、スバル君ここにいる人全員関係者？」

「うん。一応関係者だよ」

「ねえ、僕らのウィザードも紹介しておいた方がいいんじゃないの？」

黙っていた照矢が言った。

「それもそうだね。ウィザードオン」

アオイがユニコーンを出すと宵磨と照矢もハンターからウィザードを出した。宵磨のハンターからはレオに似た姿のウィザードが、照矢のハンターからは灰色の翼があるウィザードが出てきた。

「ずいぶん懐かしいやつが揃ってるな」

「何だ、牛カルビにカラスもいるのか」

レオに似たウィザードが言うとゴンタとジャックのハンターからオックスとコーヴァスが出てきた。

「ブロロロ・・・今すぐ丸焼きにしてやろうか？」

「ケケケ・・・アレス今すぐバラバラにしてやろうか？」

「何だよオックスにコーヴァス。ちょっとしたジョークじゃないか」

コーヴァスとオックスは「うるせえ」と言っアレスと呼ばれたウィザードを追いかけた。ユニコーンと灰色のウィザードはその光景を見てため息をついていた。スバルたちは三体のウィザードの追いかけてこを啞然とした状態で見ていた。

「・・・ねえ、ウォーロック。あの、コーヴァスとオックスが追いかけている電波体って誰？」

「あいつは、アレス。FM星にいた頃の知り合いだ。ああゆう風にしょっちゅうからかわれた」

「それと、白い角がある電波体がユニコーン。灰色の翼がある電波体がディムネスよ」

ハープがスバルたちに紹介するとユニコーンとディムネスが挨拶した。

「さて、自己紹介も終わったことだし、あとはWAXAだけ？いきながら話そうよ」

「それもそうだね」

みんながアオイの意見に賛成するとまだ追いかけてくをしている三体をハンターに戻してスバル達はWAXAに向かった。

自己紹介（後書き）

勉強が忙しくなり投稿がさらに遅れるかもしれません。

感想・アドバイス等よろしくお願いします

動き出すものたち

- ウェーブライナー -

今スバル達はウェーブライナーの中で楽しく話し合っている。ミソラとルナはアオイと仲良くなり、宵磨はジャック、ゴンタ、竜牙と気があつたらしくウィザードのことについて話していた。キザマロは照矢がいがい物知りだったようでマニア的な話をしていた。オックスとコーヴァスはアレスをまだ追いかけていて他のウィザードはそんな光景をあきれたように見ていた。スバルがみんなを見ているとツカサが言った

「聞いたよ。今回の事件について」

「え、誰から？」

「ジェミニから。ウィザードたちのほうが理解が早いと思ったみたいで、ユニコーンたちが話してくれたみたいだよ」

「そうなんだ」

「ところでさ。スバル君ってアオイちゃんと知り合いみたいだったんだけど、どうゆう関係？」

「どうゆうって、二年生の友達だったんだよ」

「へへえ、そうだったんだ」

スバルとツカサはWAXAにつくまで雑談などをしていた。

- W A X A -

WAXAにはいるとスバルはサテラポリスの人に「暁さんに会いたいですけどどこにいますか」と聞き教えてくれた部屋に向かった。部屋に入ると中は真っ暗で誰かが寝ているようだった。ジャックが電気をつけると机でうつぶせになって寝ていた暁が目を覚ました。スバルたちが暁の顔をみるとほとんどみんながヒイタ。

「あ、暁さん。どうしたんですか？まるでオバケですよ」

「・・・何だお前らか。しかたないだろう二日続けて寝ずに仕事していたんだ。ついさつき終わって寝ていたのに起こしやがって。それに、オバケはひどいだらブツブツ・・・」

ミソラが言ったことに不満を持ったのか一人でいろいろ言い始めた。アオイはスバルに近づいて聞いた。

「ねえ、この人がサテラポリスのエース暁さん？」

「うん。なんだか、仕事が大変だったみたいだね」

すると暁はさっさと寝たいのか「用はなんだ」とぶっきらぼうに聞いてきた。

「え」と、FM星人の数名がこの地球に来ていることにつてなんですけど」

スバルが言うと暁は眠気が消えたのか真剣な顔つきになった。

「FM星人が地球に？本当なのか」

「はい」

「分かった。ちょっと待ってる。」

暁はハンターを取り出してヨイリー博士と長官を呼んだ。

「今、ヨイリー博士と長官を呼んだから少し待っていてくれ。ところでスバル。」

「何ですか？」

「なんだか俺が知らないやつがいるようなんだが誰だ？」

暁が言うアオイ、宵磨、照矢の順に自己紹介した。

「でこつちが、僕らの学校に転校してきた・・・」

「緋哉竜牙だろ。」

「えっ、暁さん知ってたんですか？」

「ああ、前に少しな」

暁がそう言ったのでスバルたちが竜牙を見ると「いろいろあつてね・・・」と言った。そこに、ヨイリー博士と長官が入ってきた。

「暁くん何かあったのかい？」

「あら、みんないらつしゃい。」

「ヨイリー博士、長官こんにちは」

スバル達が挨拶すると暁はアオイ、宵磨、照矢、竜牙を紹介した。

「さて、スバル分かったことを教えてくれ」

「はい」

スバルはまずアオイたちのウィザード達がAMせい of 三賢者の使者であること。FM星でアンドロメダの鍵の設計図が盗まれたこと。地球との連絡が取れなくなったためユニコーンたちが地球にきたこと。設計図を盗んだFM星人が地球に来ていることを話した。

説明し終わると長官は「そうか・・・」といって今後のことを考えていた。すると暁がユニコーンたちに質問した。

「その設計図なんだが、アンドロメダの鍵を作るのに最低どのくらい掛かる？」

「材料はあまり見ることがない物ですから集めるだけで多分一ヶ月ちよつとはかかるでしょう」

「それに、エネルギーを吸収したりするために膨大なデータが必要ですからさらに掛かりますね」

「材料、膨大なデータを集めていたらは一週間ちよつとぐらいですね。組み立ては簡単と聞いていますから。」

ディムネス、ユニコーン、アレスの順に答えた。長官が言った。

「つまり、相手の人数は分からないが、材料・データを集めるだけで一ヶ月掛かり、鍵を組み立てるのは一週間で出来るということだな」

ユニコーンたちは「はい」と答えた。

「それに、ユニコーンちゃんたちの話を聞くとFM星人たちは一週間ぐらい前に地球に来たってことね」

ヨイリー博士が言うとユニコーンたちは否定した。

「いえ、FM星人が来たのは遅くて二日前です。鍵の設計図が盗まれたとレオ様に聞いてすぐに我々も地球に向かったんですから、一週間前なんてことはありません。」

「だが、FM星と連絡が取れなくなったのは一週間前なんだ」

暁の言った事実にはディムネスは「そんな、バカな」といった。スバルは「どうゆうこと？」と言った。

ユニコーン、ディムネス、アレスは地球との連絡が取れなくなったのは二日前ぐらい前なのに、WAXAはFM星との連絡が取れなくなったのは一週間前というのだ。FM星から地球に来るのに五日も掛かることはない。しかも今はノイズウェーブもほとんどの電波体が使いうことができ、ノイズウェーブを使えば二日ぐらいあればFM星から地球に行くことが出来る。

「・・・お前らは地球に来るのにノイズウェーブを使ったよな？」

「はい。それを使えば地球にはすぐにいけると聞いていたので」

暁の質問にアレスが答えた。

「ノイズウェーブになにかあるな。長官、こんど調査班をだしていいですか？」

「いいだろう。」

長官は暁のノイズウェーブ調査を許可した。

「あ、それと。スバルたちには悪いんだがまた力を貸してくれないか？」

「つてことは、遊撃隊を復活させるんですか？」

ミソラが手を上げて聞いた。

「ああ、FM星のことを聞くとWAXAだけだったら無理だと思っただ。今考えているメンバーを言うぞ。」

暁はスバル、ミソラ、ゴンタ、ジャック、ツカサ、アオイ、宵磨、照矢を順番に呼んでいった。

「今呼んだ中で無理だというやつはいるか？」

「あの、僕戦いとかそうゆつの得意じゃないんですけど・・・」

暁の問いに照矢はおそろおそろ聞いた。

「得意じゃなくていいさ。戦いは経験だからな。他に質問とかないか？」

スバル達は何も言わずみんな覚悟を決めたような顔つきでいた。

「よし、サテラポリス遊撃隊再結成。さっき言ったメンバーの中に俺とティアも入るからな。今日はありがとう。気をつけて帰れよ」

暁はそういってなぜかジャックも連れて部屋から出て行った。ジヤックは「おい、何で俺も連れて行くんだよ」と叫んでいた。

「そういえば。ヨイリー博士ウイルスの大量発生の際にあった装置の解析どうでしたか？」

「それがまだなのよ。がんばってはいるんだけどね。」

「装置って何ですか？」

スバルとヨイリー博士が話していると、話の中に出てきた装置についてアオイが聞いてきた。スバルは昨日あったことを説明した。説明すると宵磨が言った。

「そんなことがあったのか。それって地球に来たFM星人と関係があるのか？」

「それはまだ分からないわね」

「ヨイリー博士。私の友達に装置・データーの解析とかについて

詳しいと言つか、そうゆうことが得意な人がいますけど、よかつたら紹介しましょうか？」

「おい、海月。まさかあいつか？」

「あたりまえでしょう。彼意外誰がいるのよ。」

「まあ、確かにあそこまで行けば得意というより天才だな」

「その子名前は何ていうの？」

「奏助。^{そうすけ}雪島奏助です」

「奏助ちゃんね。こんど紹介してね。それじゃあ、私はまだ仕事があるから行くわね。」

ヨイリー博士はアオイと宵磨との話が終わるとヨイリー博士は部屋から出て行った。長官はスバルたちを出入り口までおくと「それじゃあみんな、気をつけて帰るんだよ」といった。

スバルたちがWAXAからだと照矢は「僕、用事があるから先に帰るね」と言つて電波変換して帰つて行った。すると、宵磨も「俺もこれから仕事があるから先に帰るな」といつて照矢と同じで電波変換をして帰つていった。スバル達はウェーブライナーまで歩きながら話をしていた。

「ねえ、アオイちゃんつて宵磨君と知り合いなの？」

「うん。同じ学校だからね」

「そういえば、アオイちゃんはどこに住んでいるんですか？」

ツカサの質問に答えたあとキザマロが聞いてきた。

「えっと、私と宵磨君はリステータウン。それと、照矢君はたしかフレイグタウンだったかな？」

「リステータウンってたしか、今度おれたちが社会見学で行くところだったよな委員長。」

「え、社会見学？」

「・・・スバル君。まさか、先生の話聞いてなかったの？」

ルナは社会見学のことを聞いていなかったスバルを今にも怒り出しそうな顔で見た。

「あ、えっと、事件のことを考えていて聞いてなかったというか、なんと言つか・・・」

「まったく。明後日の土曜日、リステータウンにある『ループ・インフォメーション』を見学することになったのよ」

「今日の放課後にその打ち合わせがあったんですよ」

ルナが説明するとキザマロが言った。

「え、明後日なの？ 私たちも授業で『ループ・インフォメーション』を土曜日に見学することになってるの」

「じゃあ、一緒に見学することになるのかな？」

「そうだいいね」

スバル達はそれからウェーブライナーに乗り家に帰るまで楽しんで話していた。

- ??? -

外は満月が町を照らしている。その光が窓から差し込んでいた。ここは廃墟となった工場らしく古くなってボロボロの機械が沢山ある。機械の上に突然影が現れた。影は一つではなく五つあり全部電波体の様だ。沈黙が支配している中、一人の電波体が口を開いた。

「反逆者が揃うのも久し振りだな。まさか、一週間もあつたのにパートナーが見つかっていませんなんてことはないよな？」

「連絡したでしょ。それにしてもサイレント、あなたに合う周波数を持つ人間がいたなんて意外だったわ。」

「スウィフトさんよ。俺をからかってんのか？」

最初に話したのはサイレントと呼ばれているらしく殺気のコもった低い声で言った。一方サイレントをからかったらしい電波体はスウィフトというらしく少し声が高いようだ。

「二人とも話はそれぐらいにして速く話を終わらせましょうよ」

「速く終わらせたい理由はパートナーが心配だからか？えらく地球^{うち}の生活に慣れているようだな」

サイレントは冷たく言い放った。

「・・・ところで僕らを集めた理由は何ですか？リーダー」

名前の分からない電波体が会話を聞いていた電波体に向かっていった。

「そのことなんだがな。A M星の三賢者の使者のやつらがロックマン達に接触した」

「へへえ、意外だね。てっきりF M王が来ると思ったのに」

スウィフトが残念そうに言うとサイレントが言った。

「使者とかいうやつが来たってことはやっと暴れることが出来るんだな。さあてどこの人間どもを血祭りにしてやるのかな？」

「サイレント、悪いがお前の出番は後だ」

「ちつ、せつかく楽しくなってきたと思ったのによ」

リーダーと呼ばれる電波体が言うとサイレントは短剣を仕舞った。

「やつらはこの土曜日にリステータウンにあるアドミストとかいうところに行くようだ。リミスお前が行ってくれないか？」

「・・・僕ですか。まあいいですけど、パートナーがなんて言うか

な」

「その点は何とかしろ。目的はやつらの力量を量ることとそこにある『ループインフォメーション』の情報処理データなどを奪ってきてくれ」

「・・・了解。何とかしてみます」

「今日の話し合いはここまでだ。みんな帰っていいぞ」

リーダーの電波体が言うともうそこには影は一つもなかった。

動き出すものたち（後書き）

暁の顔は想像にお任せします

社会見学

・コダマタウンー

今日は土曜日。スバル達は社会見学でリステータウンに行くため学校の校庭に集まっていた。クラスの人が集まってる中ルナはなぜか今にも怒りそうな態度を取っていた。

「遅い、遅い、遅い・・・スバル君、ゴンタはまだ来ないの？」

「う、うん。今キザマロが呼びに行っているよ。」

どうやら、ゴンタが寝坊して、キザマロが起こしに行っているみたいだ。

「それにしても遅いねゴンタ君。もうすぐ出発なのに。」

ミソラは校庭を見渡しながら言った。ツカサとジャックはクラスのしおりを作るのや先生たちの荷物を運ぶのを手伝っているようだ。スバルたちが話していると遠くからキザマロが走ってくるのが見えた。近くにはゴンタもいた。

「あ、ルナちゃん二人とも来たみたいだよ」

ミソラがルナに言うときザマロとゴンタが息を切りながらスバルたちの近くに来た。

「はあはあ・・・い、委員長。ゴンタ君を連れてきましたよ」

「・・・俺もう歩けねえぜ」

するとゴンタは地面に座った。

「ゴンタ！あなたもいつになったら遅刻ぐせが直るのよ」

「す、すまねえぜ・・・」

ルナが気の遠くなるような説教を始めた。ルナの説教が始まって少しすると先生たちがクラスのみんなを集めて出席をとり始めた。

「みんないるか？遅刻しているやつはいないか？」

「あれ？先生、緋哉君がいないようなんですけど」

先生が出席を取っているとスバルが竜牙が見あたらないことにきずいた。

「そっいえば竜牙の姿が見えないな。誰か知ってる人はいないか？」

みんなに聞くと校門の方からこっちに向かって走ってくる人が見えた。

「はあはあ・・・すみません・・・遅れました・・・」

「おい、緋哉遅いぞ。寝坊でもしたか？」

「はあ、まあ、そんなところです」

緋哉は先生に理由を言々とスバルの近くに來た。

「おはよう。スバル君にみんな」

「おはよう緋哉君。珍しいね寝坊するなんて」

「うん。昨日いろいろあつて夜更かししちゃったんだよね」

「次から送れずに來なさいよ」

竜牙はルナの注意に軽く受け答えすると先生によばれたらしく先生のところに向かった。

各クラスの出席確認が終わったみたいで生徒たちはバスの中に入っていた。

バスに乗ると先生が言った席に座った。スバルの隣はミソラで、ツカサは緋哉の隣、キザマロはゴンタの、ジャックはルナの隣に座った。クラスのみんなが席に座るとバスが動き出した。

「よし、リステータウンまで時間があるからみんな自由にしていっていいぞ」

「ねえ、スバル君。リステータウンってどんなところなんだろ
うね」

「うん、本で少し見たことがある程度だからよく分からないよ」

「そのことなら僕にお任せを」

スバルとミソラが話していると前の席にいたキザマロがスバルたちのほうを向いてリステータウンについて説明し始めた。

「リステータウンは世界で有名な企業が沢山あるところです。僕らの持つているハンターも作られているそうですよ。そんな大企業がある中でアドミストという会社にループインフォメーションがあるんです。それから・・・」

「キ、キザマロ。リステータウンについてだいたい分かったからもういいよ」

スバルはキザマロが暴走し始める前に話を止めた。キザマロは「そうですか」と言ってゴンタと話を始めた。

「・・・スバル君もあなることがあるよね」

「え、そうなの」

「うん。星について話し始めるとなるよ」

「そうかな・・・」

スバルとミソラはリステータウンにつくまで楽しそうに話し始めた。

・リステータウンー

リステータウンにはいると周りには大きな会社が沢山あり多くの人が行き来していた。バスが駐車場にとまるとスバルたちがバスか

ら降りてきた。クラスごとに並び先生たちの指示を待った。前には先生たちの近くにアドミストの従業員の人たちがいて何か話しているようだった。話が終わると先生が言った。

「みんな忘れ物はしていないな。これからしおりに書いてある通り各班に分かれてアドミストの人たちに中を案内してもらいます。自分たちが調べることをしっかり聞いたりするんだぞ。時間になったらここに集合分かったな？」

みんなは「はい」と言うとはに分かれて案内してくれるアドミストの人たちに挨拶をし、中に入っていた。

「僕は西村さとし。僕が君たちの案内役であつてるよね？」

「はい。私は白金ルナと申します」

ルナにつづきスバル達も自己紹介をした。

「すまないね。本当はもう一人いればいいんだけど今はとても忙しくてね。それに、君たちと同じ団体が来ててね。迷子にならないように気おつけてね」

西村はスバルたちに言うアドミストの中に入っていたのでスバルたちはあとについて行った。

・アドミストー

「ここが情報処理室。ここで、ニホン全国から送られてくる情報や映像などのデータを整理するところです」

西村に案内されてきた部屋はコンピュータが百台近くあり従業員の人たちが画面と向き合ってキーボードを叩いていた。中には他にもスバルたちと同じ生徒たちもいた。

「うわゝ、機械が沢山ある」

「人も沢山いるね」

「今中に入ったら仕事の邪魔になるんじゃない？」

「そう言われてみればそうよね。西村さん他のところを案内してもらいますか」

「分かった。じゃあ、ここはまたあとで次いこうか」

それからスバル達は西村に他の部屋を案内してもらった。廊下を歩いているとセキュリティがとても厳しそうなところについた。

「このさきには午後に君たちが見学するループインフォメーションがあるんだ。」

「へえゝ、この先にあるんですね」

緋哉が言うとキザマロがこのセキュリティシステムについて聞いた。西村が説明していると放送がなった。

「あ、もうこんな時間かそろそろ昼食にしようか。食堂室に案内するね。」

食堂室に移動しているときツカサが質問した。

「あの、西村さん。忙しいのにどうして二校同時に見学させてくれたんですか？」

「違う学校の人たちとも交流してもらいたくてね。なかなかうまくいかないんだけどね」

「そうなんですか」

「さあ、ついたよ。ここが食堂室。ついたときに貰った券を使つてね」

スバルたちが中に入ると他の人も昼食を食べに来ていて沢山の人^がいた。

「うわ、多すぎでしょ。」

「だったら、ジャック、ゴンタ。あなたたち席を取っておいて」

「委員長そりゃないぜ」

「何で俺も！？しかも俺らの分は？」

「だったら僕が貰ってきてあげるよ」

ジャックとゴンタはツカサに券を渡すとしぶしぶ席を取りに言った。

スバルたちが昼食を貰うとジャックたちのところに行った。席にはジャックたちのほかに三人いた。

「あ、スバル君」

「アオイちゃん。それに宵磨君」

席にはアオイと宵磨、それとスバルより少し背の低い男の子がいた。

「えっと、そっちの人は？」

「ああ、前に言っただしょ。雪島奏助君」

アオイは隣にいた男の子を紹介した。

「えっと、雪島奏助です。呼び方は自由でいいよ」

「僕は星河スバル。よろしくね雪島君」

それから、ミソラたちも来ると雪島と挨拶をした。それから、スバル達は昼食を食べ始めた。

「ところで・・・アオイちゃんたちは・・・ここで何してたの？」

「ミソラちゃん、食べながら話すのやめた方がいいよ」

「はは、確かに。私たちはここの一階にあるコンピューターを使って調べものしてたの」

「へへえ、一階で調べ物が出来るんだ」

みんなは昼食を食べ終わるまで楽しく雑談をした。しばらくすると放送がかかった。

「コダマ小学校の皆さん午後からの見学は一時半からです。集合場所は・・・」

「あ、もう少し時間があるね」

「だったら、みんなでいろいろ見て回らない」

ツカサの意見に全員賛成して、食器などを片付けると食堂室から出て行った。

ループインフォメーション

あれから集合時間が来たのでアオイ達と別れて集合場所に向かった。クラスみんなが集まると社長の西村さんが午後の案内を始めてくれた。

「では、みなさん今からここアドミストが誇るループインフォメーションの部屋に案内します。」

西村は服のポケットからカードキーを出すと近くにあった機械に通した。すると、ドアが音を立てて開くと目の前には円柱の形をした巨大な機械ループインフォメーションあった。ループインフォメーションの周りには画面が沢山出ていて字がびっしりと書かれているのもあれば映像がながれているのもあった。

「このループインフォメーションは一秒に数百個のデータを処理し保存しています。ここで保存したデータはサテラポリスの捜査や裁判などで使われています。」

クラスみんなが周りを見て回り始めたのでスバルたちも見て回った。

「写真や本で見たのよりもやっぱり実物の方が大きいね」

「ツカサ君の言うとおりだね。やっぱり迫力が違うね」

「緋哉君、ツカサ君。話もいいけどちゃんと調べなさいよ」

ルナが二人が話しているのを注意すると話を止めてしおりやノ

―トにメモを取り始めた。

「ん？おいキザマロ。これって何だ？」

ゴンタは近くにあったボタンを見ながら言った。

「え、ああ、それは多分・・・」

キザマロが言いかけたとき他にクラスの人がゴンタにぶつかった。ぶつかった衝撃でゴンタがボタンを押した。すると警報が鳴り壁だったところが開き中から警備ロボットが出てきた。警備ロボットの手からは電気が流れていて中にいた生徒たちを取り囲んだ。

「シンニユウシャハッケン。シンニユウシャハッケン。ハイジヨシマス」

「な、なんだこれ」

「俺ら侵入者だって。それに排除されるみたいだね」

「緋哉君、のんき言わないでください」

「ちょっとゴンタなにやってるのよ。」

「こうゆうのは普通起こした人が何とかするよね？」

「ツカサのゆうとおりだな。おいゴンタ。お前が何とかしろ」

「無理に決まってるだろ！！」

ゴンタは半分なきそうに叫んだ。ロボットが少しずつ近づいてきて今にも襲い掛かるうとしたときロボットに流れていた電流が消えて何事もなかったようにもといった場所に戻っていった。

「みんなごめんね。止めるのが少し遅れちゃったね。大丈夫だった？」

「は、はい。なんだったんですか、今の・・・」

「ああ、ここにあるデータを引き出すには暗号が必要だね。この中にあるデータは使い方を誤れば兵器に変わるからね。さっきのはいざとゆうときのための防犯装置」

西村はループインフォメーションを指しながら説明した。するとルナが手を上げて質問した。

「あの、その暗号は誰が知ってるんですか？」

「ここの社長だけだよ。さっきも言ったとおり、ここのデータを使えば簡単に兵器に変わるからね。もちろん外部に漏れないようにセキュリティーもしっかりしてるよ。」

西村はそう言うとき「さて、そろそろ時間だからみんな出て」とみんなに声を掛けた。みんなが移動しているとき緋哉がループインフォメーションを見たまま動いていないのをスバルがきずいた。

「どうしたの緋哉君。みんな移動してるよ」

「え？・・・あ、ごめん、ごめん。ちょっとここのデータが気になっ
てね」

「どうして？」

「さっき、社長さんが言ったでしょ。『ここにあるデータは兵器に変わる』って」

「うん。それがどうかしたの？」

「おかしくないか？何でそんな物を一箇所にまとめておいてあるんだ？普通はばらばらにしたりするんじゃないのか？」

「確かにそうだね。けど、ループインフォメーションが出来たのって、サテラポリスの捜査や裁判、過去に起きた犯罪とかを保存するためじゃないの？本にはそう書いてあったけど」

「他にもあつたら？何かをするためにお偉いさんたちがニホン全国データを集めてるとしたら？」

「まさか。そんなことはないと思うよ・・・」

スバルは小さく笑いながら言った。

「・・・そうだね。考えすぎだな」

緋哉とスバルが話しているとミソラが戻ってきた。

「二人ともなにしてるの。ドア閉めるらしいよ」

「あ、ごめん。すぐに行くよ」

スバルは答えるとそのまま出口のドアに向かった。緋哉は少し目の前にあるループインフォメーションを見るとスバルたちのあとを追った。

今は見学のときお世話になった社員の人たちにお礼をいつている。お礼を言うのはもちろん生徒会長であるルナだ。終わると西村が少し話すと、みんなは「今日はありがとうございました」と言った。

スバルたちがバスに向かって移動しているときアオイたちとであつた。

「お前らも今帰りか？」

「うん。来たときに乗ったバスのところにむかうところなの。ところで、雪島君の姿が見えないんだけど」

ミソラは辺りを見ながら言った。

「ああ、あいつならトイレだつてさ。中にいると思つぜ」

「ねえ、ついだからこのままWAXAに行かない？」

「うん。でも、これから学校に帰ってやることあるしね」

「おい、その八人なにやってるんだ。おいていくぞ」

「すみません。今行き・・・」

ルナが先生に言っているときアドミストから警報が鳴り響いた。

スバル達はアドミストの方角を見ると従業員らしき人たちが急いで戻っていくのが見えた。

「・・・何かあったみたいだね」

「どうする？状況を聞きに行く？それともそのまま帰る？」

「緋哉君、そんなこと聞かなくても分かるでしょ」

ルナがあきれたように言った。

「行ってみよう。」

「だね」

「そうだろうと思ったぜ」

スバルを先頭にアドミストに向かった。

「おいおい、先生たちにはなにもいわずかよ。・・・せんせーい、アドミストがどうなっているか気になるんで見てきます」

緋哉は少し先の方にいる先生に向かって叫ぶとスバルたちのあとを追って行った。

・アドミストー

社長の西村に状況を聞くため司令室に向かった。司令室は見学のときに案内されたのですぐに行くことが出来た。途中、従業員たち

にぶつかつたりしてはぐれたときや途中立ち入り禁止の札が合つたが無視したり色々あつたがなんとか全員司令室に行くことが出来た。

「西村さん！」

「ん？君たちは確か・・・何でここにいる。ここは立ち入り禁止だつたはずだぞ」

「それより、何があつたんですか？」

「アオイちゃんもいたのか。ループインフォメーションのなかに大量のウイルスが発生したんだ。今コンピュータに組み込んであるウイルス撃退用のプログラムを使ってデリートしているんだけどな・」

「だけど？」

「数が減らないんだよ。デリートし始めて五分はたっているのにウイルスの数が減らないんだ」

「ウイルスの数が減らないって・・・まさか！」

「多分、スバル君の考えている通りだと思うよ」

「行つてみるしかねえな」

「・・・西村さんループインフォメーションのアクセスキーを貸してもらえませんか？」

「何を言ってるんだ。アオイちゃん、君だって分かつてるはずだ。

アクセスキーは渡せない」

「でも、このままじゃ・・・」

ミソラはアオイの頼みを断った西村に言いかけたとき放送がなった。誰かがかけているわけではなく自動でかかったようだ。

「シャッターが降ります。付近にいる人は気をつけてください。シャッターが降ります・・・」

放送がかかると今まで鳴っていた警報とは別のが鳴り響いた。すると、司令室の出入りのシャッターが降りた。

「え、ちよつと。閉じ込められた？」

「おい、どうなってる？」

ルナが叫ぶと西村は従業員の一人に聞いた。

「はい。ウィルスのせいで防犯用の装置が壊れたみたいです。それで、警備ロボ等が制御できません。さらに、ウィルスデリートの装置もそろそろ限界です」

「西村さん!!」

考え込んでいた西村にアオイが言った。

「・・・渡したところで君たちになにが出来るんだ」

「僕達はサテラポリス遊撃隊です」

スバルが言うと西村はスバルの顔を見た。

「僕達が何とかしてみます。だから、アクセススキーを貸してください」

「・・・君たちの名前を聞いたときに気になってはいたんだけど。分かった。これがアクセススキーだ」

西村はスバルにアクセススキーを渡すと今度はみんなを順番に見た。

「君達も遊撃隊の一員なのかい？」

「私とキザマロ、それと緋哉君は違いますけどね」

「アオイちゃんきみもか・・・」

西村は心配そうな顔でアオイを見た。アオイは笑顔で言った。

「気にしなくて大丈夫ですよ。それより、行こう。手遅れになる」

「そうだね。電波変換」

スバル達は光に包まれるとそのばにはいなかった。

メール

・ループインフォメーションの電腦―

この電腦の中に入るとき、ループインフォメーションがある部屋を見ると警備ロボットたちが部屋から出て行くところを見たがウィルスをデリートするのが先と判断して電腦の中に入った。

「うゝわ。いるねゝ」

「・・・異常だろう」

宵磨が電波変換した姿は黄色のアーマーをつけた赤色の身体をしていて、名前はアレスレオパルド。手には大岩を簡単に砕くような両手剣を片手で持っていた。

「ウォーロック。装置がありそうなところ分らない？」

「分らん。ウィルスの数が多すぎだ」

「装置のありそうなところが分かったぞ」

「え、本当？」

アオイが宵磨に聞くとアレスが出てきた。

「ここから少し先に曲がり角があります。その先にここにいるウィルスとは違う周波数を感じます。やっぱり、こうゆう器用なことはお前には出来ないよな？ウォーロックちゃん」

「・・・てめえ、後で覚えてろよ」

ウォーロックは殺気を放ちながら言った。スバル達は気にせず、ウィルスを倒しながら先に進んだ。

「氷華連月」

「炎滅斬」

アオイは鉾を器用に振り、宵磨は炎を纏った両手剣を振りウィルスを一気にデリートした。

「あの二人やるな」

「僕たちも負けてられないね」

スバルたちも二人に負けじとウィルスを倒していった。

「そこにいるウィルスの大群の中にあると思います」

「だってさ。バーニングタワー」

宵磨は両手剣を振るとウィルス達の周りから三本の炎の柱が立った。宵磨の攻撃に続くようにスバルたちもウィルスの大群に向かって攻撃した。煙がはれると、攻撃したところにはバリアに包まれた装置があった。

「・・・なんか面倒な機能が追加されてやがるな」

「だね」

ジャックの言ったことにツカサが同意した。宵磨はいきなり装置に向かって走り出すと、剣を装置に向かって振った。剣が装置に当たろうとしたとき鈍い音がしたと思うと宵磨が弾き飛ばされた。宵磨は空中で体制を立て直してうまく着地した。

「おい、宵磨。さっきから無茶しすぎだ」

「悪いなジャック。けど、こっちは経験が少ないもんでね。それに、俺は手間のかかるやり方は嫌いなんだよね」

宵磨はそう言うのと再び装置に切りかかったがさっきと同じように弾き飛ばされた。

今度はスバルたちも攻撃したがバリアを壊すことは出来なかった。

スバルたちが装置を壊そうと攻撃をしている間さらに増えたウイルスは、ウィザードたちが何とかしていた。

「なかなか壊れないね、このバリアー」

「このままだと、まずいね」

スバルは同じウイルスを同時に攻撃できるシンクロフックを使ってウイルスを倒しているとハンターが鳴った。

「こんなときに・・・もしもし」

「スバル君、聞こえる？」

かけてきたのは司令室にいたルナで、とてもあわてていた。

「司令室で使ってたウイルスデリート用のプログラムが全部壊れたみたいなの」

ルナは早口でスバルたちに今の状況が分かるように説明した。どうやら、西村達がウイルスをデリートするのに使ってた装置が壊れて守れなくなっただけらしい。すると、アオイが叫んだ。

「もう！こっちも大変なのに！雪島君がいれば何とかなるかもしれないのに。どこにいるのよ！」

アオイが叫ぶと西村が聞いてきた。

「雪島の子も来ているのか？」

「あのやろつ。まさか、外にいるんじゃないだろうな」

「あの子が着てるなら・・・こっちで探して・見・・・ザア・・・ザアアア・・・」

西村が何か伝えようとしたとき雑音が出てきて声が聞こえなくなった。

「西村さん！なんていったんですか！？」

「回線が切られたみたいだね。外との連絡が取れなくなってるよ」

「！ツカサ君、後ろ！」

スバルがツカサに攻撃しようとしているウイルスに気がついた。
ツカサはエレキソードを出すとウイルスを真つ二つに切った。

「大丈夫だよ」

「この程度のやつらに負けるわけないだろ」

ヒカルが言うとウイルスをデリートしていった。

「・・・ねえ。ここに装置があるってことは、これを置いた人がいるってことだよね？」

ミソラは言うつと宵磨がぶっきらぼうに答えた。

「そうに決まってるだろ。機械が勝手に歩いてくるわけないだろ。それに、ここのセキュリティが厳しいこと知ってるだろ」

「ってことは、セキュリティにきずかれずに入ってきたってこと？」

「そうだと思うけど、それがどうかしたの？ミソラちゃん」

「いや、ただね。西村さんが言ってたじゃない。ループインフォメイションにウイルスが入ってきたって」

「・・・電波体が入ってきたとは言ってなかったね」

「うん。ちょっとそれが気になってね。それに、こんなに広い電脳なのにウイルスもここにしかないみたいだし」

スバルはミソラの言ったことを聞くと緋哉と話していたことが頭に入ってきた。

「・・・！まさか。」

するとスバルはウィルスの大群の中から抜け出すと奥へ行こうとした。するとジャックが叫んだ。

「おい、スバル。どこに行く気だ」

「ごめん、みんな。ちょっと、奥のほうを見てくる」

「ちょ、ちょっと。スバル君」

スバルはそう言うのと奥のほうへ進んでいった。アオイもウィルスの大群の中から抜け出しスバルのあとを追って行った。

残ったミソラたちは、ともかく手分けをしてウィルスを倒していた。

「ちょっと、待ってよスバル君。どうしたの？」

「アオイちゃん。何で来たの」

「それより、いったいどうしたの？ウィルスを倒さないといけないのに突然、奥に行ってくるとか言って」

「そのことは行きながら説明するから。速く行こう」

スバルはそう言うと奥に向かっていった。アオイは「何なのよ」といいながら追いかけた。

スバルたちが奥に進んでいると電波で出来た扉が道をふさいでいた。

「ウォーロック開けること出来る？」

「無理だな。暗号が分かっていたら何とかなりそうだがな」

「アオイちゃん、ここの暗号知ってる？」

「知ってるわけないでしょ。で、なに。スバル君はこの先にあのやっかいな装置を置いた電波体がいるって思ってるの？」

スバルの考えはこうだった。ループリンフォメーションのセキュリティに気づかれずに装置を置いた電波体がそのまま帰るわけがなく、ウィルスはおとりで目的はこのデータだと考えているのだ。

「多分ね。それよりこの扉を何とかしないと」

すると、外との連絡が取れないのにハンターが鳴った。スバルは何で？ と思いながらハンターをとった。どうやらメールが送られてきたみたいだ。スバルは送られてきたメールを見ると電波で出来た扉に近づき暗号を打った。

「スバル君。暗号が分からないのに不用意にやったら・・・」

アオイがスバルを止めようとしたとき「アンゴウカクニン。カイ

「ジョシマス」と言う音声が聞こえたと思うと扉は消えていた。ウォーロックとアオイが啞然としているとスバルが言った。

「差出人不明のメールが来たんだけど、その中に暗号のことが書かれてたんだけど」

「どうやら、さっき送られてきたメールに暗号が書かれてらしい。解除した本人でもまさか本当に出来るとは思ってなかったみたいだ。

「ともかく扉を開けることが出来たんですから速く行きましょう。ウィルスの方も大変そうだと思いますから」

「うん。行こう!」

増援（前書き）

やっと一人目のFM星人との戦闘です。

それではどうぞ。

増援

扉を解除してスバルたちが奥に進むと巨大な装置があった。装置の近くにはエアディスプレイを操作している黒いアーマを着けた黄色の電波体がいた。

「ビンゴだったな。スバル」

ウォーロックがスバルに言う。電波体はスバルたちの方を向いた。

「・・・君たちは」

「私たちはサテラポリス遊撃隊です。そこで何をしてるんですか」

「ここには暗号式の扉があったはずだけど」

「扉なら解除したよ。それより答えて。君はここで何をしているの？」

電波体はスバルの質問に答えずエアディスプレイを操作し始めた。アオイは再び電波体に聞こうとしたときウォーロックがさえぎって言った。

「・・・おい出てこいよ。確か名前はリミスだったよな」

電波体の近くに白のアーマを着けた黄色のウィザードが出てきた。

「名前を覚えてくれていたなんて光栄だね」

「悪いな。あいにく、周波数で判断したもんでな。名前は覚えてなかったぜ」

「あれ？周波数は消してたはずんだけど。ま、いっか。こっちは僕のパートナーの・・・」

「この姿はリミスライティング。そういえば、君たちの名前は？」

「私はアイスユニコーン」

「僕はロックマン。リミスって言ったよね。アンドロメダの設計図を盗んだのって・・・」

スバルが言う前にリミスが言った。

「僕達だよ。それがどうかした？」

「どうかした？じゃねえだろうが！」

ウォーロックはリミスに向かって怒鳴った。

「・・・戦うのは嫌なだけだな」

リミスライティングはそういいながら長剣を取り出すとスバルたちのほうに向き直った。

「・・・ウェーブバトル！ライド・オン」「」

スバルがリミスライトニングと戦っているころ、ウイルスと戦っているミソラたちはもう、ギリギリの状態だった。

「・・・もう限界」

「さすがに疲れた」

ミソラと宵磨、ゴンタは今にも倒れそうな様子で戦っていた。その三人をカバーするように残りが戦っていた。

「くそ！スバルのやつ。どこに行きやがった」

「・・・戦ってるな。この周波数は・・・リミスか」

ジャックがボヤいているとジェミニが言った。

「ジェミニ誰なの？そのリミスって」

ツカサはウイルスを倒しながら言った。

「リミスは電気を操れてな。実力はまあまあだったな。でも、面倒なところに現れたな」

「どうゆうことなんだ」

ジェミニサンダーでウイルスを消し飛ばした後で、ヒカルが聞いた。

「簡単にゆうぞ。ここのセキュリティーは全部あいつの手の内だ。もう使い物にならない」

「セキュリティーって防御用のも？」

「ああ。あのウイルスを出してくる装置のバリアは多分ここのだな」

「じゃあ何か。スバルがそのリミスとかゆうやつを何とかしないとこのウイルスどもは消えてくれないってか」

「そうゆうことだな」

「くそ！それまで戦わないといけないのか」

「もう俺、無理」

「おい、ゴンタ。もう少しがんばりやがれ・・・！しまった」

ジャックは不意をつかれたらしく防御に遅れた。ウイルスが攻撃したときレーザーがジャックの目の前を通り雨が降った。

「オメガレーザー」

「ゴッドレイン」

白を中心とした電波体と杖を持った電波体の攻撃で半分近くのウイルスがデリートされた。

「大丈夫？」

「遅れてすまなかったな」

「遅すぎだ。姉ちゃん、暁」

そこにいたのは、暁が電波変換した姿のアシッドエースとクインティアが電波変換したクインヴァルゴがいた。

「お前らは少し休んでて良いぞ。行くぞティア」

シドウはウイルスたちのほうを見ながら言った。

シドウたちが加勢に来る少し前、リミスとの戦闘が始まった。

「電磁砲」

リミスは周りから電気を帯びた弾丸を出した。

「二人とも気おつけてください。弾丸と弾丸の間には電流が流れています。触れるだけでマヒします」

「電流なんて見えないよ」

「基本的に電流は弾丸との間にしか流れていないはずですよ。弾丸を線で結んだときの図形の中を通らなければいいはずですよ」

「手合わせするのは初めてだが面倒な技だな」

「来るよ」

リミスは剣を振ると弾丸がスバルたちに向かってきた。スバルたちは左右に分かれて弾丸をかわした。

「・・・無駄だよ」

リミスライトニングが言うとかわした弾丸がスバルたちの方に向かってきた。

「！追尾能力もついていたの？」

「打ち落とすしかないね。フリースボール」

「プラチナメテオ」

メテオと氷の弾丸が電磁砲とぶつかり煙がたった。煙がはれる前にリミスライトニングが斬りかかってきた。スバルはエドギリブレードを出し受け止めた。

「悪いね。英雄だから手加減なんてするきないんでね。それに、一対二だからね」

リミスライトニングは鉾で攻撃しようとしていたアオイの方を見ると電磁砲を三角形が出来るように自分の前に出した。アオイは攻撃をしたが電流に防がれた。スバル達はリミスライトニングから距離を取った。

「あの技、防御にも使えるんだね」

リミスライトニングは二人を順番に見ると何を思ったのか、構えを解くと小さな装置を出した。

「・・・これはここに来る途中にあった『リビルト』の防御プログラムの制御装置だ。これを壊さないと破壊はできない」

「リビルト・・・あのウイルスを再構築する装置のこと？」

「そういえば、知らないんだっけ？」

「何でそんなことを教えてくれるの？」

「・・・」

リミスライティングは答えずスバルたちに斬りかかった。

それからミソラたちのところにシドウたちが援軍として駆けつくまで斬ったり防御の繰り返しだった。

「だゝあ、くそ、しぶといな」

「こっちは二人がかりなのに、なかなか倒せないね」

「これじゃあ、時間だけが過ぎていくだけだ。ウォーロック、ノイズはどれくらいたまってる？」

「あの、もらったPGMを使うんだな。ノイズ率は・・・！」

「?どうしたのウォーロック」

「ノイズがたまってるねえ」

「どうして」

「ねえ、まずあの制御装置を何とかしようよ」

リミスライトニングが出した制御装置は巨大な装置とは真逆のところに浮かんでいた。

「・・・そうだね。けど、どうしよう」

「私とユニコーンでリミスライトニングをなんとかしてみるから、その間にスバル君は制御装置をなんとかして」

アオイは言うത്スバルの答えを聞かずにリミスライトニングに向かった。

「どうしたスバル。速くあの装置をぶっ壊すぞ」

「うん。そうだね。ソードファイター」

アオイとユニコーンがリミスライトニングと戦っているのを見ると剣を出すと制御装置に斬りかかった。以外にも制御装置は音を立ててあっさり壊れた。

「簡単に壊れたね」

「壊れたな」

スバルたちの近くに制御装置の欠片が落ちたとき、アオイがスバルの近くに飛ばされたらしく倒れた。

「アオイちゃん！」

「おい、スバル。気を抜くな」

スバルがアオイのそばに駆け寄るとウォーロックはリミスライティングを見ながら言った。

「……」

リミスライティングは静かに剣をスバルに向けた。そのとき、リミスライティングの方から音が鳴るとエアディスプレイが出た。リミスライティングはエアディスプレイを操り始めた。

「……コピーまであと少しか」

「コピーってまさか！」

「ちんたらやってられないな」

スバルが構えるとリミスライティングが切りかかってきた。ソードファイターを出しカウンターを狙っているとスバルとリミスライティングの間にレーザーが放たれた。二人とも距離を取りレーザーが放たれた方を見た。そこにはアシッドエース、ハーブノートたちがいた。

「……増援か。案外速いな」

「みんな、それに暁さん」

「スバル君、アオイちゃん大丈夫？」

「遅れてすまなかったな」

「よう。久し振りだな。リミス」

ジェミニがハンターから出てきてリミスに言った。

「ジェミニか……。あのお前がそっちについたのか」

「話の途中で悪いがお前の目的はなんだ？」

ジェミニとリミスが話していると暁がリミスに聞いた。

「目的つか……。だいたいは想像つくでしょ」

「やっぱりこのデータだったんだ……」

「それにしても、一、二、三……。十人か。さすがにそれに比べてこっちは俺とリミスだけ」

「ひどいと言っかなんと言っか……。なんでこんなにいるんだよ！」

リミスライトニングはこの状況どうするか考えているがリミスはいろいろ文句を言っていた。

「悪いな。恨まないでくれよ」

「はあ、どうしよっかな」

暁はリミスライティングに言々とリミスライティングはため息をつくと剣を構えた。

「いくぞ！」

増援（後書き）

感想等よろしくお願いします。

逃走と謎

暁はスバルとアオイから相手の戦い方を聞き、みんなに指示を出す。とロックオンソードでリミスライトニングとの距離を一気につめ斬りかかった。リミスライトニングは電磁砲を使い防いだ。するとジャックはリミスライトニングが暁に気を取られている間に後ろにまわった。

「あんな面倒な装置を作りやがって。くらいな、フェザーシックル」

ジャックの攻撃が当たりそうなとき、リミスが電磁砲で作ったバリアに防がれた。

「バーニングタワー」

「！リミス」

宵磨は剣を振りリミスライトニングの足元から炎の柱がでた。暁とジャックはリミスライトニングから距離をとることでかわし、リミスライトニングは炎が出ていない方に跳んだ。

「いまだ！」

宵磨はツカサ達に向かって叫んだ。

「「ジェミニサンダー」」

「ショックノートフォルテッシモ」

ツカサとヒカル、ミソラの攻撃がリミスライティングに向かっていった。

「つち」

リミスライティングは電磁砲でバリアを作ったが防ぎきれずに吹き飛ばされた。リミスライティングは空中で体制を立て直すとスバルたちのほうを向いた。

「くらいやがれ。アンガーパンチ」

「後ろか！」

ゴンタがリミスライティングに殴りかかった。リミスライティングは防御が遅れてまともにあたった。リミスライティングが立ち上がる時には頭上に雨雲が浮かんでいた。

「ゴットレイン」

今度はリミスがバリアをはり攻撃を防いだ。

「大丈夫か？」

「大丈夫に見えるか？」

リミスライティングは立ち上がりながらいった。

暁たちはスバルとアオイの周りに集まった。

「・・・おかしいとおもわないか？」

「僕もそう思います」

「ねえ、スバル君何がおかしいの？」

暁の言ったことに答えたスバルにアオイが聞いてきた。後ろには宵磨も「何がおかしいんだ」と言いたげな様子だった。

「さつき、私たちが攻撃したとき一度も反撃に出てなかったじゃない」

「そういえば。さつきから、防御しかしてないね」

「単に守るしか出来ないだけじゃない」

「そうだといいんだがな。ともかく速く終わらせよう。スバル、アオイ、いけるか？」

「はい」

「もう大丈夫です」

スバルとアオイそういうと構えた。

「よし、一気に行くぞ」

スバルはエドギリブレードを出し、アオイは鉾を構えた。

「・・・リミス。一回このあたりをふっ飛ばしていいかな？」

「うーん、いいんじゃない。数多いし」

リミスライトニングは剣から電気を出し、スバルたちの方を向くと一気に距離を詰めた。スバルもリミスライトニングに攻撃しようとしてドギリブレードで斬りかかった。スバルとリミスライトニングの剣が振り下ろされるとき、空気を切る音が鳴ったと思うとスバルとリミスライトニングの間に向かって数本の槍が飛んできた。その槍はスバル達の目の前に来ると光を放ち爆発した。

「スバル君！」

ミソラが叫ぶと煙の中からスバルとリミスライトニングが飛び出した。

「大丈夫かスバル？」

「はい、なんとか。それより今のは」

スバルがリミスライトニングのほうを見るとリミスライトニングは巨大な装置の上の方を見上げていた。

「どうしてここにいるんだ？スウィフト」

リミスが言うと装置の上から電波体かがリミスライトニングのそばに降りてきた。降りてきた電波体は緑色のローブを着ていて両手には白色の手袋をはめていた。隣には緑色の身体をしたウィザードが出ていた。

「その前に言うことあるでしょ」

「・・・まあ、礼は後で言うよ。それよりなんているの？」

「リーダーがなんだか君たちが大変そうだから手伝ってやってくれって言われてきたの」

「・・・ねえ、ウォーロック。あの、スウィフトって呼ばれてる電波体もFM星人？」

「ああ。また面倒なやつが来たな」

スバルとウォーロックが聞こえないように話をしたが、まだスウィフトはリミスと話していた。

「それよりダメでしょ。まだ、データのコピーもとってないだろうに。あんたの技はあたりを滅茶苦茶にしかねないんだから」

リミスは「はいはい」としてスウィフトの話をまったく聞いていないようだった。リミスライティングはその横でエアディスプレイを操作していた。

「シドウ、どうするの？」

「話を聞かぎりスウィフトってやつも仲間みたいだな。あの二人とも拘束するぞ」

シドウが言うとりミスライトニングがローブを着た電波体に言った。

「えっと、確かモウメントスウィフトだったよね。コピー終わったから逃げるの手伝ってくれない？」

「分かったわ。そこから動かないでね」

スウィフトはそう言うとりミスライトニングとモウメントスウィフトの足元に魔方阵が現れた。

「！まずいわ。逃げるつもりよ」

ハープの言葉に一番に反応して行動したのは暁だった。暁はロックオンソードで切りかかろうとしたが、リミスの電磁砲に邪魔をされた。魔方阵から光がでるとスウィフトは「じゃあねー」と言いながら消えた。

「ハープ今のは？」

「スウィフトの転送技よ。たぶん、追いつけないわね」

「っち、逃がしたか」

「これからどうするんですか、暁さん？」

「ここはサテラポリスに任せてみんなは俺と一緒にWAXAに来てくれ」

暁がみんなに言うのとツカサが暁に聞いた。

「あの暁さん。照矢君はどうしたんですか？」

「あ、そういえばそうだ。あいつはどうしたんですか？」

宵磨も今気がついたようだった。

「照矢は家庭の事情でこられないらしいから、WAXAに来てくれって言うてある。さあ、それより早く行くぞ」

「ちょっと待ってくださいよ。私たち学校の授業で来てるんですけど」

「俺がすでに言うてあるからその心配はないぞミソラ」

「・・・職権乱用？」

「さあ。違うんじゃないかな？」

アオイとミソラが曉に聞こえないように話していた。

「あ、それで。外にいるルナ達もWAXAに来るように言うてあるから連絡は取らなくていいぞ」

「私は少し遅れていきますね」

「何か用事があるのかアオイ？」

「雪島君を探しに行きたいんですけど」

アオイが言うつと宵磨が「メールで伝えればいいじゃないか」と言った。アオイはハンターを出すとメールを打ち始めた。

「これでよしと」

「外には報道人が沢山いるようだからこのまま行くぞ」

暁が言つとスバル達は電腦から出て行つた。

- W A X A -

スバルたちがWAXAに來ると部屋にはヨイリー博士と照矢がいた。照矢はスバルたちを見つけるとアドミストにいけなかったことを謝つた。スバル達は「用事があつたから仕方ないよ」と言うことで許すと、アドミストでの出来事を照矢に話した。

だいたいの説明が終わると暁がルナたちを連れてきた。

「はゝあ、酷い目にあつたわ」

ため息をつきながら入つてきたのはルナだった。

「何かあつたの？」

「実はですね。スバル君たちと連絡が取れなくなつた後、閉まつてたドアが開いたんですよ」

「そしたら、いきなり警備ロボが入ってきて中にいた人全員が外に出されちゃつてね」

「外に出たら出たで報道人の人たちに質問ぜめにあつたり、本当酷い目にあつたわ」

キザマロ、竜牙、ルナの順に説明した。ルナだけではなく二人とも疲れた様子だった。

「よし。雪島はまだ来てないみたいだが先に今日あったことについて話を聞かせてもらおうか」

暁が言つとスバル達は椅子に座りリミスライトニングとの戦闘、ウイルスを再構築する装置のことをリビルトと呼んでいること、データーを盗まれたあげく逃げられたことを話した。

「スバル君やみんながいたのにあっさり逃げられちゃったの？」

「はい。その通りです」

ルナ言葉が効いたのか顔を下に向けて言った。

「ところでウォーロックちゃんたちに聞きたいんだけど、そのリミスとスウィフトについて教えてくれない？」

すると、ハンターからウォーロックとハープ、ジェミニが出てきた。

「リミスはたしかレチクル座のFM星人でジェミニと互角ぐらいの力を持ってたよな」

「俺とあいつはFM王の右腕がどっちかで戦ったことがあるぜ」

「スウィフトはエリダヌス座のFM星人で転送技が得意だったわ」

ウォーロックは「俺たちが知ってるのはこのくらいだ」と言つと

思い出したようにスバルが言った。

「そういえば、リミスライティングとの戦闘中ノイズがぜんぜんたまってなかったんですけど」

「そんなはずわないだろウイルスをあんなに倒したんだぞ。たまらない方がおかしいぞ」

スバルは「でも・・・」と言いかけたが言葉を飲み込んだ。

戦闘中にノイズが異様なぐらい溜まってなかったこと、リミスライティングたちは盗んだ膨大なデータを何に使うのか。スバルたちがさまざまなことを考えている中、沈黙が部屋を支配した。

逃走と謎（後書き）

リミスとスウィフトはもう少し有名な星座のほうがよかったですね？

感想、アドバイスよろしくお願いします。

理由

静かになった部屋ではスバルたちが考えに没頭していた。

「・・・あのさあ。なんなのこの空気」

スバルたちは声のした方を見ると雪島がいた。

「あれ、雪島君いつの間にいたの？」

雪島がいつ来たのか誰も気づかなかったようでした。全員驚いていた。アオイは椅子から立ち上がり雪島に近づいた。

「どうしたの、遅かったね？」

「僕は学校があつたんだよ。時間は掛かるよ」

「君が雪島君だね。俺はサテラポリスの暁シドウだ」

雪島は「雪島宗助です・・・」と話したくないように簡単に言った。

「ところでさ。今来たばかりで何も知らないんだけど」

「あ、えっと。全部話していいかな？」

アオイはスバルたちに確認を取ると雪島に電波変換が出来ること、今起きていることを説明した。

「へへえ。君がロックマンだったんだ。事情は分かったけどそれ

ただでここに呼んだ分けないよね」

雪島はスバルに向かって関心したように言うと暁たちに聞いた。

「実はFM星人たちがリビルトって言う装置を作ってるみたいだな。その装置の解析を手伝ってほしいんだ」

「・・・なんで僕なんですか？ここに担当の人たちがいるでしょう」

「実はね、アドミストで盗まれたデーター回収を優先することになって、人手がたりなくなってるのよ」

ヨイリー博士が申し訳なさそうに言うツカサが言った。

「え、そうなんですか」

「だから、人為不足で解析が進まないから君に手伝ってもらいたいんだ。アオイと宵磨の話聞いたところいいと思うんだが、どうだ？やってくれるか？」

暁は雪島の顔をうかがいながら話した。だが、雪島はさっきと変わらず話したくないような様子だった。

「・・・それってサテラポリスのためってことですか？」

「一応そうなるが」

「なら手伝いません」

暁が答えると即答した。アオイ以外はまさか断るとは思わなかつ

たようで驚いていた。

「おい、雪島なんで断るんだよ。なんでサテラポリスに協力しないんだよ」

「それに、その言い方だとサテラポリスには協力したくないって言ってるもんだぞ」

「そう言っただけだ」

宵磨のあとにジャックが言うと雪島は冷たく言った。すると見ていたスバルが口を開いた。

「ねえ、なんでサテラポリスに協力してくれないの？」

スバルが言うと雪島の表情が変わり何も言わなくなった。雪島の今の印象は悪い方にしか向いてない。しかも暁やヨイリー博士は話すのが初めてなのでいい印象を持つことは出来ないようだ。誰もしやべらなくなり嫌な空気が辺りを包んだ。

「ねえ、やっぱりだめなの？」

「やっぱりって、どうゆうこと？」

雪島がアオイに聞くとスバルが言った。

「ねえ、だったら僕たちを手伝ってくれない？サテラポリスのためじゃなくて僕たちのために」

スバルの言葉に続くようにアオイも言った。

「そうだよ。私たちのために力を貸してくれない？」

アオイは真直ぐ雪島を見ながら言った。雪島はため息をつく。「信用はするなよ」と言ってヨイリー博士の方を向いた。

「あの、その装置のあるところに案内してくれませんか？」

「え、分かったわ」

ヨイリー博士と雪島は部屋を出て行きドアが閉まるのを見るとルナが言った。

「何なのよ彼！腹が立つわ」

「まったくですね。協力も断ってなにを考えてるんですかね」

「スバルもなんで協力してくれるように言ったんだ？」

「なんでだろ。サテラポリスに協力してほしいって言ったとき誰も信じてないような目をしてたから」

「似てるからね。スバル君に」

「どうゆうこと？」

アオイが言ったことが気になったらしくミソラが聞いた。アオイは自分が言ったことを後悔したように話そうか話すまいか考えた。アオイは「このことは雪島君には言わないでね」と念を押すと話し始めた。

「実は彼の父親ね三年前に突然いなくなったの。それで、学校でいじめを受けてね。一時学校に来なくなったときもあったわね」

「そうなの？」

スバルは宵磨の方を見る宵磨は「そんなこともあったな」と言っていた。

「雪島くんってスバル君に似てるね。ところで、雪島君が学校に来るようにしたのってアオイちゃんたち？」

ツカサはスバルと似た境遇の雪島に興味を持ったようだ。

「あの時が一番苦労したな」

「うん。探すのにも苦労したよね」

宵磨とアオイは雪島を学校に来させようとしたときのことを思い出しているように話した。

「ところで雪島君はどうしてサテラポリスを嫌ってるんですか？」

キザマロはアオイに聞くとアオイは表情を暗くした。

「あれ、もしかしてお前知ってるのか？あいつが断った理由」

アオイは表情を暗くしたままうなずいた。

「実はね。雪島君、父親がいなくなつた後、警察に探してもらっ

ように頼みに言ったらしいのよ。でも、「そんなことに取り合っている暇はないんだ」や「少しの間いなくなっただけだろ。すぐに戻ってくるさ」って言われて相手にされなかったみたいなの」

「それがサテラポリスを嫌う理由と何か関係あるのか」

暁も嫌われている理由が知りたいようであった。

「それから、一週間ぐらいあと警察じゃちが明かないから、サテラポリスに行ったのそしたら」

「・・・そこでも相手にされなかったか」

「うん。そんなことは警察に頼めばいいだろって言われたらしいよ。それでも、何度もサテラポリスに行ったけど同じことの繰り返しだったのよ。だから、民間人を守るはずの組織が一人も探してくれず正義を語ってるのが協力を断った理由だと思うよ」

アオイの説明が終わるとみんな押し黙っていた。雪島のサテラポリスを嫌う理由を知らなかったにしろ言い過ぎたと反省しているみたいだった。そんな中でミソラがアオイに聞いた。

「ねえ、雪島君の母親は？」

「・・・死んだらしいよ。事故死だったみたい。雪島君の父親がいなくなったのは母親の葬儀が終わった二日目ぐらい経った後らしいよ。捨てられたように突然に。だからよけいにね」

「母親が死んだすぐ後に父親が行方不明。捜索願いを出したが完全無視。サテラポリスを嫌いになるわけだね。後警察も」

アオイが雪島の母親のことを話した後、ツカサが静かに言った。

「アオイは何で雪島のことを知ってるんだ」

「雪島君を学校に来させるときに西村さんに聞いたの。だから、このことは言わないでね」

アオイが念を押すように言つとさらに暗い空気が部屋を包んだ。
アオイは「え、え」とあちこち見た。

「えつと、暗くなつたから気分変えて、事件や雪島君のこと以外の話しない？」

宵磨は「別の話つてな・・・」とぼやいていた。するとミソラは「あ、そうだった」と言つてポケットからチケットを出すとみんなに一枚ずつ配つた。

「これは？」

「来週ある私のライブのチケットだよ」

「あ、そつか。来週だつたんだよね」

「そうそう、アオイちゃん後これ」

ミソラはアオイにまたチケットを渡した。

「え、私もう持つてるけど」

「違うよ。雪島君に渡しておいて。予備を持ってきていてよかった」

ミソラは笑顔で言うとアオイは「ありがとう」と言った。

「さて、今日はもう解散だ。来てくれてありがとうな。気をつけて帰れよ」

暁はそう言うとスバル達は「さようなら」と言って部屋から出て行った。

「ジャック。お前は下にいるクインティアを手伝ってくれ」

ジャックは「またかよ」と言うと部屋から出て行った。暁はジャックが出て行くのを見ると大きなため息をつくと椅子に座った。ハインターからアシッドが出てきた。

「どうしたんですか？疲れがたまっていましたか？」

アシッドは暁に体調のことを聞くと暁は椅子にもたれかかると力をなくしたように言った。

「違う。いろいろあつてな」

「さっきのアオイさんの話ですか？」

アシッドはさっきのアオイが話していた雪島の過去のことを言った。暁は何も言わずただアシッドの言うことを聞いていた。

「・・・世の中はシドウ、あなたやスバルさんのような人ばかりで

はないことを知ってるはずですよ。このサテラポリスで働いている人たちも」

「どうやら暁は搜索願いを無視してきた自分たちサテラポリスのことを考えているようだった。」

「そんなことは分かってる。スバルのような正義感を持っている者ばかりが揃ってるのは奇跡だと思ってるよ。だがな・・・」

「今、考えていても仕方ないですよ。それより今は地球に来ているFM星人のことを考えましょう」

「それもそうだな」

暁は何かを振り切ったような顔になって言った。すると部屋のドアが開き長官が入ってきた。長官の近くには別の人がいた。

「・・・暁君。君に話があるんだが」

夜。倉庫のような暗いところにFM星人五体が集まっていた。

「で、データーは取ってきたが尻尾を巻いて逃げてきたんだな」

サイレントがリミスを馬鹿にするように笑いながら言った。リミスはサイレントを無視して黙っていた。すると、スウィフトが言った。

「なに戦っていないやつがいろいろ言ってるの」

「まあ、結果オーライってことでいいんじゃないの？それで、次は誰が行くの？」

「その前にリミスお前のパートナーにやってもらいたいことがあるんだが・・・」

リーダーがリミスに言つとリミスは「やってもらいたいこと？」と言つとリーダーは笑っていた。

理由（後書き）

どうやったらみなさんのように上手に書けるんでしょうか？

感想等よろしくお願いします

似たもの同士

リミスライトニングとの戦闘から一週間後。スバル達はオクダマスタジオに来ていた。

「それにしても、ここも久し振りだね」

「そうよね。前は事件があって大変だったけど今回はないでしょうね」

「あ、みんなこっち、こっち」

スバルたちが話しているとミソラがいつもの服装で近づいてきた。

「あれ、みんな来てるかと思ったけど、緋哉君と宵磨君、雪島君は？」

「緋哉君と宵磨君は用事があったみたいで、ライブ開始までには来るって。雪島君はリビルトの解析があるらしいけどすぐに来るらしいよ」

ツカサが三人がいない理由をミソラに説明した。ミソラは「そっか」と言った。

「そういや、宵磨のやつ用事があるとき多くねえか？」

「そういわれてみればそうですね。何かあるんでしょうか？」

ジャックが独り言のように言うとキザマロが同意するように言う

た。

「そういえばまだ言っ てなかったっけ」

「？アオイちゃん何か知ってるの」

ミソラがアオイに言つとスバルたちに話し始めた。

「宵磨くんね、今、家の家計が苦しいようなの。それで、少しでも楽にさせようとしてバイトしているの」

「バ、バイト！？」

「そんなこと僕たちに言っ ていいの？」

ツカサがアオイに言つと笑顔で言つた。

「スバル君たちなら言わないでしょ」

「そうなんだ。じゃあ、私、練習があるからみんなは館内を見学していて」

ミソラはスバルたちに言つとアオイは「私もついていい？」とミソラに聞くと許可をもらいミソラと一緒にオクダマスタジオの中に入つていった。

「私たちも中に入りましょ」

ルナが先頭でスバルたちも中に入つていった。

アオイはミソラについて楽屋に入ると中にある沢山の衣装などに夢中になった。

「うわー。こんな衣装があるんだ。あ、こっちのも可愛いな。こっちのもいいな」

ミソラは衣装に着替え鏡の前で髪を整えていた。アオイはミソラの近くにある椅子に座ってミソラを見ていた。

「ねえ、ミソラちゃんってスバル君のことが好きなの？」

アオイがミソラに爆弾発言をすると一瞬沈黙が部屋を包んだ。ミソラは顔を真っ赤にしなが髪を整えていた。

「ミ、ミソラちゃん。髪がグシャグシャになってるよ」

ミソラはグシャグシャになった髪を整えようとするとアオイがミソラのクシを持ち髪を整え始めた。ミソラはまだ顔が真っ赤だった。

「（アオイちゃんってこんなこと平気で聞いてきたっけ？）」

「で、どうなの？」

「／＼／＼え、えっと」

ミソラが途惑っているとノックが聞こえた。

「ミソラちゃん。そろそろ、練習始めるからよろしく」

ミソラが返事を見るとアオイは残念そうにため息をついた。

「あゝあ。いいところだったのに。ま、がんばってね」

ミソラは静かに頷いた。

ミソラとアオイが話しているとき、スバル達は・・・

「ミソラちゃんの最後のライブか」

「何だ？えらく残念そうだが？」

スバルは浦方に会い、ルナや照矢は案内をしてもらったが、スバルは屋上に行けるようになったことを浦方に聞き屋上に向かっていった。

「うん。ミソラちゃんはまた始めるって言ってたけど、なんかね・
」

「まあ、ミソラのやつが決めたことだからな。仕方ないんじゃないかねか？」

ウォーロックは続けて「俺は暇だから寝るわ。何かあったら起こしてくれ」と言い残すとハンターの中に戻っていった。スバルは屋上に出ると手すりに寄りかかり空を見上げた。しばらくは静かに空を見ていたが屋上のドアが開き、ドアのそばには雪島がいた。

「スバル君。どうしてここにいるの？」

「あれ、雪島君。来るの速かったんだね」

「うん。それにしてもこのウィザードって結構仕事熱心だね」

「？何かあったの」

雪島は苦笑しながら話し始めた。

「いや実は、アオイのやつライブに来ないかってメールが来たと思ったら、チケットや入館証が送られてきてないし、そのおかげで足止めをされて」

「じ、自分で誘つといて肝心な物を渡してないって」

スバルも苦笑しながら言った。雪島も手すりに寄りかかると町の方を見た。

「あ、あのさ雪島君・・・」

「どうしたのスバル君？」

雪島が聞いてきてもスバルはなかなか話を切り出せなかった。

「雪島君のお父さんって・・・」

雪島は静かにスバルをじっと見た。雪島はため息をつくともまた町の方を見た。

「アオイからだろ。西村さんが話したって言ってたからね。二人

とも口が軽いと言つか。それがどうかした？」

「いや、ただ僕と似てるなと思って」

雪島は何も言わずただ静かにスバルの話を聞いていた。

「アオイちゃんに聞いたと思うけど、僕の父さんも行方不明になったときがあつてね。それで絆を作るのが怖くなって学校に行けなくなつたんだ。でも、委員長やみんなが僕をまた学校に行けるようにしてくれたんだ」

「・・・簡単に僕達は似たもの同士ってことかな？」

「多分ね。だからさ、その、何も出来ないと思うけど僕も雪島君の父さんを探すのを手伝うよ」

スバルが話し終わると雪島はドアの方へ歩き出した。ドアを開けると雪島は言った。

「ありがとう。気持ちだけ受け取っとくよ。君と話が来てよかった」

雪島はスバルに伝えるとドアを閉めた。が、すぐに開いた。

「あ、そうそう。伝えることが二つ。リビルトの解析結果が終わったからヨイリー博士の方からメールが届いているはずだよ」

スバルはハンターを見ると確かにヨイリー博士からメールが来ていた。

「（・・・ウォーロック、メールの管理ぐらいしてよ）」

「それとアオイちゃんとミソラちゃんからの伝言。歌の練習がもうすぐ始まるから速く来てだって。僕は先にいつてるね」

雪島は「練習は特設ステージであるらしいよ」と付け足して言う
と館内に降りていった。

「え、ちょ、ちょっと。先にそうゆうことを教えてよ」

スバルはそういうと屋上から降りていった。

スバルが特設ステージに来ると練習が始まっていて浦方や監督をはじめルナや竜牙達全員がいた。

「スバル君、遅いわよ」

「ごめん。あれ、竜牙いつ来たの？」

「ついさっき。それにしても、忘れてちゃいけないだろ」

スバルは謝ると「謝るならミソラちゃんに謝れば？」と言われた。
スバルはステージの方を見るとスバルが来たことに気がついたように
で笑顔で歌っているミソラがいた。

「それにしても、本当に歌上手だね。ミソラちゃんは。何だか嫌
なことを全部忘るような気がするよ」

「照矢君もそう思うっ？」

ミソラの歌を聞いていると照矢がスバルに言った。

「まえにあったここでのライブはディーラーって組織が妨害したけどうまくいったんでしょ」

「うん。けど、今度はそんなことはないと思うよ」

「そうだね」

スバルは元気に歌っているミソラを見ながら言った。

スタジオにいる誰もが何もなくうまくいくと思っていた。潜む陰に気づかずに。

「響ミソラのライブね」

オクダマスタジオの並木道。黒い服にジーンズを穿いた青年が興味のなさそうにチケットを見ていた。近くにはさそりに似た紫色のウィザードがいた。ウィザードは低い声でコーヴァスのように笑っていた。

「で、そのロックマンってのはどのどいつなんだ。サイレント？」

サイレント。青年はウィザードのことをそう呼んだ。サイレントはまだ笑いながら言った。

「話を聞く限り、餓鬼のようだぜ。確か名前は星河スバルだった

かな」

青年は「ふうん」と期待はずれのようにすで言つとチケットを捨てた。すると、ニヤツと笑つて静かに言つた。その声はさっきと別人のような冷たく低い声で言つた。

「子どもか。ハハハ、楽しめるだろうな？」

「地球のやつらが、英雄だと言つてゐるんだ、楽しめるだろう。血祭りにあげてやろうぜ西杉」

西杉と呼ばれた青年はポケットから鍵の形をしたものを取り出すと言つた。

「それにしてもだ。ライブで沢山人が来るのに殺さずお前らが好きな負の心とかゆうのを集めるとは面倒なこつたな」

鍵の形をしたものを仕舞うと館内へ歩いていった。

似たもの同士（後書き）

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

乱闘

・オクダマスタジオ 特設ステージ ー

「よし。上出来だ。本番もこの調子でがんばってくれよ」

監督はミソラにそう言うと言館内へ戻って行った。ミソラは練習で疲れたのかその場に座った。そんなミソラに浦方が飲み物やタオルを持っていった。

「お疲れさん。うまくいったよ。本番もがんばってな」

「はい。ありがとうございます」

ミソラはお礼を言うと言受け取った。スバルたちもミソラの方へ行った。

「ミソラちゃんとてもよかったですよ」

「さすがミソラちゃんだぜ」

キザマロとゴンタは絶賛しまくっていた。スバルは浦方に挨拶した。

「お久しぶりです。浦方さん」

「あ、スバルじゃないか。久しぶりだな」

「スバル君」

浦方と話しているとミソラが呼んだ。

「どうだった？うまくいってた？」

「うん。上手だったよ」

スバルに褒められたミソラはともうれしそうな顔になった。

「よし、ミソラは本番までまだあるから衣装を着替えてきてい
ぜ」

浦方に返事すると楽屋に戻っていった。

「じゃあ、スバル。俺も仕事に戻るからライブまで中にいていい
からな」

浦方はそう言い残すと館内へ入っていった。

「なあ、飲み物を買に行かねえか？」

「もう。練習なのにあんなに声を出すからよ」

ルナはゴンタが言ったことに呆れながらいった。照矢と竜牙の二人は中を見て周るよう一緒に入っていった。ルナ、キザマロ、ゴンタとなぜかジャックは飲み物を買に行くのに自動販売機を探しに言った。アオイは雪島をつれてどこかに行った。

「さて、外にでも行こうかな」

スバルは外の並木道に向かった。

スバルが外に出ると近くから怒鳴り声が聞こえた。

「てめえ！今なんていいやがった！？もういつペン行ってみるよ」

声が聞こえた方を見るといかにも不良っぽい男の人が青年に突っ掛かっていた。青年は平然とした表情のまま怒鳴ってきた男に言った。

「当たっただけで金を払えとか言う馬鹿に渡す金はないね。さっさと消えたら？」

「言わせておけば！」

男が殴りかかろうとしたとき青年の表情が一変した。スバルはその表情を見たとき恐怖した。相手が誰であろうと容赦なしに叩き潰す。相手が動かなくなるまで。そんな、冷酷な目つきに変わった。そのとき、警備ウィザードが来た。

「あなた達何をしてるんですか！？今すぐに止めなさい」

男は殴るのを止め舌打ちするところかに行ってしまった。スバルは青年の方を見るとあれ？と思った。

「（目つきが元に戻ってる？）」

スバルは目を見ただけで恐怖した青年目つきが一瞬で変わったことに驚いているようだ。警備ウィザードは事情を青年に聞こうとし

たとき無視して怒鳴った男と同じくオクダマスタジオから出て行った。

「（あの人何者だったんだろ・・・）」

スバルが考えていると後ろから名前を呼ばれた。振りむくというもの。ピンクの服を着たミソラがいた。

「何か騒ぎがあったみたいだけど、大丈夫だった？」

「うん。大丈夫だったよ」

「よかった。じゃあさ、ライブが始まるまでさ一緒にいろいろな所見て周らない？少し工事したらしくて前来たときなかった場所があるからさ」

「いいけど」

「じゃ、行こう」

ミソラはスバルの手を握ると駆け出した。スバルは「ちょ、ちょっと」と言いながら引きずられるように行った。

- 裏道 -

オクダマスタジオで騒ぎを起こした男が仲間らしい二人の男の近くに行った。

「おう、遅かったな。菓子でも買いに行くとか言っておいて何かあったのか？」

男の一人はタバコを吸いながら言った。

「どこのやろうはしらねえが一回ぶん殴ってやろうかと思ったけどよ、邪魔がはいっちまって殴れなかったぜ」

「だったら、今から俺たちもついて行ってボコボコにして金でも脅し取るか？」

もう一人の男はゲームをやめて面白そうな顔で言った。

「お、面白いこと言うね。そいつの泣き顔で謝罪している姿を見るのは面白そうだな」

三人は笑いながら「違いねえ」と言った。そんな笑い声が響く裏道で誰かの歩く音がこだました。三人の前には話しに出てきた青年が立っていた。

「お、こっちから出向く必要がなくなっただな」

三人の不良は笑いながら青年の周りを囲んだ。

「ここなら、目撃者なし。止められる必要なし」

青年はそういうと不良の一人が言った。

「おい、兄ちゃん。こんなところに何のようかね？もしかして俺たちにお金をくれるとかかな？」

すると不良全員が笑い出した。青年の表情はスバルが恐怖を覚えた表情になって静かに楽しそうに言った。

「せめて、時間まではがんばって足掻いてくれよ」

言うのが早いか青年は笑っていた不良一人に殴りかかった。青年のストリートは腹にクリティカルヒットしたらしく笑うのをやめてうずくまった。残りの不良たちは声を上げると青年に襲い掛かった。青年は冷酷に楽しそうな目で殴りかかった。

・オクダマスタジオ

「あ、ミソラちゃん。そろそろ準備に行ったほうがいいんじゃないの？」

スバルとミソラはオクダマスタジオの屋上にいた。スバルは言う
とミソラは残念そうな顔になったが、「絶対、最後まで見てよ」と
言うのと楽屋に走っていった。スバルは「もちろんだよ」と楽屋に向
かって走っていくミソラに行った。ドアが閉まるとスバルは夕日の
沈む町の方を見た。しばらくすると寝ていたウォーロックがハンタ
ーから出てきた。

「あーよく寝たぜ」

「おはよウォーロック」

「お、もうこんな時間なのか？スバルそろそろ下に降りてツカサ

たちと合流した方がいいんじゃないのか？」

入り口の方を見るとライブを見に来た人たちが並んでいた。

「うん、そうだね」

スバルはウォーロックに言うと下に降りていった。

- 裏道 -

スバルがみんなと合流するのに屋上から降りた頃。

夕日が沈み始めて回りはなんとか見えるほどの暗さになっていた。近くには影が二つ積み上げられるように倒れていた。近くからは人が謝っている声が聞こえるか聞こえないぐらいの小ささで誰かが言っていた。

「おい、立ちなよ。もうすごしあがいてくれよ。楽しみが終わっちまうじゃないか」

どうやら青年が三人の不良と乱闘した結果不良たちが負けたようだ。いや、状況を見ると弱いものいじめを不良たちがやられていたと言った方がいいようだった。つまれていた二人は顔がはれ上がっていてとても立つことが出来る状態ではなく気絶していた。

青年は残りの不良の胸倉を掴んで面白そうなようすで言っていた。不良に関しては死んだような顔で涙の後が残っていた。青年は舌打ちをすると投げ飛ばし腹を何度も蹴った。

何度か蹴ると青年のハンターからウィザードが出てきた。

「おい、西杉。時間だそろそろやめろ。仕掛けが出来なくなつまう」

不良を蹴っていた青年、西杉は舌打ちをすると手を放した。掴まれた不良は力なく倒れた。そんな状況を見向きもしないで歩き出した。

ライブが行われるオクダマスタジオへ。

ライブ開始

ーオクダマスタジオ 特設ステージ -

スバルはあれから無事にツカサ、ルナたちと合流した。スバルが行くと宵磨が来ていた。それから楽しく話しながら会場へ向かった。特設ステージは、前回ステージの場所を高くしたため対処が出来なかったため、今回のステージは高いところではしないようだ。

「それにしても予想以上に人が多いね」

ツカサが周りを見渡して言った。辺りはすでにミソラファンの人たちで埋まっていた。ついでに、スバルたちの席は当然最前列だ。

「多すぎだろう。隣は隣で煩いのがいるし」

ジャックは隣で叫んでいるゴンタとキザマロを見ながら呆れたように言った。

「ちよつと、ジャック。うるさいよ」

「ちよつと待て！なんで俺なんだ！？普通俺の隣だろ！」

平然と言ったアオイにジャックは言う「なんとなく」とさっさと言った。スバル達は苦笑しながらそのやり取りを見ていた。

「けどライブが始まってここにいる全員が叫び始めたらやたらうるさいような」

宵磨が言つとゴンタとキザマロが同時に「うるさいとは何ですか！？うるさいとわ」と詰め寄るように言った。宵磨は「悪かった、悪かった」と言っていた。すると辺りを照らしていた電灯が全部消えた。一瞬間が支配したがスポットライトが舞台を照らすと笑顔のミソラがいた。

ミソラがいるのを見た観客は一気に歓声を上げ会場はあつという間に歓声に包まれた。ミソラは手を振るとマイクを持っていた。

「みんなこんばんわ。今日は私のライブに来てくれてありがとう。知ってる人もいると思うけど今日のこのライブが終わったら私は引退します。けど、必ずまた戻ってきます。そんな訳で今日はいつも以上に盛り上げていくよ」

ミソラが引退と言ったとき歓声とは別に残念そうな声も聞こえた。言い終わると歌が始まってないのにさらに歓声が強くなった。

「じゃあ、早速一曲目いきます。今日初めの曲は『ハートウエーブ』いくよ」

ミソラがギターを構えると歌いだした。始まると共に歓声も強くなった。スバルたちはゴンタ、キザマロ、さらにアオイとルナまで夢中に応援していた。

「引退ライブか・・・」

スポットライトが辺りを照らしているところとは逆の暗いところで青年、西杉がこれから起こる楽しい出来事を待ち望む子供のようにな不気味な表情で言った。

「くくく・・・その歓声が悲鳴に変えるのが楽しみだぜ」

「おい、西杉。準備が出来たぞ。速くいかねえか？」

西杉はうなずくと裏の方に歩いていった。

一曲目のハートウェーブが終わり観客の歓声がさらに大きくなっていた。ジャックはあまりにもついていけず外に出たようだ。

「みんなーまだいける？」

ミソラが元気に聞くと答えるように「おー」と歓声が上がった。

「じゃあ、二曲目『絆ウェーブ』いくよー」

ギターを弾きだし二曲目に入った。二曲目の中間ぐらいまで来るとスバルは自分のハンターがなっているのに気がついた。どうやらメールが届いていたみたいだった。差出人は不明で、前アドミストで送られてきたのとそっくりなのが来ていた。

スバルはいいところなのだと思いますながらメールを小さな声で読んだ。

「えつと・・・『会場の裏。速く行かないと後悔することになるぞ』って、え？」

メールの内容に驚いたスバルは行こうとしたが、歌っているミソラを見た。スバルは「ごめん。少し席をはずすね」とささやくよう

に言つと会場を出た。

スバルが会場から出たことに気づいたらしくウォーロックが来た。

「おい、どうした？最後までいるんじゃないかったのか？」

スバルはウォーロックにメールを見せるとウォーロックは「なるほどな」と言いながらうなずいた。

「ガセかもしれないぜ？本当だったとしても何があるのか分からないが行くんだろ？」

「うん。せつかくのライブを邪魔されたらたまらないからね」

スバルは指定された場所へ走って行った。

「はあ。おいおい、警備のやつが一人もいないってどうゆうことだよ？」

西杉はおいてある装置を見ながらつまらなそうに言った。

「まあ、いいんじゃないか？それより、速く始めないか？」

サイレントは不気味な笑みを浮かべていった。

「おし。じゃあ早速この会場を爆発・・・」

西杉が言いかけたとき近くの林から子供の声が聞こえた。

「ねえ、ウォーロックこの辺りだよな？」

「ああ、けどなにもないな」

スバルたちが道に出ると西杉と目が合った。スバルは西杉の姿を確認すると「あれ、たしかあのときの」と言ったとき隣にいたサイレントに気がついた。ウォーロックはスバルに耳打ちをした。

「おい、スバル。どうやら当たりみたいだぜ。あいつさそり座のサイレントだ」

「つてことはFM星人？」

スバルはウォーロックに確認を取ると西杉を見た。

「おい、誰だお前？こんなところに何かようか？」

喧嘩を売りそうな声でスバルに言った。

「ハハハ、ちょうどいいところに来たな。ウォーロック。おい、西杉こいつらがあのロックマンだ」

西杉はその一言を聞くと笑みを浮かべた。

「このライブ会場を爆破する前にお前を倒すか」

「ば、爆破って・・・」

西杉は近くにあった装置を手で叩きながら言った。

「この装置のスイッチを押すとこのライブ会場に仕込んだ爆弾がドン！中にいる人が混乱している中にさらに岩を落したり大混乱させ、湧き出る負のエネルギーをこいつが吸収・・・」

「おいおい。しゃべりすぎだろう。それ以上しゃべるな」

サイレントは西杉が計画をペラペラ話し鍵の形をしたものを出したときにストップをかけた。

「それは・・・アンドロメダの鍵!？」

「出来上がるのが速くねえか？」

「話はここまで。さあて、始めようかね」

西杉はスバルたちを無視して装置のスイッチを押そうとした。

「！！スバルあれを押されたら」

「分かってる。電波変換」

スバルはロックマンの姿に変わると西杉を止めようと周波数変換で近づいた。西杉はいきなりスバルの方に向き直った。その顔は予想通りといわんばかりのようすで笑っていた。

「やっぱりそう来るよな。さっき言ったはずだぜ？先にお前を倒すってな！電波変換」

スバルは突然の行動に距離を取った。西杉の姿は、黒い身体に紫色のアーマを着けていた。両手には短剣を持っていた。

「この姿はクレイムサイレント。さあ、始めようぜ！」

「来るぞスバル！」

「うん。ウェーブバトル！ライド・オン」

スバルが戦闘を始めたころ。

「さあ、飛ばしていくよ」

ライブの盛り上がりは落ちることなく活気に溢れていた。照矢は疲れたように外に出ようとした。

「あれ、どうしたの照矢君？」

「ちょっと外の空気吸ってくる」

照矢はツカサに言うのと外に出て行った。ルナやゴンタアオイたちはもちろん気がついてない。

照矢は外に出ると大きく息を吸った。ハンターからはディムネスが出てきていた。

「大丈夫ですか？まだ、体調はよくないんでしょう？」

「ハハハ・そうなんだけど。なんか夢中になっちゃって。いろいろな事忘れてさ。それと、敬語はやめてくれウィザードなんだからさ」

照矢はそう言うのとまた深呼吸をした。ふと近くにあったベンチを見ると誰かが寝ているのが見えた。照矢は目を凝らしてみるとどうやらジャックのようだった。

「あれ、こんなところで何してるの？ジャック」

ジャックは手をどけ照矢の姿を確認すると起き上がった。

「お前こそどうした？ライブ終わったのか？」

「まだ終わってないよ。僕はちょっと外の空気が吸いたくなってるね」

「俺は寝てた。終わるまでここにいてるつもりだから終わったら起こしてくれ」

ジャックはそう言うのとまた寝だした。照矢「分かったよ」と言う。デймネスに「飲み物買いに行かない？」と言うと歩き出した。

「で、わざわざ何でこんなところに来るのかな？」

デймネスは呆れながら言った。今、照矢達は人影がない準備室近くのところに来ていた。

「別にいいだろ。表の方はいいのがなかったんだから」

照矢はそう言いながら紅茶を買った。買った紅茶を飲むとため息をついた。

「大体考えてることは分かるけど、スバルたちにも手伝ってもらった方がいいのでわ？」

「本当に敬語やめてよ。まあ考えてみるよ。・・・あれ？」

照矢は飲み終わったペットボトルを近くにあったゴミ箱に捨てようとしたとき何かが入ってる紙袋を見つけた。

「これなんだろ？忘れ物かな？」

照矢は紙袋を持ってデймネスに聞いた。デймネスは「さあ」と言うと紙袋の中を見た。照矢は勝手に見るデймネスを止めようとしたがいきなりデймネスに「紙袋をそつと置いて」と言われた。照矢は言われたとおりにするとデймネスに聞いた。

「どうしたの急に？」

デймネスは紙袋の中を見せた。照矢はそれを見ると驚いた。その中にはパネルが液体の入った容器とコードのようなものでつながっている装置が入っていた。パネルには5:00と浮かんでいた。

「ねえ、これってもしかして・・・」

「多分考えているものであっていると思います。うかつに触らないでくださいね。本物のようですから」

「解体できる?」

「この程度ならすぐに出来ます。ただ、オクダマスタジオのいたるところにありますね」

デймネスは装置を取り出し解体しながら言った。

「どれくらいあるの?」

「10数個ですね。連動式のようですから場所はすでに分かっています」

「今はライブ中だし止めるのもなんかな。何とかしてみるか」

デймネスは「終わりました」というと照矢は残りの場所を聞くと走っていった。

ファイナライズ 失敗？

スバルは西杉が電波変換した姿、クレイムサイレントと戦っていた。戦況はスバルの方が押されていた。

「おらおら、その程度なのか!？」

スバルは西杉の短剣での連続攻撃をロングソードで防いでいた。

「（この人暁さんと同じぐらい速い。それに・・・体が重い）」

西杉はスバルを弾き飛ばすと追撃を加えてきた。スバルはとっさに防御チップのバリアで防いだ。お互いがウェーブロードに立つとウォーロックがスバルに言った。

「おい、スバルどうした？このままだと負けるぞ!？」

「分かってるけど・・・」

スバルがウォーロックに言うと西杉が笑い出した。

「ハハハ、体がうまく動かないんだろ？そりゃそうだ、お前の周りの電波を悪くしてんだから」

「おいてめえ！卑怯だぞ。それに、スバルの周りの電波が悪けりやお前らの動きも鈍ってるはずだろう」

ウォーロックは笑ってる西杉に怒鳴った。西杉は表情を変えずに言った。

「何寝ぼけたこと言っただけ？その装置に対応できるプログラムを組み込んでおけばいい話だろ」

西杉の話を聞くと「卑怯なやつめ」と吐き捨てるように言った。スバルは苦しそうなようすだった。西杉は笑うのをやめると短剣を回した。

「弱いものいじめってのは何もしてこないやつを思う存分殴ったりするんだぜ？弱らせたりするのは当たり前だろ」

西杉は短剣をまわすのを止めるとスバルの方に向けた。

「さて、どこまで楽しめるかな」

西杉はそういなり周波数変換でスバルの目の前に移動した。スバルはバトルチップは間に合わない判断し距離を取ろうとした。

「無双連斬」

西杉は一瞬でスバルの後ろに立っていた。スバルは驚いて振り向いたとき体中に激痛が走った。バイザーが割れていて肩や手など切り傷が出来ていて血が出ていた。

スバルは一瞬倒れかけたがなんとか持ちこたえ距離を取った。今度はさっきより遠く。スバルの息は荒く血が片目に入った。

「おいスバル、大丈夫か？」

「な、何とか・・・」

スバルは西杉の方を見ると楽しそうに短剣を回していた。隣にはサイレントが出ていた。

「リミスと俺らは違うぜ。容赦する気はねえぜ」

「次はどこを切り刻んでやろうか？」

西杉は不気味な笑みを浮かべながら次のことを考えていた。スバルはサイレント達に聞こえないようにウォーロックに聞いた。

「ノイズはどれくらい溜まってる？」

「200%超えてるぞ、やるか？」

「それしかいい方法が思いつかないからね」

スバルは立ち上がると西杉の方を見た。西杉は短剣を回すのを止め構えた。

「ファイナライズ！」

スバルはそう叫ぶとノイズがスバルを包み込む……はずだった。

「あれ？」

スバルの姿は変わらずノイズもスバルを包み込まなかった。西杉は呆気に取られていたが笑い出した。

「何だよ。『ファイナライズ』って叫ぶもんだから何が起こるか

と思えば。失敗か？それは残念だったな」

「どうして・・・」

スバルはなぜファイナライズが出来なかったのか考えていた。そのため、西杉が近づいていることに気がつかなかった。

「まだ、終わってもないのに敵から目をそらして言い分けないだろ！」

西杉の声でスバルは我に返ると西杉は目の前に来ていた。

「簡単にやらせるかよ。ビーストスイング！」

西杉がスバルを斬ろうとしたときウォーロックが自慢の爪で攻撃した。西杉は突然のことで防御が間に合わずまともにくらった。

「スバル考えるのは後にしろ！」

スバルは頷くと次の攻撃に備えた。西杉は立ち上がると表情が昼間の冷酷な顔になっていた。

「くそが。何も出来ないやつが攻撃しやがって」

西杉はサイレントを呼ぶとサイレントは「やっと俺も戦えるのか」と言った。

スバルを睨むと短剣で斬りかかった。ウォーロックはさっきと同じように決めてやるうかと構えていたがサイレントが西杉の上から飛び掛った。ウェーロックはそのままめ合いに入った。

「くそ、どきやがれ」

「ここでゆっくり見てなよ」

「（僕を切るためには最低体に触れなければならないはず。だったら）」

スバルは一枚のバトルチップを使った。

「ハリケーンダンス」

スバルはその場で風を纏いながら回転し始めた。

「よし、これなら切ることはできねえだろ」

「そうだな。回転している間わな」

サイレントは静かに言うとうォーロックは「なに？」と言った。スバルの回転は徐々に弱まっていき止まった。スバルは片目で前を確認すると笑みを浮かべていた西杉が立っていた。スバルは驚いてバトルチップを使おうとしたが遅かった。西杉の姿はもうなく気がついた時には痛みと衝撃で倒れた。

「フェイントをかけてなかったら俺がやられてたが、まあいいや」

西杉はそんなことを言いながら体から血が出ているスバルに歩いて行った。

「（くそ、立たなきゃいけないのに体が動かない）」

「子供でも知ってることを教えてやるよ。サソリには毒があるんだぜ？」

西杉はスバルを見下ろしながら冷たく言った。

「くそ！毒か」

「気づくのが遅かったな。あの短剣に毒が塗ってあるぜ。もうあのカギは動けないぜ」

ウォーロックが言ったことにサイレントとは馬鹿にするように言った。ウォーロックは「くそがー」と叫ぶとスバルの方へ向かおうとしたがサイレントが邪魔をした。

「さっきのお返しだ」

西杉は今までの攻撃や電波の悪さ、サイレントの毒で動けないスバルを蹴飛ばした。スバルは地面に何度か体をぶつけた。西杉はスバルの方へと歩いていった。

「おら、どうした？もう終わりか？」

西杉はスバルの背中を踏みつけた後、何度も腹を蹴った。ウォーロックは助けに行こうとしたがサイレントに押さえつけられて助けに行くことが出来ない。

スバルは蹴られるたびに呻き声を出した。西杉はそんなスバルにお構いなしに何度も蹴った。

「やっぱり、弱いものいじめはこうでないとね」

西杉は蹴るのを止めるとスバルの首を持つと投げ飛ばした。スバルはウォーロックの近くまで投げられた。ウォーロックはスバルの近くに駆け寄るとバトルチップの中ならリカバリーを使おうとした。

「あ、リカバリー使うんなら使えば？どうなっても知らないけど」
「どうゆうことだ？」

ウォーロックは恐ろしい形相で言った。サイレントは笑みを浮かべながら言った。

「ドクリンゴってバトルカード知ってるか？」

ウォーロックはそれを聞くなりリカバリーを使うのをやめ舌打ちをした。

ドクリンゴは体力を回復するバトルチップ、リカバリーなどを逆にダメージを与える効果に変えるバトルカード。この場合、リカバリーを使うと傷を治すのではなく逆にスバルをさらに苦しめることになる。

「さて、そろそろ爆破しますか」

西杉は装置のボタンを押すため近づいていった。ウォーロックは「止める！」と叫ぶなり襲い掛かった。ウォーロックの攻撃はサイレントによって簡単に弾き飛ばされた。

それを見ると西杉は装置のボタンを押した。

スバルは気を失いそうな様子でボタンを押した西杉の姿を見た。スバルとウォーロックは「しまった」と思っていたがどうにもならなかった。西杉とサイレントは騒ぎになるのを今かと待ち望むような様子で館内の方を見た。が、騒ぎになるところか爆弾が爆発した

音すら聞こえなかった。

「おい、どうゆうことだ？騒ぎが起ころどころか爆発さえしないじゃないか」

「知るかそんなの！」

西杉とサイレントは言い争いをしていた。

「くそ！ちゃんと爆弾は仕掛けたはずなんだが」

「こうなったら、あいつをボコボコにしてやる」

西杉はスバルの方を見ると歩いてきた。スバルは立ち上がろうとするが体が動かず声しか出せない。

ウォーロックはスバルを守るように前に出た。西杉とサイレントは冷酷な笑みを浮かべながら歩くのを止めない。スバルとウォーロックが諦めかけたとき空気を切るような音が聞こえたと思うと西杉の肩に矢が刺さっていた。

西杉は突然の攻撃をくらい矢が刺さってる方の方を抑えた。サイレントが矢を抜くと西杉は矢の飛んできた方を見た。

「誰だ！？どこにいる！？出て来い」

西杉が叫ぶと後ろから矢が二本飛んできた。今度は一本は切るこ
とが出来たがもう一本は足をかすった。西杉は見えない敵に腹を立て始めていた。

「西杉、下じゃない上だ！」

サイレントが言った方を見ると空には星と一緒に無数の羽があり襲い掛かった。

「っち！」

西杉はバックステップでかわすと辺りには無数の羽が地面に刺さっていた。西杉が顔を上げるとスバルの近くに翼をはやし弓を持った灰色の電波体がウェーブロードから降りてきた。

ファイナライズ 失敗？（後書き）

最後に現れた灰色の電波体が誰なのかは分かりますよね？

感想、アドバイス等よろしくお願いします。

空の狩り人

スバルは自分のそばに電波体が降りてきたのを見ると気を失った。ウォーロックはそばに立っている灰色の電波体に隙を見せないように構えていた。が、ハンターから出てきたウィザードを見ると警戒心が解けた。

「デймネスお前か」

「二人とも大丈夫ですか？」

「気を失ってるだけだね。デймネス、スバル君とウォーロックをお願い」

照矢はスバルが無事なことを確認すると奥のほうで獲物を狙っているような顔つきをした西杉を見た。西杉は恐ろしく不気味な気を放っていた。照矢にはそれが西村を包み込んでいるように見えたが、動揺はしなかった。

「・・・おい、てめえ何者だ？」

「サテラポリス遊撃隊。スカイデймネス」

お互い相手の動きを見ながら静かに言った。

「まさかと思うが、お前が爆弾を壊したのか？」

「飲み物を買に行ったら物騒なものを見つけたんでね。悪いけど全部使い物にならなくしたよ」

「俺の楽しみを全部無駄にしやがって！」

照矢の話を聞くなりさっきの冷酷な顔と違い怒りの形相になって、怒鳴った。西杉は短剣を構えるなり襲い掛かった。スカイデймネス、照矢はスバルを担ぎ離れたところへ周波数変換で移動した。

「デймネス。バリアをはってて」

照矢はそういうと空へ跳んだ。デймネスは言われたとおりバリアをはった。

照矢空へ飛ぶと暗くなった林を見まわした。一瞬静けさが辺りを包み込むと何かを感じたのか照矢は後ろを見た。そこには周波数変換で近づいてきている西杉がいた。

「実戦は始めてなのに全力で来られてもな」

「だったらお前もあそこで倒れているやつの二の舞にさせてやるぜ」

照矢は距離を取ろうとバックステップをしたとき、西杉はいなくなっていた。

「・・・！」

照矢は突然、周波数変換で違うウェーブロードへ移動した。移動したとき照矢の肩にかすれ傷が付いていた。西杉はさっきまで照矢がいたところに立っていた。隣にはハンターから出てきたサイレントもいた。

「今のをかわすか」

「っち。運のいいやつだ。次ははずさねえぞ」

サイレントはやるなと思っていたが、西杉はともかく気が晴れるまで叩き潰すことしか考えてないようだ。

「（速いな。今のはあいつの言うとおり殺気だけでうまくかわせたもんだからな）」

照矢は立ち上がりながら勝つための作戦を考えていた。

「（こっちは初めての戦闘。まともにやって勝てる相手ではないな。さて、どうしようかな・・・）」

照矢はデймネスの方を見ると何か言いたげな様子だった。しかし、デймネスを見たのがあだになり西杉が向かってきていた。

「よそ見してると終わりだぜ」

照矢は落ち着いた様子で弓の弦を伸ばしたすると薄緑色の矢が出ていた。

「ウィンドシュート」

弦を離すと風を纏った矢が西杉に飛んでいった。西杉は鼻で笑うと走りながら軽々とよけた。

照矢は次の矢を放つため弦を引いたが西杉のほうが少し速かった。

「今度こそ終わりだ。無双連斬！」

照矢は構えたまま周波数変換で上のウェーブロードに移動した。かすり傷が数箇所あったがたいしたことはなさそうだった。

照矢は移動するなり矢を放った。西杉は上からの攻撃に反応が遅れたがなんとかかわした。

「この程度の攻撃じゃあ、勝てないぜ」

西杉は挑発も含めたような言い方で言った。西杉はそのまま照矢に向かっていった。今度は突っ込んで技を放たずスバルの時と同じようにフェイントをかけた。照矢はバックステップでかわしたことが失敗だと言うことに気がついた時は西杉は攻撃の構えをしていた。

「今度こそ終わりだ！無双連」

西杉が言いかけたとき肩を何かが貫いた。西杉は何が起こったか理解できてない様子だったがサイレントの叫び声が入った。

「上だ！よける」

動くよりも早く突き飛ばされた感覚を感じた。西杉はさっきまでいたところを見ると切り刻まれた跡みたいなのがあり、薄緑の矢が刺さっていた。西杉は肩の方を見ると地面に刺さっていたのと同じ矢が刺さっていた。

「これは、あいつがあの時放った矢か？」

西杉は矢を不器用に抜きながら聞いた。サイレントはバリアを張っているディムネスの方を見た。

「まさか、あのデймネスか。っち、甘く見るんじゃないかった。おい西杉、あいつの矢はかわすんじゃないく消さなきゃいつまでも追ってくるぞ」

「・・・矢を操る能力か」

西杉は照矢を睨みながら言った。照矢は表情を変えず弓の弦を引いていた。

「気づかれるの速いな。・・・ちよつとやってみようかな」

照矢はそういうと西杉の視界から消えた。

「炎双斬撃」

西杉はそう言うなり短剣は炎を吹いた。短剣が炎を纏うなり後ろに振った。何をやってるんだとウォーロックは思ったが、何かが炎に包まれた。西杉が見ている先には照矢がいた。

「あいつ見向きもしないで矢を切ったのか」

「ちよつとやばいかな？」

デймネスが心配そうに言う「ちよつと行ってくるから後よろしく」と言い残し照矢の方へ向かった。照矢は周波数を連続で使いそのつど矢を放っているようだ。照矢は周波数変換でどこかに移動すると今度は西杉の全方位から矢が襲い掛かった。

西杉は笑みを浮かべると矢を全で一瞬で切った。矢は炎に包まれると地面に落ちながら消えていった。

「おい！もう終わりなのか？」

西杉は辺りを見渡しながら言った。

「（あれで無傷か。早くスバルを病院に連れて行きたいんだけどな）」

照矢は木に隠れながらあれこれ考えているとディムネスが来ていた。余計な話は省くよううでいきなり本題に入った。

「矢は私が操るんで操作に気をとられなくていいですよ」

「じゃ、任せる」

照矢はウェーブロードに立っている西杉に向かって無数の矢を放った。

「！来たか」

西杉が見た方には無数の矢が向かってきていた。

「おい、また矢かよ。本人が出てこいよ」

つまらなさそうに言うつと短剣を構えた。矢にタイミングを合わせると今度は炎に包まれなかった。矢は急に方向を変え八方に飛び散った。西杉はどうゆうことだと疑問に思い飛んでいった矢を見ると向きをまた西杉の方に変えた。今度は直線的ではなく意思を持ったように向かってきた。

「くそ！なんだよ。急に切れなくなった」

西杉は短剣を振りまわしながら襲い掛かってくる矢をかわした。致命的なダメージは与えてないがかすり傷がどんどん増えていった。そんな中、西杉は足に矢がまともに当たってしまった倒れた。このチャンスを見過ごすまいと矢が一斉に襲い掛かった。西杉は舌打ちすると周波数変換でかわした。見つからないように地面に移動したのがつかの間、照矢の声が聞こえた。

「決まってくれ。ウィンドストライク！」

上を見るとさっきの矢と比べ物にならない数の羽が向かってきていた。

矢の攻撃を受けたばかりで対処に間に合わず全ての羽が襲いかかった。西杉がいたところは砂煙に包まれていた。

照矢とデймネスはスバルの近くに降りるとウォーロックに容体を聞いた。スバルはすでに電波変換は解けていてもとの姿に戻っていた。

「止血はした。それよりお前らもやるな。そういえばデймミスは俺が地球に来る前は『空の狩り人』だったか」

「昔の話はまた今度で。それよりスバルさんを速く治療した方が」

「この時間だとこの辺りの病院は無理だと思うから、やっぱりWAXAだね」

デймネスとウォーロックがスバルを抱えると照矢は砂煙のあがっているところを見た。砂煙は晴れていてそこには羽が刺さったド

ーム状の壁があった。

照矢たちは再び警戒すると壁はバラバラに砕けた。中からは不機嫌な表情をした西杉とサイレントがいた。

「はい、そこまでー」

サイレントたちが出てくるとウェーブロードの方から声が聞こえた。照矢たちは声のした方を見るとそこにはアドミストのときに来たスウィフトがいた。

「おい！何でまたお前が来てるんだ！？」

「何でってデリートされそうだったからのと」

スウィフトは片手に持っていた袋を見せた。袋の中は機械の残骸などが入っていた。

「あんたが勝手に持ち出したこれの回収。まったく、回収に来たらこんなどうしようもない形になってたし、リーダーからはデリートされそうだったら助けるって言われてるし最悪だよ」

スウィフトは騒ぐように言うと言つと真剣な表情に変え周波数変換で西杉の近くまで移動した。

「ってことで、撤退するわよ。分かっていると思うけど拒否権はないから」

言い返そうとする西杉とサイレントを無理やり魔方陣の中に入れた。ローブを着た電波体、モウメントスウィフトは照矢のほうを一瞬見るとアドミストのときのように光に包まれ消えた。

空の狩り人（後書き）

アオイと宵磨と比べて遅くなりましたが照矢の初めての戦闘でした。

感想等よろしく願います。

離脱

―特設ステージ―

「今日はみんな来てくれてありがとう。今日を持って引退しようと思います。けど、また戻ってくるのでそれまで待っていてください」

ライブ最後の曲が終わり客の歓声は最高潮に達していた。観客の中には泣いている人もいた。ミソラは観客のみんなに挨拶をすると舞台から降りて行った。

「はあ〜」

「どうしたの？ため息なんか付いて」

今、ミソラは楽屋に戻って休んでいた。スポーツドリンクを少し呑むとミソラはため息を付いた。ハープに理由を聞かれたがうつむいていて答えようとしなかった。そもそも聞こえてないようだった。

「・・・もしかしてスバル君？」

ハープの一言にミソラは顔を上げた。ハープはやっぱりねと言う顔をしていた。

「確かに途中からどこかに行っていたわね。何かあったのかしら？」

ミソラは「何で最後までいてくれなかったんだろう」と呟いてい

た。するとドアがノックされてミソラが返事をする。ルナたちが入ってきていた。外で寝ていたジャックも一緒にいた。どうやらルナたちにたたき起こされたようで顔には晴れた痕があった。

「みんな」

「今日のライブは最高でしたよミソラちゃん」

「うん。聞いてるこっちも楽しくなっちゃった」

「疲れが吹っ飛んだ」

「うおー、本当に引退しちゃうのか？まだ歌ってほしいぜ」

キザマロ、アオイ、宵磨、ゴンタの順で言った。ゴンタに関してはまだ泣いていた。そんなゴンタにルナは「いい加減にしなさい」と言いながら叩いた。

みんなは笑っていたがアオイはミソラが少し元気がないことに気づいたようだった。そして、今ごろ気づいたように竜牙が言った。

「そう言えばスバル君に照矢君がいなくなってるね」

竜牙が言っているとルナたちは辺りを見回して「そういえばそうだね」などといった。雪島は「夢中になりすぎだろう」と聞こえないように言った。

「確かに何処に行っただろうね」

「スバルは知らねえが照矢なら飲み物を買ってくるとか行っただが」

ツカサが言った後、ジャックがぶつきらばうに言った。

「あいつらミソラちゃんの最後のライブだって言うのに最後までいないなんて許せねえぜ」

「そうですね。せっかくチケットまでもらったのに最後までいないなんてありえせんよね」

ゴンタとキザマロがそう言っていると竜牙と雪島は「ならジャックはどうなんだよ」などどつつこみを入れていた。ミソラはみんなのやり取りを落ち着きのないように聞いていた。アオイがミソラに話を振るうとしたときドアがまたノックされると聞き覚えのある声が聞こえた。

「曉だ。ミソラにジャックやみんないるか？入るぞ」

ドアが開くとサテラポリスの服装をした曉がいた。曉は好物のうまい棒をサクサクと音を立てながら食べていた。曉はスバル、照矢以外が揃っていることを確認するとうまい棒を食べるのを止めた。

「みんなこんな遅い時間だがWAXAに来れるか？」

時計を見ると九時になりそうだった。ルナ、キザマロ、ゴンタは行けないらしいが他は行けると答えるとツカサが「何があっただんですか」と聞いた。

「実はな照矢の報告でライブ中にFM星人が現れたらしいんだ。スバルと照矢がなんとかやったみたいだがスウィフトも現れて逃げられたらしい。それで、今後のことを話したいんだが」

「スバル君は？」

暁の話にいち速く反応したのはミソラだった。ライブを途中で出て戻ってこなかったことを考えると大体の想像は付いているらしい。暁は言葉に一瞬詰まったが答えた。

「命に別状はないらしい。ただ、体中の打撲などが酷いらしくて今WAXAにいる」

暁の話を聞くなりミソラは楽屋から出て行った。アオイやツカサたちもそれにつられるように出て行った。暁は仕方ないと言いたげな様子で後を追った。

— WAXA 医務室 —

スバルは目を覚ますとまず白い壁、天井が見えた。スバルはここは何処だろう？何でここにいるのだろうと考えていたが、すぐに思い出したように体を勢いよく起こした。すると、腹の辺りに激痛が起こりとつさに押さえた。隣に座って本を読んでいた照矢が気づいてスバルをベットに寝かせた。

「あ、ダメだよ。打撲や長い間、電波の状況が悪かったせいで体中が痛んでいる見たいなんだから、体を起こしたりせずに横になつてない」と

スバルは横になると照矢にお礼を言った。

「それにしても気がついてよかった。ここは、WAXAの医務室。ウォーロックは・・・」

照矢が説明しているといきなりスバルのハンターからウォーロックが出てきた。

「やっと目を覚ましたかスバル」

スバルはウォーロックと簡単に話を終わらせると照屋のほうに顔を向けた。

「そういえば、ライブはどうなったの？あと、翼のある電波体が来たと思うけどサイレントはどうなったの？」

「えっと、一つずつ答えていくよ。まず、翼のある電波体は多分僕ね。サイレンとはスイフトとか言った電波体が来てうまく逃げられちゃったよ。次にライブの方なんだけど無事に終わったらしいよ」

スバルは心配そうな顔つきで聞いていたがライブが無事に終わったことを聞くと安心したようだ。照矢の話が終わるとウォーロックが気になっていたことを照矢に聞いた。

「ところでお前は体とか大丈夫なのか？電波を悪くしたってあいつらが言ってたが。それに、毒も効いてなかったようだが」

「ああ、そのこと。デミスはね周波数じゃなくて周りの電波を感知したり少しだけ操ることが出来るらしいんだ。爆弾は電波で操作する仕組みだったからその回路を調べてもらって何とかしたんだ。で、電波を悪くしていた根元を見つけて破壊したんだ」

照矢はウォーロックの質問にさらさらと答えた。スバルはなんとか理解できたがウォーロックにとっては理解ギリギリのようだった。照矢は気にせず話を進めた。

「毒はステータスガードって言えば分かるかな」

スバルとウォーロックはなるほど頷いていた。

ステータスガードは毒などの状態異常にはなくする能力。つまり、照矢の電波変換した姿、スカイディムネスにはサイレントの毒は効かないと言うことだ。

「まだ話してないことがあるから話を戻すね。それで、スバル君をここに連れて来る間、暁さんに連絡したんだけど、ミソラちゃんたちを連れてくるらしいよ。もうすぐかな」

照矢は壁にあった時計を見ていった。

- ??? -

スバルが目覚めたころいつもの暗い倉庫の中には五体の電波体があった。中ではサイレンとがスウィフトに怒鳴っていた。

「どうしてあんな奴からひかなければならなかったんだ!？」

「勝手にリミスの装置を持ち出して壊したんだから何もいえないでしょ」

スウィフトとは別に興味のなさそうな様子で見ていたウィザード

が言った。声が聞こえたのか矛先はその電波体が変わった。

「うるせえんだよレイド！地球の生活に興味を持って計画に協力してない奴が」

レイドと呼ばれた電波体はサイレントの方を見向きもしないで話を変えた。サイレントの我が儘は、もはや全員から無視されていた。堪忍袋が爆発したようで他の四体の電波体に向かって叫んだ。

「もう我慢できねえ。俺は俺のやり方で地球を侵略してやる。アンドロメダの鍵は今俺たちが持つてるからな」

サイレントはあざ笑うかのように叫ぶと周波数変換でどこに行ったようだ。スウィフトとレイドの二人は揃ってため息を付くとリーダーの方を見た。

「どうするのよフェンリル。あの馬鹿アンドロメダの鍵を持ってどこか行たよ」

リーダー、フェンリルはスウィフトに問題ないと言いたげな様子で言った。

「俺たちの計画に勝手に入ってきたんだ。ほっとけばいいさ。それに、鍵はあいつらに持っていていかれてないしな」

「まあ、そうだしね。リミス、発信機ちゃんとつけてる？」

「気づかれてないはずだよ。それで、次はどうするんですか？鍵の動力、負のエネルギーをためるのに事を起こさないと溜まりませんよ」

「各自それぞれ負のエネルギーを集めるのに行動してくれ」

フェンリルが言うと各自それぞれのパートナーのところに戻った
ようだ。

知られたくないこと（前書き）

今回はいつもより少し文が長いです。

それではどうぞ。

知られたくないこと

I W A X A 医務室

スバルと照矢の話がちょうど終わったとき廊下を走っている音が聞こえるとドアが勢いよく開いた。開いたドアからミソラが飛び込んできた。

「スバル君！」

ミソラは飛び込んでくるなりスバルに駆け寄った。ノックもなしに入ってきたので二人は少し途惑ったがすぐに落ち着きを取り戻した。ミソラが入ってきた後足音は聞こえてきて次にアオイが入ってきた。それからなだれ込むようにツカサや竜牙、最後に暁が入った。

「目が覚めたか。調子はどうだスバル？」

「一応大丈夫です」

「大丈夫には見えないよね」

スバルの言ったことを否定するように雪島が言った。ミソラは心配そうな顔でスバルを見ていた。するとドアがノックされるとクインティアが薬を持って入ってきた。

「薬を置いておくわね。傷や打撲が酷いらしいけど安静にしておけば二日か三日ぐらいで直るらしいわ」

クインティアはみんなに、特にスバルとミソラに伝えるように言

った。ミソラは「よかった」と一安心したようだ。スバルの怪我が治ることを知ると本題に入った。

「さて、一安心したところでスバルと照矢。何があったか詳しく教えてくれ」

スバルと照矢はお互いにフォローしながらサイレントの戦闘のことを話した。もちろんファイナライズが出来なかったことも。これに関しては暁は驚いていた。

「ファイナライズが出来なかっただと。確かにメテオGが消えて前とは多少違うと思ったが・・・」

「・・・ちよつとそのP G M見せてもらっていい？」

雪島はスバルに聞くとウォーロックがハンターから出てきて雪島に向かってP G Mを投げた。雪島はそれをうまく取るとキャッチするとエアディスプレイを出して調べ始めた。アオイと宵磨以外は始めてみるが、小学生かと聞きたくなるような手の動きだった。暁もこれほどとは思ってなかったらしく驚いていた。

「それにしても、アンドロメダの鍵が出来上がるの早くない？」

アオイの一言で顔つきが変わった。

「それに鍵が出来上がっているってことは速く手を打たないといけませんよね」

「ツカサの言うとおりなんだが、うまくいかないんだよな。せめて敵の居場所が分かればいいんだけどな」

「向こうから出てきてもらわないとどうしようもないな」

「発信機とかがあればな」

ジャックが暁に言った後、竜牙がさらっと言うと雪島以外、全員が竜牙を見た。

「……どうしてそれを速く言わない！」「」「」

ジャック、暁、宵磨が同時に叫んだ。竜牙は反発するように言い返した。

「そんなの知らないよ！だいたい暁さんに関しては本職なんだから普通思いつくでしょ！」

竜牙の一言で言い争いまで発展しかけた。ミソラ達が止めようとしたときエアディスプレイでPGMを調べていた雪島が言った。

「うわ、何だこれ」

暁と竜牙の言い争いを眺めていたツカサに聞こえたようで雪島に聞いた。

「どうしたの？」

「……あ、うん。PGMが作動しなかったらしいからノイズを制御しているプログラムが悪いのかなと思ってを調べようとしたんだけど、何だか知らないけど中のデータの配置がバラバラ。メテオサイバーのフォルダのところに別のデータが沢山入ってるし、他のと

ころも同じように。これじゃあ、ファイナライズ出来るわけがないよ」

雪島は手を止め説明した。三人の言い争いは終わっているらしく雪島の話聞いていた。暁は何だか嫌そうな顔をして雪島に聞いた。

「また作り直さないといけないのか？それを作るのにどれだけかかったと思ってるんだ？」

どうやらPGMを一から作るのに徹夜で働くのが嫌なようだ。

「いや、その必要はないと思う。確かに一から作り直した方が速いと思うけど整理すれば言いだけの話だしね。それより、スバル君近頃何か変わったことなかった？」

雪島は心配ないと暁に言う。スバルの方に話を振った。スバルは「変わったこと？」と聞き返した。

「うん。ここまで大量のデータが間違えて保存する失敗はWAXAの人はしないでしょ？つてことは、何かがあったからデータが保存されたと考えれるでしょ。それに、WAXAのデーター以外のも入ってるし」

スバルは変わったことがないか考えていた。時々ウォロックにも「何かあったっけ？」と聞いたが「知るか」と答えられた。二、三分ほどすると思ひ出したように言った。

「あ、そういえば一つだけあった。ウォロック、アオイちゃんと戦った日に展望台で拾った石ある？」

ウォーロックはハンターに戻るとアオイが聞いた。

「石って、あの時拾ってたっけ？」

「うん。なんか変わった石だったからウォーロックに預かってもらってたんだ」

スバルがみんなに言うつとハンターからウォーロックが飛び出してきた。飛び出すさい別の物も一緒に出てきたがあえて見なかったことにしよう。ウォーロックは「これだ」と雪島に紫色の丸い石を渡した。雪島はそれを興味深げに見ていた。

「どう？」

「うん。分からない。特に変わったものじゃないみたいだし。これが原因とまでは分からないね」

雪島はそついうとウォーロックに石を返した。

「よし、みんな。今日はこの辺にしてそろそろ帰らないと家族が心配するだろうからこれで解散。また何かあったら報告してくれ。じゃあな」

暁は十時になつてゐるのを見ると、スバルたちにそう言い残すと医務室から出て行った。クインティア、ジャック、ツカサも出て行った。

「照矢君とアオイちゃん、宵磨君はどうするの？」

「私はそろそろ帰らしてもらつよ。帰ったら怒られると思つけど」

「俺はもう少しここに・・・」

「さて、じゃあ。私たちは帰るね。じゃあね、ミソラちゃんにスバル君。行くよ、宵磨君に雪島君」

「え、あ、ちよつと・・・」

宵磨と雪島の答える暇を与えず強引に医務室から出て行った。スバルとミソラは啞然としていたが照矢は何かに気づくと笑みを浮かべて置いてあった本を取った。

「じゃあ、僕も帰るよ。じゃあね、スバル君とミソラちゃん」

照矢はそういうとアオイたちのあとを追うように出て行った。医務室の中はあつという間にスバルとミソラの二人になった。ウォーロックは何処へ行ったのかいなくなっていた。ミソラはしばらくして二人だけになっていることに気がついた。何を話せばいいのか考えているとスバルが聞いてきた。

「そういえばライブどうだった？最後まで見れなかったけどうまくいった？」

「あ、うん。けどスバル君にも聞いてほしかったな」

ミソラがスバルに言うところ「FM星人が来なかったら聞けてたのにね」と残念そうに言った。ミソラはスバルを見つめていると何か思いついたようで椅子から立ち上がった。

「よし。だつたら今聞いてもらえる？」

「え、今？こんな遅くに？WAXAの仕事の邪魔になるんじゃない．．

」

「まあ、気にしない。それより聞いてくれるよね？」

スバルは「じゃあ、お願い」と言うとミソラは笑顔になりギターを構えると歌い始めた。その夜のWAXAではきれいな歌声がしばらくの間、聞こえていたそうだ。

暁はスバルの医務室から出て来ると話声が聞こえないほどのところまで歩いた。大体の場所まで来ると待ってましたと言うようにアシッドが出てきた。

「良いんですか？今のサテラポリスの捜査方針について伝えなくても？」

「良いんだ。知らない方がいい」

暁は思い出すように近くにあった窓から夜空を見ていた。

・回想・

「暁君。君に話があるんだが」

アドミスト、リミスとの戦闘後の話し合いが終わりスバルたちが帰った後、長官が部屋へ入ってきた。長官が入ってくると高そうなスーツを着た中年の男性が入ってきた。暁は「誰ですか？」と聞く

と長官が中年の男性に聞こえないように言った。

「言葉を慎んでくれ。政治家の三谷 由人^{よしひと}さんだ。聞いたことはあるだろう」

暁は名前を聞くと由人の方を見た。由人は暁と目が合うと暁に名詞を渡しながらかいぎををした。暁もかいぎすると長官は由人に椅子に座るようにと進めた。三人は椅子に座ると長官が話を切り出した。

「今日、由人さんが話があるそうであられたようだ」

長官が暁に伝えると由人が話し始めた。

「早速だが、アドミストにあるループインフォメーションのデータが盗まれたそうだな。話によれば以前、地球侵略を企んだFM星人が盗んだと聞いたが？そのFM星人は、また地球侵略を企んでいるそうではないか」

「（何処からその情報を・・・伝わるのがいくらなんでも速すぎるだろう）」

暁がそんなことを考えているのを気にせずに話を続けた。

「そこでだ。FM星人の対処よりもまず、盗まれたデータの回収を優先してもらいたい」

「データの回収をですか？FM星人の侵略よりもですか？」

暁の一言で由人の目つきが変わり暁を睨んだ。長官はやってしまったと言いたげな様子だった。

「当たり前だ。あのデータのことを知らないからそんなことをいえるんだ。それと、FM星人の侵略に関してはこちらが手打つので気にしないでいいですよ」

暁が異議を唱えようとしたところを長官が抑えた。暁は納得しな
いまま言葉を飲み込んだ。由人は伝えることだけ伝えたと席を立つた。暁たちの気を知らないように平然と「それでは頼みましたよ。私はこれから用があるのでこれで」と言い残すと部屋から出て行った。

由人が出て行くなり長官に詰め寄った。

「どうゆうことですか！？電波体の対策が何にもない政府側がFM星人たちをどうにかできると思ってるんですか！？」

明らかにキレていた。長官は暁に落ち着くように言うと話し始めた。

「すまないな。だが聞いたことあるだろう？あの人の噂を」

「いい噂は一つとして聞いたことがないですね。だったら、なおさら・・・」

「断つてどうなる？相手は権力がある政治家が相手なんだぞ」

「それでもですよ。FM星人は我々が担当するべきです」

「物事は力づくで動かすよな人だぞ。なにをしてくるか分からないんだぞ」

暁はこのまま長官に当たっても意味がないと思ったらしく出かけた言葉を飲み込んだ。長官は暁の肩を叩くと元氣付けるように言った。

「君達遊撃隊はF M星人たちのことを任せる。正し、気づかれないうようにな」

長官はそう言うのと部屋から出て行った。暁はただ何も言えず長官が部屋から出て行くのを見ていることしか出来なかった。

・回想終了ー

「明らかにおかしいだろう。厄介ことは大抵俺たちが何とかするんだ。なのにだ、国の上にいる政治家がわざわざ出てきたんだ。ここでスバルたちに話して向こうに気づかれてみる。どうなるかわかったものじゃない」

暁が窓から夜景を見ながら言うとききれいな歌声が聞こえた。

「この声は・・・ミソラか？」

「そうみたいです」

暁はその歌声をしばらくの間壁によすがって聞いていた。

・フレイグタウンー

照矢はスバルたちと別れると電波変換をして自分の家へと戻ってきていた。照矢の家は家というより屋敷と言った方が正しかった。

あまり広くはないが駅前で見ると小さな噴水がある。照矢はドアの入り口に來ると電波変換を解いた。

「ディムネス。いつも通り隠れておいてよ」

ディムネスはなにも言わずハンターの中に戻った。

照矢は自分の背より少し高いドアを静かに開けると中にいる人に気づかれないように入った。

家の中は大広間になっていて、窓際には花が咲いていた。照矢は靴を脱ぎ中に入ると近くのドアが開き中から六十ぐらいの男性が出てきた。照矢の姿を見るなり一礼した。

「お帰りなさいませ。今日はいつもより遅いお帰りですね」

「ちょっとあつてね。それと、いつもの事なんだけど・・・」

「分かっております。お父様とお母様はお仕事が忙しいそうで外出されております」

「・・・葉平は？」

「葉平様は今、寝ておられます。それでは私は明日の食事の仕込があるのでこれで」

照矢にそう言うのと部屋へ戻っていった。それを見ると照矢も階段を上り部屋へと戻った。

照矢は部屋へ戻るなりベットに仰向きで倒れこんだ。ハンターに

隠れていたディミスが出てきた。

「結局相談してませんね」

照矢は何も言わず何もこたえる気がないようだ。

「あなたのことをスバル様たちが知っても前のようにはならない
と思いますよ」

ディムネスの言葉を聞くと照矢はある光景が頭に浮かんでいた。
学校の教室で生徒たちは楽しそうに校庭へ遊びに行っているが照矢
だけ教室の窓から広がる空と校庭で遊んでいるみんなを見ていた。

暗い教室の中、一人で。

「・・・今日は疲れたからこのまま寝るから。ディムネス、今日
はおつかさま」

照矢はそういうとそのまま眠りに付いた。ディムネスは部屋の電
気を消した。

「隠せずにいることは難しいことですし、隠している方もつらい
ですよ・・・」

寝ている照矢を心配するように言うとハンターの中へ戻っていつ
た。

知られたくないこと（後書き）

少しの間、照矢がよく出てくると思います。

感想等よろしく願います。

引越し

・コダマタウンー

スバルはあれからWAXAの医務室で一日安静にし、体がだいぶ治ったので朝、家に向かっていった。

電波変換で移動するとウイルスと戦闘になるので本調子ではないスバルにあまり戦いを進められないので、電波変換をせずにウェーブナイターでコダマタウンに向かっていった。

スバルが自分の家に来ると入れ違いにトラックが通った。スバルは気にせずに家に向かった。

スバルが家に着きただいま、と言いながら入ると家の中にはあかね以外に誰かがいたようで走ってくる足音が聞こえた。スバルを出迎えたのは・。

「おはよう。スバル君」

「え、み、ミソラちゃん!？」

ミソラだった。その後から何気ない様子であかねがエプロン姿で来た。

「あら、スバル。お帰りなさい」

「ただいま。ねえ、それより何でミソラちゃんがいるの?」

「え?メールを送ったはずなんだけど」

ミソラに言われてスバルはハンターを調べると開けていないメー

ルが来ていた。声に出しながらメールを読んだ。

「『スバル君の家に引越して来たよ。これからよろしくね』……
・つて、ええ〜！」

メールを読み終えた真つ先にあかねに聞いた。

「ちょっとどうゆうことなの母さん」

「どうゆうことって書いてある通りよ」

あかねは当たり前でしょと言っている表情でリビングに戻っていた。スバルは靴を脱ぐと追いかけてリビングに行った。

「だったら、教えてくれてたってよかったじゃない」

「あら、言っただけでよかったかしら」

あかねはついさっき朝食を食べ終えたみたいで食器を洗っていた。スバルは聞いてないよ、とぼやいていた。すると、ミソラがスバルの隣に来ていた。

「どうしたのスバル君。もしかして、私のこと嫌いなのか？」

ミソラは泣き顔（演技）でスバルに聞いた。

「いや、そうじゃなくて、ただ聞いてなかったから驚いて……」

「それならよかった」

ミソラはいつものように笑顔になるとあかねを手伝いに行った。スバルはハンターを見ているとミソラ以外にメールが来ていることに気がついた。

「（あれ、委員長たちからも来ている）」

送られてきたメールは次の通りだ。

ルナ：ミソラちゃんがコダマタウンに引っ越してくるって聞いて手伝いに行っただけどまさかね。学校に来たら話があるから覚えときなさいよ。

ゴンタ・キザマロ：スバル、学校に来たら覚えておけよ。

スバルはゴンタとキザマロが同じ文面だったことに少し面白く思ったが嫌な感じしかなかった。

「（・・・なんだろう。委員長たちが怖くなってきた）」

「スバル君、朝ご飯まだ食べてないでしょ。用意したよ」

ミソラはいつものように笑顔でスバルに言った。スバルは先にご飯を食べたいようで椅子に座るなり食べ始めた。

「そういえば、学校は？」

「今日は休みだよ。ねえそれよりさ、スバル君ってこれから何か用事がある？」

「学校の宿題を終わらせないといけないから。どうしたの急に？」

スバルの前に座ったミソラは率直にスバルに聞いた。しかし、スバルの答えを聞くと少しがっかりしたようだが「何でもない」と言うとかかねの方に行った。スバルは何なんだろう、と思って首をかしげていた。

朝食を食べ終わると食器をかたづけ、宿題を終わらせるのに自分の部屋に行った。

- 数時間後 -

「やっと終わった」

スバルは椅子に座ったまま背伸びをしていた。ウォーロックは毎度のこと暇だ、と言う理由で一人でウィルス狩りに行っていた。スバルがやり終えた宿題をかたずけているとミソラが入ってきた。

「スバル君、宿題終わった？」

「うん。ちょうど今終わったよ。どうしたの？」

「えっとねえ・・・これから暇ならさ」

ミソラが言いかけたときスバルのハンターが鳴った。スバルは普通どおりに「あ、電話だ」と言ったがミソラにとってはタイミングが悪いとしか思っただけだった。スバルはハンターを操作してエアデイスプレイを出したが画面には何も移ってなく音声しか聞こえなかった。

「スバル君、今いい？」

すると突然ミソラの声が聞こえた。スバルは隣にいたミソラのほうを見ると首を振っていた。今の中には本人でも驚いたようだ。

「おゝい、どうしたの？聞こえてる？」

「・・・ねえ、誰なの君ミソラちゃんじゃないよね」

「あれ？バレルの早！何で気がつくのさ。まだ全然話してないんだけどさ」

電話の方からまだミソラの声で聞こえていたが、少しすると映像が映った。

「「あ、アオイちゃん！？」」

そこにはアオイが映っていた。いや、アオイだけではなく近くにはツカサと雪島がいた。アオイはスバルたちを見るとアチャーと残念そうな様子になった。

「なんだ。ミソラちゃんがいたのか。そりゃ、すぐにバレルか」

「え、え？ねえ、今どうやって私の声を出したの？」

ミソラが当然の質問をするとツカサが苦笑しながら答えた。

「知リたかったらWAXAに来てみれば？ついでにスバル君にPGMを渡したいらしいし」

スバル達はツカサ達に今から行くよ、と伝えると通信を切った。そこに丁度よくウォーロックが戻ってきた。

「ん？どうしたんだ二人とも？」

「ウォーロック、すぐにWAXAに行くよ」

スバルはそう言うなりウォーロックに質問の時間を与えずハンターに戻し玄関へと向かった。スバルとミソラはあかねに一言言っと外に飛び出し電波変換しウェーブロードでWAXAに向かった。

- WAXA -

スバルたちがWAXAの中に入りアオ達がいる部屋に向かった。二人が入ると照矢と暁もいた。

「あ、やっと来たんだ。遅かったねスバル君」

アオイはまたしてもミソラの声で話した。それを聞くなり雪島、照矢、暁、ツカサの四人は笑いをこらえていた。スバルたちは何でミソラの声で喋れるのか疑問に思っているらしく直接本人に、それも二人同時に聞いた。

「「何でアオイちゃんがミソラちゃん（私）の声で話せるの？」」

これまた二人がハモツタので四人に入れてアオイまで笑った。そんな何の説明もせず笑っている四人に機嫌を悪くしたスバルとミソラはそのまま帰ろうとした。それを見たアオイは、笑いを堪えながらスバルたちに言った。

「あ、ちょっと待って。声を変えたのはこれだよ」

アオイは自分のハンターを見せた。

「普通のハンターじゃないの？」

「違うんだよミソラちゃん。これをこうしてつと」

アオイはハンターで何かを設定すると言った。

「こうゆう風に変えられるんだよ、ミソラちゃん」

「あ、僕の声だ」

今度はスバルの声で話した。ミソラは興味津々でアオイのハンターを借りて使い方を教えてもらっていた。

「ところでさ。この変声機。誰が作ったの？」

「それね、雪島君が作ったらしいんだ」

ツカサが答えると笑うのを止めてエアディスプレイを操作している雪島を見た。ミソラ達は雪島が作った変声機で遊んでいた。

「わーこれすごいね。結構面白いね」

女の子の口調で暁の声が聞こえたので一瞬、遊んでいる二人と暁以外全員が引いた。

「……スバルたちの時は面白かったが実際にやられると腹が立つな」

「ハハハ・・・けどこれはこれで面白いね」

少し不機嫌な暁を見ながら照矢が言った。雪島はエアディスプレイを片付けるとアオイのハンターを取り上げた。アオイは取り返そうとすると雪島はすぐにハンターをかえした。アオイは変声機の機能がなくなっていることに気がつく。雪島が言った。

「遊びは終了。お前すぐに遊ぶからな。かすんじゃなかった」

アオイはつままないの、と言うと雪島がスバルにP G Mを渡した。

「一応やってみただけど、多分前のようなことはないと思う。けど、何かあったらすぐに言ってね」

「うん。分かった」

スバルはP G Mを受け取ると暁がある提案をした。

「よし、ちゃんと出来るかどうか実戦でやってみようじゃないか。どうだ？スバル久し振りに一戦やらないか？」

「ちよつと待て。それならこの俺も混ぜろ」

「ツカサ、じゃなくてヒカル君かな？」

暁の言葉にツカサ、ではなくヒカルが乗ってきた。性格や言葉遣いが一気に変わったので照矢はすぐにヒカルだということに気がついた。

「あ、それなら私も混ぜて」

「アオイちゃんが行くなら私も」

「ちよつと待て、何でこんなに人数が多くなるんだ？」

アオイにミソラも混ぜてほしいと言うと暁は慌てていた。暁はまさか、と嫌そうな顔で照矢を見た。暁の視線がいたったのか照矢は「僕は見学と言うことで」と言った。

「うゝん。ツカサ君とヒカル、ミソラちゃんとアオイちゃん、それから暁さん・・僕も入れて六人？」

「じゃあ、スバル君一人対私たち全員・・」

「ちよつと待って！それ本気で言ってるの？アオイちゃん」

スバルはアオイの提案をすぐに断ると面白くないな、とアオイは言った。すると今度はヒカル・・でわなくツカサが言った。

「ここは平等に三対三かな？」

「あ、ツカサ君、思いつきやる気なんだ」

照矢はツカサの様子を見て言うのもちろんだよ、と答えた。雪島は戦闘データを取るための準備をしてらしくエアディスプレイを操作していた。やるなら速くやつてもらいたいらしく雪島がスバルたちに言った。

「三対三にするなら速くチーム決めてよ」

「俺とスバルが別れるだろ、ってことはツカサたちが・・・」

「私スバル君と組みます」

「私も」

暁がチームを決める前にミソラとアオイは希望を言った。スバル達のなかで反対する人はいなくチームはスバル・ミソラ・アオイで、暁・ツカサ&ヒカルのチームに分かれた。スバル達はWAXA専用の練習場に向かった。

引越し（後書き）

ミソラがスバルの家に引っ越してきました。WAXAでの話がメインでしたが

感想等よろしく願います。

3体3

- WAXA 練習場 -

練習場はコダマ小学校の運動場より少し広いぐらいの大きさで天井は電波で出来た壁が覆っていた。スバル達六人はすでに電波変換していた。照矢と雪島は上の方にある部屋でスバルたちを見ていた。

「さて、久し振りだなこうして戦うのは」

「そうですね暁さん。ディーラるとき以来ですね」

「話はいいいから速く始めようぜ」

暁とスバルは過去のことを振り返っているとヒカルは速く始めようぜとウズウズしている様子だった。ツカサはそんなヒカルを見てため息を付いていた。暁はスバルとの話をやめ雪島たちの方を見た。

「じゃあ、そろそろ始めるか。雪島、開始の合図たのむぞ」

「はい、はい。みんな大丈夫だね。それじゃあ、ウェーブバトル」

「ライド・オン！」

言うなりスバル達は駆け出した。

「あ、始まった？」

雪島が開始の合図をしたあと部屋のドアが開き照矢が入ってきた。両手にはコーヒーと紅茶の入ったコップを持っていた。雪島はエアディスプレイを出してデータを取り始めており照矢のほうを見ずに「うん、始まったよ」と言った。そんな雪島の近くにあった机にコーヒーを置いた。

「コーヒーでよかったよね。わあ、みんなすごいね」

「確かにね。照矢君も強いでしょ」

雪島は照矢がくれたコーヒーを少し飲むと照矢に尋ねた。照矢は下で戦っているスバルたちを見ながら小さく言った。

「そんなことないよ。それに、むしろその逆だよ」

雪島は手を止め照矢を見ると数字や文字が並んでいるエアディスプレイのほうに向き直った。

照矢が雪島と少し話している頃、スバルたちは・

「行くぞスバル！ロックオンソード！」

「こっちだつて行きますよ暁さん。エドギリブレード！」

暁の高速移動の攻撃に対しスバルはエドギリブレードで合わせて攻撃した。剣と剣がぶつかり合い火花が散った。両者はすぐに距離を取るとスバルの上の方からヒカルがエレキソードを構えて向かってきていた。

「相手は暁だけじゃねえぜ」

「それはこっちもよ、ショックノート！」

ヒカルがスバルに切りかかったとき突然音符が飛んでくるとヒカルに直撃した。ヒカルはミソラの攻撃を受けると暁の近くのところまで距離を取った。笑みを浮かべながら。

「ロケットナックル！」

「簡単にはやらせないよ。フリースボール」

後ろの方からのツカサの攻撃はアオイの攻撃とぶつかり合い残ったフリースボールがツカサに向かっていった。ツカサは周波数変換でかわすと暁たちのところに移動した。

「うまくいくと思ったんだけどね」

「スバルだけではなくミソラ達もやるようになったな」

暁に褒められたミソラとアオイは嬉しそうだった。

「だが、これからが本番だ。行くぞ！」

暁はアシッドブラスターの剣を構えると駆け出した。暁の速さはさっきよりも速くなっていた。

「パルスソング」

ミソラは音波を放ち攻撃した。暁は速度を緩めずそのまま上に跳

んだ。それに合わせてアオイも跳び暁に向かって鉾を振った。

「もらい！スノウフロウズン」

鉾が青いオーラを放った。暁はあせった様子もなくスバルの方を見ていた。そんな暁に遠慮なしに振った。

その時、アオイの目の前に黒い影が現れたと思うと電気を纏った拳が飛んだ。アオイは突然で防御が間に合わず地面に向かって吹き飛ばされた。

「アオイちゃん！」

「よそ見をしてる場合か？スバル」

暁は向きを変えずスバルに向かってきていた。スバルは迎え撃とうとしたがミソラが前に出た。

「ショックノート！」

アンプを出し多数の音符が暁に向かった。暁は周波数変換で真逆の所に移動した。ミソラは向きを変え再び攻撃しようとしたが今度はツカサが目の前にエレキソードを構えていた。

「僕もいるよ。はあ！」

ツカサはエレキソードを振り、ミソラはバックステップでかわした。一方暁はミソラたち二人がツカサ、ヒカルと相手をしている間にスバルの後ろに移動していた。手に持っていたアシッドブラスタの剣は収まっていた。

「後ろを取られたらダメだろ。バルカン！」

暁の持っていたアシッドブラスターから無数の弾丸がスバに向かって飛んだ。

「クリムゾンオーラ」

スバルは暁の方を向きある一枚のバトルカードを使った。すると、赤黒いオーラがスバルを包んだ。暁のアシッドブラスターから放たれた弾丸は全てオーラに弾かれた。それを見た暁は今度はアシッドブラスターからワイドウェーブを放った。オーラはワイドウェーブに当たると打ち消しあうように消えた。

「見たことないバトルカードだな？」

「今のですか？雪島君からPGMを渡されたとき一緒にもらったんです」

「スバル君にあげたって、もしかしてあのバトルカード雪島君が作ったの」

照矢はスバルが使ったバトルカードの性能を見るとエアディスプレイで戦闘データを取っている雪島に聞いた。

「うん。時間の合間に作ってみたんだ。ノイズ率を上げるのに丁度いいカードだと思ってね」

「どうして？」

「あのカードはクリムゾンって言うてるからノイズを使うんだけど、あのカードは空気中のノイズをクリムゾンに変えてそれをバリアとして纏うんだ。攻撃をある程度防げば消えるけど元はノイズから出来たもの。だからノイズ率は上がるし身を守ることが出来るんだよね。少しリスクがあるけど・・・」

「ふん。・・・ってちょっと待って。空気中のノイズをクリムゾンに変えてバリアとして使うって、もしかしてあのカード、再生能力が付いているってことはないよね？」

照矢の質問に雪島は笑みを浮かべ見てみれば、と言った。

ミソラとアオイの二人はツカサとヒカルのコンビネーションで追い詰められており背中合わせの状態で戦っていた。そんな中スバルが新しく使ったカードのことを聞くとツカサが言った。

「スバル君もバトルカードもらったんだ」

「スバル君も、ってもしかして・・・」

ミソラはアンプを出しヒカルに向かって音符を飛ばしながら言った。

「そのもしかしてだ。バトルカード、ウォータースパウ」

ヒカルはミソラの攻撃をかわした後、地面に片手をつけた。すると、ミソラ達の近くや他の地面に青い円が出来るとその円から水が噴出した。水は天井に届くぐらいの高さで勢いよく出た。ミソラ達は円が現れていないところに移動しツカサとヒカルも探した。

「水が邪魔で姿が見えないね」

ミソラは近くにいるアオイにそういうとアオイも頷いた。スバルと暁の周りにも水が吹き出ていたがウィザードに任せて安全な場所にいた。

「ツカサ君がバトルカードを使うなんて意外だね」

「雪島の奴、勝手にバトルカード作りやがって・・・後で覚えてるよ」

スバルはミソラ達の方もじっくり見ているようだ。雪島はどうかやら許可なくバトルカードを作ったようで暁は仕事をやらせようと考えていた。

「（それにしても、ツカサ君がバトルカードを使ったとしても水属性のカードを使うなんて、何かあるのかな）」

スバルは暁の方に気を配りながら辺りを見ると水はまだ止まる様子もなく依然として出ていた。そのため地面には足が浸かるほどの水が溜まっていた。

「（・・・！もしかしてこの水って）」

スバルはツカサの作戦に気づいたようでミソラ達に教えようとしたがツカサ達の方が速かった。

「ライトニングブラット！」

声の聞こえるほうをミソラとアオイが見たとき足の方に電気が通ったような痛さがきた。スバルの周りにはさつきと同じように赤黒いオーラが覆い電気がオーラを壊すように動いていた。

ミソラとアオイは何が起きたか分かってないようだがともかく上に逃げようとした。

「・・・体が動かない」

「これってマヒ！？」

「ミソラ、アオイちゃん。上よ」

ミソラとアオイはハーブの言われたほうを見ると上にはツカサとヒカルが片手を手を組み大技の構えをしていた。

「これで終わりだ！」

組んだ手の先のほうには電気が集まっていた。ミソラとアオイはなんとかかわそうとしたが体が動かないのでどうしようもない。ここに来て二人はツカサが使ったバトルカードの意味に気づいた。

「「ジェミニサンダー！！」」

溜まった電気をレーザーとなってミソラとアオイの二人を包み込んだ。

「うわゝ。ツカサ君とヒカル君。容赦ないね」

照矢はジェミニサンダーを撃った後、電波変換が解け気を失って

いる二人を見て言った。

「確かにね。あのカード渡すんじゃないかったかな。照矢君二人をここに連れてきてもらえる？」

照矢はディムネスにつれて来てもらうように言つとディムネスは部屋から出て行つた。

スバルを包んでいたオーラは消えていて二人は今は地面にたつていた。未だに水は溜まったままだが。ディムネスがミソラとアオイを雪島たちの部屋に連れて行くのを見るとスバルの後ろにツカサとヒカルが来た。来るなり暁が怒鳴つた。

「てめえ、ヒカルだろう！？攻撃するときぐらい合図がなんかしろ！俺も巻き添えを食らつたじゃないか！」

暁はヒカルが技を使った時水に浸かつてた様でミソラたちと同じように受けたらしい。

「あ、それはすまなかつたな暁。わざとじゃないから安心しろ」

「（いや、絶対わざとだろうな）」

ツカサとスバルはまったく同じことを心の中で思っていた。

「さて、どうするスバル君？三対一になつたけど」

「ウォーロック。今ノイズはどれくらい溜まつてる？」

「200%だな。いけるぜ」

ウォーロックが言ったことを聞くと曉たちは真剣な顔つきになった。

「行きますよ。ファイナライズ！」

スバルが叫ぶとノイズが球状にスバルを包み込み辺りのノイズが吸収された。

「ブラックエース！！」

球状のノイズの中から漆黒のアーマーを見に付け翼があり右手に剣を持ったロックマンが出てきた。

3体3（後書き）

オリジナルのバトルカードを出してみました。

感想等よろしく願います。

蘇ったノイズの力

スバルを包んでいた球状のノイズが弾けるように消えると共に漆黒のアーマーを身に包み翼がありノイズの剣を持ったロックマンが出てきた。

スバルは自分の姿を見て失敗はしていないこと確認した。

「失敗せずにうまくできたな。それにしてもブラックエースか」

暁は成功したことうれしく思っていたが同時に嫌な様子だった。ファイナライズの二つの姿はどちらも協力だ。そのうち機動力に特化しているのが今のスバルの姿、ブラックエース。

「（・・・すごい。前とはまるで違う。体がとても軽く感じる）」

スバルはブラックエースの機能が前とはまるで違い強化されていることを感じていた。ヒカルはスバルの姿、ブラックエースの力を雰囲気を感じているようで体が震えていた。しかし、その震えは恐怖ではなくむしろ興奮しているようだ。

「っへ、ノイズの力、どんな物が見せてもらっぜ」

ヒカルは叫ぶとエレキソードを構えた。ツカサはヒカルの様子を見ると少し呆れているようだ。

「（はあ）。いつからヒカルはバトルマニアになったんだろう？それにしてもスバル君のあの姿、すごい力が感じる。気を引き締めていかないか）」

ヒカルはスバルとの距離をある程度取るとスバルに向かって駆け出した。水はすでに止まっており部屋はひざの高さまで水が溜まっていた。ヒカルに合わせてツカサも駆け出した。

スバルはヒカルが向かってくるのを見ると剣を構えた。すると、スバルは一瞬でヒカルの目の前に移動していた。

「！！」

ヒカルはとつさにエレキソードをガードに回した。スバルのノイズの剣はエレキソードによってガードされたがヒカルは後ろに押されていた。足で踏ん張るのがやっとのようで地面にはひびが入りだした。

「暁さん見てないで手伝ってください」

ツカサはエレキソードをだし、遠くでデータを取っていた暁に叫ぶとヒカルの援護にまわった。暁はアシッドブラッスターを構え、と戦闘に加わった。

スバルはツカサと暁が向かってきているのを見ると剣を振りヒカルを吹き飛ばした。スバルはすぐに追い討ちをかけるように斬撃を飛ばした。その斬撃はノイズで出来ているようで先ほどスバルを包んだのと同じ色をしていた。

ヒカルは空中で身動きが取れないため周波数変換でかわしツカサと暁も同様に周波数変換でかわした。斬撃はそのまま壁にぶつかり壁はえぐれたように大きな穴が開いていた。

「・・・すごい威力だね」

「おいおい、加減なしか」

ツカサと暁はそれぞれの感想を言った。

「おい、スバル。今のどんな技だ？」

暁はスバルに聞くとスバルは途惑ったような感じだった。

「え、えっと・・・今の普通に剣を振っただけなんですけど・・・」

「・・・は？」

スバルのまさかの答えに三人は奇妙な声を上げた。

スバルの答えに驚いているのは暁たちだけではなかった。

「剣を振っただけであれはないと思うけど」

照矢は未だに砂煙がたっている壁を見ながらいった。

「・・・まずいな」

雪島はエアディスプレイを忙しそがしそくに操作していた。

「何がまずいの？うまくファイナライズできているみたいだし、力もすごいと思うけど」

「ファイナライズできたのは良いとして、問題はあの力の方だよ」

照矢は雪島のほうに視線を変えると雪島は話し始めた。

「さっきのは大半がノイズによる攻撃みたいなんだけど、濃度が濃すぎるんだよ。さっきの空気中のノイズ率は200%で、スバルがファイナライズしたことによって今はほぼゼロに近いはずなんだけど今の斬撃のノイズ率が300%をゆうに超えてるんだよ」

「え、それはないんじゃないの？」

「攻撃が当たった壁のところを見て」

照矢は攻撃が当たった壁を見ると赤黒い形のがへばりついているのもあれば浮かんでいるのがあった。

「あれは・・クリムゾン？」

「うん。だけどそれだけじゃないんだよ。スバルのハンターに引き寄せられるようにノイズがスバルの周りに集まっているんだよ」

「それであれだけの攻撃力があるんだ。すごいね」

照矢が空中を浮かんでいるスバルを見ながら言つと雪島が静かに言った。

「ノイズが集まるだけなら良いんだけどね」

暁たちはスバルのノイズの力の大きさを知りうかつに攻撃を仕掛けることが出来なくなつた。

「行きますよー！」

スバルは翼を羽ばたかせ暁たちのほうに向かった。

「（普通の攻撃だけであれだ、ノイズフォースビックバンNFBが来るとまずいな）」

暁はすばやく対策を立てるとツカサとヒカルに指示を出した。

「ヒカルとツカサは自分たちのフォーメーションを保ちながら攻撃。常にお互いを援護しあえるようにお互いの周りをしっかり見る」

「「分かりました（分かったぜ）。」

ツカサとヒカルは固まらないように距離を取りスバルの方を見た。スバルは向きを変え急上昇した。ある程度上に来ると剣を暁たちの方へ向けた。

「NFB・・・」

「必殺技が来るぞ」

暁の言葉を聞くとツカサとヒカルの顔が陰しくなった。

「（今までスバルが使ってきた必殺技の対処方は頭に入ってる。さあ、どれが来る・・・）」

暁もどんな技が来ても対処できるように構えた。スバルの周りには無数の小さい青い光が輝いていた。

「デイセンド・サーベル」

スバルが叫ぶと小さな光が円錐上の剣に変わり暁たちに向かって

飛んでいった。

「この技は見たことがないぞ!!」

「ツカサ！迎え撃つぞ！」

「え、分かった」

「ヒカル！迎え撃つのは止めておけ！」

ヒカルは飛んでくる剣の速さを確認すると十分迎え撃つことが出来ると判断したらしく、ジェミニサンダーを撃とうとした時に暁の声が聞こえた。二人が振り向こうとすると剣が地面に刺さっていた。ツカサ達がいた場所は砂煙が立ち上り状態が確認できなかった。

「言わんこっちゃない」

「暁さん。まだ終わってませんよ」

暁はスバルの音が後ろから聞こえて振り向くと片手には黒い球体が現れていた。スバルは暁に対処する時間を与えず黒い球体を暁に向かって投げた。球体は大きくなり暁を包み込んだ。そのときにはスバルは剣を後ろに引き攻撃の態勢をとっていた。

「ブラックエンド……ギャラクシー!!」

スバルは高速で暁が入っている球体を通り二つに斬り、球体は爆発した。爆発が止むと暁が地面に倒れていた。電波変換は解けてはいなかった。

「はい、終了。スバル君たちの勝利。スバル君は悪いけど気を失っている三人をここに連れてきてね」

突然エアディスプレイが突然現れたと思うと雪島が戦闘終了を伝えた。それから、暁、ツカサ、ヒカルをつれてくるように頼むと消えた。

スバルは電波変換をときウォーロックとジェミニ、アシッドたちに協力してもらい練習場から出て行った。

ウォーロックとアシッド

スバルが雪島と照矢のいる部屋に入ると中にはミソラとアオイもいた。しかし、アオイは雪島と内容は分からないが言い合っているようだ。

「私もスバル君たちのようなバトルカード作ってよ」

「ダメ。アオイちゃんは戦闘経験がまだ少ないでしょう。だからダメ」

「何で戦闘経験が少なかったらダメなのよ」

「うまく制御出来なくなるかもしれないから。それに、さっきも言ったけどスバル君たちに渡したカードは初めて作ったやつだからうまくいくか分からないんだよ」

「うまくいったよね。二枚とも」

「だから・・・」

二人のループ会話で話の内容は大体把握できたようだが会話に入ることが出来ないようだ。スバルが入り口に立っていると端の方で二人の会話を見ていたミソラと照矢がスバルに気づいたようでスバルの方へ歩いてきた。

「スバル君お疲れ様。私は途中で負けちゃったけどスバル君の戦いすごかったよ」

ミソラはツカサを椅子に座らせて言った。

「ありがとう。でさ、これはいい」

「ははは・・・アオイちゃんがスバル君とツカサ君だけいいの貰ってるってことで、今交渉中みたいんだけど・・・止めてもらっていい？」

「え、僕が？」

「うん」

スバルと照矢が話しているとツカサが目を覚ました。

「・・・あれ？どうしたの？」

「あ、気がついたツカサ君」

「うん。ところでどうなってるの？雪島君とアオイちゃんがいろいろ言い合ってるけど」

「交渉中らしいよ」

ツカサはスバルたちに聞くとミソラが変わりに答えた。ツカサも二人の話を少し聞いて納得したようだ。ここで、不思議に思ったのかミソラがスバルに聞いた。

「あれ？スバル君、暁さんは？」

「え、ウォーロックたちに頼んでいるはずんだけど・・・」

スバルが自分が入ってきた入り口を見るとドアが開きウォーロックとアシッドが入ってきた。というよりドアを突き破って入ってきた。

「ビーストスイング！」

「ギルティスラッシュ！」

お互いの攻撃がぶつかり合い火花が飛んでいた。それを見たスバル達は一瞬状況が判断できなかったがすぐにとめに入った。雪島とアオイも話を止めウォーロック達を止めに入った。

「ちょっと、ウォーロック、何やってんのさ。やめなよ」

「アシッドも戦うのはやめなよ」

スバルとツカサが止めるように言ったが二人とも聞く耳を持たず止めようとしなかった。

「おら！ビーストスイング！」

「あまいですよ。ギルティスラッシュ！」

ウォーロックとアシッドの争いのせいで部屋に置いていた机や椅子がいくつか破壊れており、無事な椅子なども投げあいスバル達は机などの物陰に隠れた。

「ちょっと、ウォーロックいい加減にしてよ！」

「聞いてないね」

「・・・スバル君。ちょっと、ウォーロックにお仕置してもいいかな？」

「止めれるんらしいよ」

スバルは未だに飛んでくる椅子や机などから身を守りながら言った。雪島は飛んでくるものに当たらないように姿勢を低くするとエディスプレイを操作した。すると、斬りあっていたウォーロックとアシッドを囲うように光の棒が立つとあっという間に檻ができ争いは終わった。

スバル達は物が飛んでこないことを確認するとウォーロックとアシッドを叱った。

「もう！何やってるのよ！部屋が無茶苦茶じゃない」

アオイは荒れ果てた部屋を見回しながら言った。

「あゝあ、部屋の始末が大変だね」

「まあ、ここは原因であるウォーロックとアシッドに任せよう」

「照矢君の意見に賛成」

それからスバルたちもミソラに続くように賛成した。ウォーロックとアシッドはそんな話は聞く余裕がないようだった。なぜなら・

「（なぜ、檻に剣が・・・）」

「（しかも、俺は何本かに斬られたぞ）」

捕らえてある檻にはウォーロックとアシッドの姿をかたどるように剣が隙間なくあった。刃先を向けて。なので、迂闊に動くことも出来ない状態であった。

スバル達は気づいてはいるだろうが見なかったことにして話を進めた。

「ところで暁さんは？ウォーロック達が連れてきてるんじゃないかな？
つたの？」

「そうだよ。ウォーロック、暁さんは？」

照矢がウォーロックに聞くとスバルも聞いた。

「えつとな、・・・」

「そもそも何で暴れてたの？」

アオイが戦いではなく暴れてたと聞くと少し落ち込んだようだ。
アシッドがスバルたちに説明を始めた。

・回想ー

「くそ、ジェミニのやつ逃げやがって」

「口を動かす暇があるならしっかり持ってください」

ウォーロックたちは暁をひこずるように運んでいた。

「お前はいちいちうるせんだよ」

「何ですか？何も考えずただ突っ込んでいくだけの戦い方しか出来ず、何も学ばないウォーロックに言われたくありませんね」

「あんだと！てめえ、俺が何も考えてないと思ってるのか！？」

「違うんですか？」

ウォーロックは切れ気味になっており、アシッドは冷静で言った。

「はん！俺より弱いやつがいちいち言ってるじゃねえぞ」

「それはあなたの方ではないんですか？」

「何だと！？」

「何ですか？」

二人は言い合いになり、二人から忘れられた暁は地面に倒れていた。

「（いてて・少し痛むな。お、アシッドとウォーロックがいるじゃないか）おーい、二人とも・・・」

「上等だ！どっちが強いのか、今から戦ってみようじゃないか」

「良いですよ。まだ決着が付いてないですからね」

さっきの戦いで疲れているためあまり大きな声が出せないが、暁の精一杯の声はむなくウォーロックたちに届いてはいないようだ。ウォーロックとアシッドはもはや暁のことは忘れておりお互いの間に火花が散っていた。

先に動いたのはウォーロックだった。

「くらえ！ビーストスイング！」

「そんなの当たりませんよ」

アシッドはウォーロックの攻撃を軽々よけた。ウォーロックの攻撃はどのまま壁に当たり辺りに破片が飛び散った。

「いて。お、おい、アシッドにウォーロック、戦うなら外でやれ。それより、俺を忘れ・・・」

「ギルティスラッシュ！」

「当たるかよ」

暁の叫びに近い言葉も、もはやウォーロックたちには聞こえてないようだ。また、破片が暁の方に跳んだ。ウォーロックとアシッドはそのまま偶然なのかスバルたちが集まっている部屋の方へ行きながら斬りあっていた。

「おゝい、アシッド、ウォーロック。俺を忘れるな」

暁が叫んだときにはウォーロックたちはもういなかった。

・回想終了ー

「それで暁さんを置いてきたんだ」

「「はい（ああ）」」

ミソラはウォーロックとアシッドに確認すると頷いた。

「じゃあ、探しに行こう」

スバルは部屋から出て暁を探しに行った。それに続いてツカサ、ミソラ、雪島、アオイ、照矢の順に部屋から出て行った。

「おい、ちょっと待て！この檻どうにかしろ！スバル、雪島！」

ウォーロックは身動きが取りずらい中で叫んだ。アシッドはうるさそうに見ていた。ドアが閉まり少しするとアオイが入ってきてハインターを操作すると檻が消えた。

「二人はこの部屋を掃除してから追いかけてきてね。じゃあ」

アオイは伝えることを伝えるとドアを閉め走っていった。ウォーロックとアシッドは改めて部屋を見渡した。部屋は机や椅子があちこちに倒れていて、花の入った花瓶が割れてあり、壁も傷だらけだった。

「・・・これを俺たちが掃除するのか？」

「みたいですね」

「・・・アシッド。後は任せた」

「逃がしませんよ」

アシッドは逃げようとするウォーロックを捕まえると掃除を始めた。ウォーロックはその後何度か逃走を図ったようだがアシッドに止められそのたびにぶつぶつと言っていたそうだ。

「あれ？いないね。何処に行ったんだろう」

スバル達はウォーロックたちの話で暁のいた場所に来ていた。周辺はウォーロックたちのせいで壁は傷だらけで破片がそこら辺に飛んでいた。

「うゝん。ちょっと、暁さんの部屋をのぞきに行こうよ」

「いいよ」

スバル達は暁の部屋に向かった。

「あ、いた」

ミソラが初めに入ると部屋の隅で暗いオーラを放ちながらうつろまっていた。ミソラが部屋に入るとスバルたちも中に入った。

「どうしたんですか暁さん。暗くなりすぎですよ」

「アオイちゃん。多分聞こえてないと思うよ」

「暁さん。落ち込んでないで話し合いをしましょうよ」

スバルが暁に声をかけてもため息を付くだけでうずくまったままだった。

「はあ、暁さんってこうゆうときあるよね」

「そうそう、いざという時はしっかりしているのに子供みたいなときあるよね」

「それに、うまい棒を沢山食べて後始末してないし」

「大人なのにヒーローと言ってるし」

「ミ、ミソラちゃんとアオイちゃん、それ以上言わない方が。暁さん、さらに落ち込んでいるよ。ウォーロックたちに忘れられただけでも落ち込んでいるんだから」

「スバル君。最後のはいらないと思うよ」

ミソラとアオイの容赦なく言われ深く突き刺さったようだがスバルの一言で元気を直したようだが最後の一言で初めの状態に戻った。

「どうする？話し合いが始まらないけど」

「まあ、気力が戻るまでまとうよ」

照矢と雪島は離れたところでスバルたちを見ていた。

予期せぬ出会い

落ち込んでいた暁が復活するのに30分近くかかった。そのころにはウォーロックとアシッドは掃除をすませ戻ってきていた。

「よし、じゃあ、まず結果を聞こうか」

暁は雪島に話を振ると話し始めた。

「エース/ジョーカーPGMはうまく起動し、能力や威力は想像を超える力を発揮していました。ただ・・・」

雪島は少し間を置くとエアディスプレイをスバルたちに見えるように出した。

「これを見てください。戦闘中のノイズ率なんですけどここ、急激にノイズ率が減ってますよね。ここで、スバル君がファイナライズしたんですけどその後、ノイズは増えてませんよね」

「みたいだね。ここから先は100%きってるね」

「発生したノイズは攻撃のために吸収し威力を上げた。ノイズが増えない理由はそんなところだろ」

暁が予想を言った。

「多分そんなところでしょ」

「暁さん、一応自分なりに考えをまとめてたんですね」

アオイが言うと暁は手を組み当たり前だというような態度を取った。

「一応とはなんだ。俺はサテラポリスのエースで、ヒーローなんだ。これぐらいは当然さ」

スバル達は苦笑すると照矢が雪島に聞いた。

「じゃあ、スバル君のPGMはもう実戦で使うことができるの？」

「それなんだけど・・・スバル君、PGMをしばらくの間、またかしてもらえないかな？」

スバル達は雪島の意外な発言に驚き雪島のほうを見た。

「え、なんで？」

「そうだぞ。PGMもうまく起動した。能力もバッチリだった。なにか問題でもあるのか？」

暁は真剣な顔で雪島に尋ねた。

「ファイナライズした後のノイズの吸収がPGMや武器にならないんだけど・・・暁さん、ノイズでの攻撃や戦いの後で発生したノイズはその後どうなりますか？」

雪島の突然の質問に対して暁は当然というように話し出した。

「まず、ノイズでの攻撃だがしばらくたつと使った分の倍に近い

量のノイズが発生する」

「え、そうなんですか？ 戦闘が終わった後、ノイズは感じないから消えるのかと思ってたんですけど」

暁の説明にミソラが興味を持ったようで集中して聞いていた。

「ミソラそう思っているなら気をつけたほうがいいぞ。ノイズは数時間経つとクリムゾンに変わるんだ。そしてさらに数時間経つと特有の磁気を帯びるんだ」

「磁気をですか？」

ツカサが説明の途中で暁に聞いた。

「ああ。その磁気は発生してから時間が経つほど強くなってな。厄介なのがここなんだよな、磁気が強くなると人体に引き寄せられるようになるんだよ」

「え、人体にしき寄せられるようになるんですか？」

「ああ。だからミソラは特に気をつけろよ。知らないうちにクリムゾンが体内に溜まっているかもしれないぞ。クリムゾンは体内に吸収されるとノイズに変わり様々な悪影響が発生するからな。ところで、雪島それがどうした？」

暁は説明し終わると身を乗り出し雪島を真直ぐ見つめた。

「・・・ファイナライズした後のノイズの吸収が気になりましたね。あれだけの威力がある攻撃でノイズが100%切っているから吸収

の速度が速すぎると思うんですよ。だから」

雪島が続きを言いかけたとき暁が止めた。

「お前の言いたいことが分かった。スバルはいいか？」

「はい。分かりました」

スバルは頷くと雪島にPGMを渡した。雪島はPGMを預かるとハンターに入れた。

「よし、じゃあこれからみんなで何処かに・・・」

暁が切り上げようとしたときドアが開きクインティアが入ってきた。

「シドウ。長官が呼んでいるわよ」

「ああ、それなら後で・・・」

「だめよ。今すぐ行くのよ。それじゃあ、みんなまたね」

喋り出した暁をクインティアは強引に引きずるように連れて行った。暁は連れて行かれるさい色々言っていたがそれも空しく連れて行かれた。

「暁さん、お仕事がんばってくださいね」

「さて、これからどうする？」

「せっかくだからみんなで、どこか食事に行かない？」

ミソラがみんなに聞くとツカサが提案した。今は丁度正午。そろそろお腹もすぐごろだ。

「うん。それもそうだね。どこか良いところがあるかな？」

「それなら、いい喫茶店を知ってるよ。今から行ってみない？」

「いいけど、ちょっとみんなに聞いてほしい事があるんだけど、いいかな？」

アオイが言うと照矢が不安そうな態度で言った。

「それじゃあ、話も含めてアオイちゃんの言う喫茶店でしない？
もう私お腹ぺこぺこだよ」

「それじゃあ、アオイちゃん案内頼んで良いかな？」

「いいよ。じゃあ、行こう」

アオイを先頭にスバル達は部屋をあとにした。

スバルたちがWAXAの出口まで来ると長官、暁、ヨイリー博士、クインティアが誰かと話していた。スバルたちが近づくと暁たちの話しが聞こえた。

「それでは先ほどいただいた資料が前回、現時点で分かっている

データーの全てですね」

「はい、そうです」

暁たちと一緒に話している人、三谷由人が暁たちに確認を取るように言った。

「それでは、アドミストの件はそちらに任せましたよ。それでは・ん？」

由人が帰ろうと足を動かしたとき暁の近くで止まって見ていたスバルたちに気がついた。

「そちらの子供たちは？」

暁たちが後ろにいたスバルたちに気がつくとはどこにいる、と無言で訴えているようだった。照矢は由人の顔を一目見ると顔を見られないように下を向いた。

「ここは子供が自由に出入りしているのではないですよね？」

「それはありません。ここにいる子供たちはアドミストの事件のときにいた学校の生徒たちです。話を聞いていたんです」

「え、クインティアさんそれって・・・」

ミソラが言いかけたとき照矢がミソラの口を手で塞ぎスバルたちだけに聞こえる声で言った。

「ごめん、今は何も言わないで」

照矢はそう伝えたと手を放した。スバル達はなぜかはまったく分かっていない状況だったと言われたとおりにした。由人はそうでしたか、というと照矢に気づいた。

「おや、君はもしかして、空慰君の息子の照矢君ではないのかな？」

由人に名前を言われた照矢はしぶしぶ顔を上げて真直ぐ由人の顔を見た。

「やはりそうか、君もアドミストにいたのかね？」

「はい」

照矢は簡単に由人の質問に答えると由人はスバルたちの顔を順番に見た。最後にスバルの顔を見ると暁たちのほうに向いた。

「それでは私はこれで。何か進展がありましたらそのつど報告をよろしく願いますよ」

由人はそういい残すと外に出て行った。由人がWAXAの前に止めてあった黒い車に乗り姿が見えなくなるのを確認すると暁たちは体から力が抜けたようになり息を吐いた。

「何であるタイミングでお前たちが来るかな・・・」

「暁さん、さっきいた人は誰なんですか？」

「政治家の三谷由人よミソラちゃん」

「それよりお前ら、どこかに行く様子だった方がいいのか？」

暁がスバルたちに言うときミソラとアオイが速く行こう、と駆け出した。残されたスバルたちも後を追いかけた。

スバルたちもWAXAから出て行き姿が見えなくなると長官が言った。

「それにしても、照矢君に助けられたな」

「予想外でしたからね。それより、彼は何で由人のことを知ってたんですか？」

「うーん。暁君何か知ってるかね？海月さんと赤瀬君は素直に色々教えてくれたが彼はあまり話してくれなかったようだから分からないんだが」

暁は長官に言われるとハンターを操作し、ある画面を出した。長官とクインティアがその画面を見るときなるほどな、と言った。

「ティア、ジャックのほうはどうなっている」

「今のところは大丈夫そうよ。うまくいってるわ」

「さて、我々も仕事に戻ろうではないか」

長官が言っていると暁たちは仕事に戻った。

由人はWAXAから車で移動しており信号と渋滞で止まっていた。車の中には由人と運転手、秘書の瀬長ひさしの二人が乗っていた。

「由人さん、話し合いはどうでしたか？操作は進んでおりませんか？」

「いや、どうやら進んでないようだ。だが収穫はあった」

由人は窓の外を見ながら不適な笑みを浮かべていた。

「と、言いますと」

「空慰君のところの息子に合った」

「空慰といいますと、あのフレイグタウンのですか？」

「ああ。アドミストにいた、と言っていたが嘘だろうな。ひさし、少し調べておいてくれ。それと・・・分かっているな？」

由人は睨むような目つきでひさしに言った。ひさしは了解です、と笑みを浮かべて言った。二人が話している中、由人のハンターの中には暗闇の中、冷たい目をしたウィザードが目を開けた。

相談

- 喫茶店 -

スバル達はアオイを先頭に案内されて、今店の入り口に立っていた。店はコダマタウンから少し離れている場所にあった。喫茶店は木造で作られていて周りには店と同じぐらいの高さの木が数本生えていた。

「ここがその喫茶店？」

スバルは目の前にある店を見上げながら言った。その店の名前は・

「・・・『夕焼け』？」

「そう。まあ、ともかく中に入ろうよ」

アオイは店のドアを開け中に入った。スバルたちも続くように中に入ると喫茶店の中は多くの人がいた。スバルたちが中に入ると店の中からお盆を持ったスバルたちと同じ年くらいの男の子が元気にいらっしやいませ、と言った。男の子はカウンターに紙を置くとスバルたちの方に小走りで来た。

「野咲君。席開いてる？」

「珍しいね。こんなに大人数で来るなんて。で、何名さまでですか？」

「六人だよ」

「六人・・・多分開いてたと思う。悪いけど自分で席を取ってもらうていい？」

「うん、分かった」

野咲は申し訳なさそうに言うとかウンターの方に小走りで向かった。スバル達は店の中を見回すと丁度六人が座れるような席が開いていた。スバルたちが席に座ると野咲が水を持ってきた。

「あれがメニュー表です。決まりましたらお呼びください」

「そんなに固くならなくていいのに」

野咲はお客様だからね、というとかウンターに向かった。スバルたちはそれぞれ椅子に座るとメニューを決め始めた。

「みんな料理決めた？」

アオイが聞くとスバル達は頷いた。アオイは忙しそうにカウンタ―やテーブルを行ったりきたりしている野咲を呼んだ。野咲は注文を取るとまたカウンターの方向に向かった。

「大変そうだね、あの子」

「まあ、丁度昼間だしね。けど、そろそろ減ってくると思うんだけど」

「ねえ、それより照矢君、何か話があったんじゃないの？」

ツカサが聞いたとき野咲がサンドイッチと紅茶、コーヒーなどを
持ってきた。スバル達は話の前にサンドイッチを食べ始めた。

「で、話ってなんなの？」

スバルはサンドイッチを食べながら聞いた。ミソラとアオイの二
人は話より食べる方が優先らしく二つ目、三つ目とパクパクと食べ
ていた。

「・・・僕と同じ小学校に来ていない同級生がいるんだけど」

「登校拒否の人多いね。スバル君に雪島君も一時なってたし、あ
まりいないと思ってたんだけどな」

アオイは言うサンドイッチを一口食べた。

「悪かったな、登校拒否で」

雪島は不機嫌そうに言った。ツカサは紅茶を飲みながらそれで、
と聞いた。

「滝久たきひさ 楓かえでって女の子なんだけどもう一週間ぐらいになるかな」

「それで、その子、今どうしてるの？」

ミソラが食べるのをやめて照矢に聞いた。スバル達は二十個ぐら
いあったサンドイッチが消えている皿を見て少し驚いていた。

「・・・行方不明なんだ。家にも何処にもいないんだ」

「え、いなくなったの？」

ツカサが食べていたパンを置いて言った。

「うん。学校では自殺したんじゃないかって噂もあるんだ」

「じ、自殺？・・・」

スバルは飲んでいたコップを置き驚いたように言った。

「うん。けど、そんなはずはないと思うんだ。いや、絶対無い」

「・・・何か根拠があるの？」

確信をもって言っている照矢に雪島が聞いた。

「根拠はないよ。ただ、そんな気がするだけだよ」

照矢はさつきと違い表情は暗くなり自信がなさそうに言った。雪島はしばらく照矢の顔を見ていたがフツと笑うとハンターを操作した。

「うん。ねえ、スバル君これから時間空いてる？」

「うん、大丈夫だよ」

ツカサがスバルに聞くとミソラとアオイも大丈夫だよ、と言った。

「僕は無理かな。ジャック君の手伝いしなきゃならないし」

「え、みんな、それって」

照矢がスバルたちに聞くとスバルが当然と言うように言った。

「ようするにその子を探しているんでしょ。だったら、人数は多い方がよいよ」

「本当にいいの？」

「もちろんだよ」

照矢はツカサの言葉で希望をもてたように明るくなりありがとうと言った。スバル達は席を立つとアオイは野咲を呼んで会計をしにいった。スバル達は先に喫茶店から出ると雪島はWAXAに戻っていった。しばらくするとアオイが喫茶店から出てくると背伸びをした。

「さて、まずは何処から探す？」

「照矢君が住んでいるフレイグタウンから探した方がいいと思うけど」

「私もそう思う」

スバルが言うとミソラも賛成した。

「じゃあ、行こうか」

スバル達はフレイグタウンに向かった。

・フレイグタウンー

ウェーブライナーが駅に到着すると中からスバルたちが出てきた。スバル達は駅から出ると目の前には山や森など緑が一面に広がっていた。

「うーわ、すごいね」

「ここがフレイグタウン」

「じゃあ、探す前にまず町を案内しようか」

「それもそうだね。町を案内してもらってからの方が効率がいもんね」

風に当たっていたミソラは照矢に言った。

「それじゃあ、照矢君、町を案内してもらってもいい？」

「もちろんだよ」

照矢はスバルたちに言うのと町へ歩いていった。

緑に囲まれた町

・フレイグタウン

スバル達は照矢に町の中を案内してもらっていた。今は小学校の前に来ていた。

「この町は見ての通りだけど周りが山に囲まれていてとても静かな場所なんだけどね。で、ここが僕が通っているフレイグ小学校。こここの町の子供は大抵ここに通っているよ」

「え、大抵ってどういうこと？」

学校の校門に向かって歩きながら説明した照矢にスバルが聞いた。

「この町には小学校はここにしかないんだ」

「え、ここにしかないの？」

「うん」

フレイグ小学校に入ると校舎に向かって歩いた。校舎の前まで来ると照矢が言った。

「今日は休日だからもちろん校舎の中には入れないけどね」

「へへえ、三階建てなんだね」

ミソラは小学校を見上げて言った。スバル達はしばらくグラウンド

や学校の周りを見てまわると学校から出て行った。学校から出た後、町案内を続けた。

「ここがフレイグタウンの公園」

「公園も木や緑が多いね」

「何だかこうゆう公園も良いよね」

ツカサとスバルが話していると自転車で誰かが近くに来了た。

「こんなところで何してるの、照矢君」

自転車に乗った女の子が照矢に言つと照矢は嫌そうな顔で言つた。

「麻衣^{まい}ちゃんこそどうしたの？」

「珍しく一人じゃないから不思議に思つたのよ。それより、まだ探しているの？いい加減迷惑だから諦めたら」

麻衣と呼ばれた女の子は呆れたように言つと照矢は黙つたままで何も言わなかった。スバルとツカサ、ミソラにアオイは二人が話している姿を見ていた。

「ま、がんばれば。誰も手伝わないと思うけど」

麻衣は馬鹿にしたように言つと自転車をこいで去つていった。麻衣が去つていくのを見るとミソラとアオイが怒つた様に言つた。

「誰なのあの子。何だか聞いてて嫌になつてくるわ」

「本当だよ。見下したように言って気分最悪だよ」

「荒松^{あらまつ} 麻衣^{まい}。同級生だよ」

ミソラとアオイが言ったとき照矢がみんなに聞こえるように言った。ツカサはハンターの時計を見た。

「そろそろ四時になるけど、どうする？ 今から探し始めても時間がないと思うけど」

「それもそうだね。ごめんね照矢君。探すの手伝おうとしたのに」

「別にいいよ。まだ時間はあるから」

照矢は笑ってはいたがどこか無理をしているようだった。

「じゃあ、序でに後一つ案内したいところがあるんだけど、いいかな？」

「案内したいところ？」

スバルが公園から出て行くこうとしている照矢に聞いた。

「うん」

照矢は頷いて言った。スバルは三人の方を見ると三人とも行つてみたい、と言った。スバル達は照矢に案内されて山の方へ向かった。

「ねえ、まだなの。いい加減疲れたよ」

「私も。後どれくらい歩けばいいの？」

ミソラとアオイは疲れたようで地面に座った。スバルとツカサも疲れているようだった。なぜなら・

「森の中を歩き出して30分になるね」

「え、ツカサ君。本当に？」

スバルも歩くのを止めて休憩していた。ツカサは少し先の方の山道を歩いている照矢を呼んだ。

「おゝい、照矢君。後どれくらい歩けばいいの？」

ツカサの声が聞こえたようで後ろ向いて言った。

「あと少しだよ。この道を抜けたところだから」

その声を聞くとアオイは立ち上がり歩き出した。ツカサも照矢の方へ歩き出した。ミソラまだ歩こうとしている二人を見てえゝと不満そうな声を上げた。スバルはミソラに近づき手をさしだした。

「ほらミソラちゃんも。あと少しだからがんばって」

「スバル君・・・うん」

ミソラは元気に言うത്とスバルの手を取り立ち上がるとツカサとアオイの後を追うように歩き出した。

スバルとミソラが森を抜けると小学校のグラウンド程の広さに草原が一面に広がっている広場に出た。そこからはフレイグタウンが一望できた。さらに、今は夕方で夕日が草原や町を照らしオレンジ色に輝いていた。ツカサとアオイもその風景に見蕩れていた。

「すごい」

「きれい」

スバルたちもツカサたちと同様ようにその風景に見蕩れそれぞれ思ったことを口にしていた。

「どう？緑に囲まれた町だけの風景。これを見せておきたかったんだ」

「すごいよ。こんなにきれいなところ初めて見たよ」

「僕も。こんなところも在るんだね」

アオイとツカサが言った。二人ともさっきまで疲れていた顔が疲れが取れたように晴れやかだった。

「ここって、照矢君にとって特別なところなの？」

ミソラが照矢に聞くと少し前に出ると空を見上げて言った。

「ここね、楓ちゃんに教えてもらったんだ」

「楓ちゃんって今探している？」

スバルは照矢に聞くと照矢は遠くを見ながら頷いた。

「いろいろあってね。成り行きで教えてもらったんだ」

スバル達はそれを聞くと何も言えなくなりオレンジ色に照らされている町をしばらくの間眺めていた。

夕日が沈みだし辺りが暗くなってきた。

「さて、そろそろ町に戻らないと帰りが大変になるから町に戻るうか」

座って風景を見ていた照矢が立ち上がるとスバルたちもつられるように立ち上がった。来た時と同様に照矢が先導して町に戻っていた。途中、スバルが暗闇で足を捕られ何回か転んだが。

スバル達は森から出ると町の中を歩いていた。駅に向かっていると近くの店に置いてあったテレビのニュースが耳に入った。

「続きましては、先日起きた通り魔が再び現れました。被害に遭われたのは十二歳の小学生で刃物で斬りつけられたそうですが命に別状はないようです。今回起きたの合わせるとすでに十数件に上ります。警察では同一人物の犯行と見て捜査をしているようです・・・」

ニュースの内容は近頃起きている通り魔の話だった。スバル達は

歩くのを止めニュースを聞いていた。大体聞き終わるとツカサが独り言のように言った。

「近頃物騒なことが多いね。何処かの店や公共の遊具とかが壊されていたり」

「本当だよ。警察は何をしてるんだろうね」

「まあ、僕たちも警戒していた方がいいね」

スバルが言うともた一行は駅へと向かい歩き出した。

・コダマタウンー

スバルとミソラはウェーブライナーでフレイグタウンからコダマタウンへ戻ってきていた。アオイとはウェーブライナーで別れ、ツカサとは帰り道で別れた。

スバルは今家に戻っていてご飯を食べていた。

「へへえ、友達の町に行ってたのね」

「うん。それでねあかねさん・・・」

ミソラがご飯を食べながら楽しそうに話しているとあかねが止めた。

「今はあかね、じゃなくてお母さんでしょ」

「あ、え、えつと・・・それでお母さん」

「うん、なに？」

ミソラは恥ずかしそうに言つとあかねが笑顔で聞いた。

「そこでとても景色がきれいなところを見せてもらったの」

あかねはミソラが夢中になって話しているのを笑顔で頷きながら聞いていた。

「（ミソラちゃん、照矢君に見せてもらった景色が気に入ったんだ）」

スバルはご飯を食べながら考えていると大吾がただいま、と玄関で言った。あかねは話を中断すると玄関に向かった。少しするとあかねが大吾と一緒にリビングに来た。

「お、ミソラちゃんいらっしやい・・・じゃなかったな」

「えつと、お帰り、父さん」

ミソラがまた恥ずかしそうに言つとスバルも続いてお帰り、と言った。

「おう、ただいま、スバル、ミソラ」

大吾は二人にそう言つと服を着替えるのに部屋に向かった。しばらくすると大吾はいつもの服装でリビングに戻ってきた。大吾は空腹だったのか椅子に座るなり置いてある夕食を食べ始めた。

ミソラは大吾も加わったのでまた今日のことを一から話し始めた。話が一息ついてくるころにはスバルとミソラは夕食を食べ終わっていた。

「あ、そうそう。ミソラちゃんは1階に空き部屋を作ったからその部屋を使つてちょうだいね」

あかねは食器を洗いながらソファーに座りスバルと一緒にテレビを見ているミソラに言った。ミソラはあかねの方を見たがすぐに横を向き不満そうな顔をしてはい、と言った。スバルは背伸びをすると立ち上がった。

「それじゃあ、僕は先にお風呂に入るね」

スバルそのまま着替えを取りに自分の部屋に行くと風呂場へ向かった。

スバルが風呂から出て自分の部屋に戻るとすぐにベッドに直行した。

「今日は疲れた」

「おい、明日は学校だろう。準備しなくていいのか？」

「明日するから。それより、今日は疲れたからもう寝るね。おやすみウォーロック」

スバルはウォーロックに言うと布団に潜った。ウォーロックもハインターに戻りスリープモードに入った。

第三の襲撃

「コダマタウン　・　スバル家」

窓から差し込む朝日が部屋の中を照らしミソラが眠たそうな顔をして起きた。

ミソラは服を着替えるとリビングに向かった。ミソラが部屋の中に入るとあかねが朝食を作っていた。

「あら、おはよう、ミソラ。速いわね」

「おはようございます」

「こちら。敬語はなしよ」

「あ、はい・・・じゃなくて、うん」

あかねはミソラに言つと素直に頷いた。ミソラは顔を洗ってくる
と部屋の周りを見た。

「あれ？スバル君は？」

「スバルなら朝早くにルナちゃんに呼び出されたみたいでもう学校に行つたわよ」

「え、そうなの？」

「ええ。はい、今日の朝ごはん」

あかねはミソラの前に朝食を並べた。ミソラは箸を持ち食べ始めた。

「（何で速く学校に行つたんだろう・・・ま、速く食べて私も学校に行こうと）」

ミソラはそんなことを考えながらご飯を食べていた。

・コダマ小学校・生徒会室―

「・・・で、なんで僕がこんな朝早くに起こされて、委員長たちの手伝いをしないといけないの？」

スバルはため息をつきとても忙しそうに動いているルナ、キザマ口、ゴンタに言った。ルナは書類に書かれていることを確かめながら怒鳴った。

「うるさいわね！そんなことゴンタに言いなさいよ！」

「そうだぞ、スバル！口を動かすなら手を動かせよ」

「そもそもゴンタ君が預けていたデータを消去するからでしょう。バックアップも取ってなかったんですよ」

キザマ口は隣にいるペディアと一緒にエアディスプレイを操作していた。ゴンタは小さくなりめんぼくねえ、と静かに言った。スバルも何だかんだ言って書類を分けていた。

- 数時間前 -

外はまだ薄暗くスバルはまだ寝ていた。物音のしない部屋に突然ピリリ・・・と音が鳴った。スバルは布団に潜ったまま近くに置いてある時計の目覚ましを止めようと手で触っていると音が止まった。スバルは何もなかったように布団をかぶりそのまま眠りについた。しかし、一分も経たないうちにまた同じ音が鳴った。スバルはさつきと同じように目覚ましを止めようとしたが音は止まらずに続けた。

「もう、うるさいな」

スバルはベットから体を起こすとあくびをしながら音がしている方に歩いていった。音はスバルのハンターから鳴っていた。

「（電話か・・・誰なんだろう、こんなに朝早くから）」

スバルはハンターを操作して電話画面を出した。すると・・・

「もう！電話に出るのにどれだけ時間が掛かってるのよ！！」

電話をかけたのはルナだった。ルナの怒鳴り声に近い声はスバルの耳に入った。

「・・・委員長、今何時だと思ってるの？」

「そんなのはどうでもいいわ。スバル君、今すぐに学校に来なさい！」

「な、何で？」

ルナはスバルの言ったことを耳にせずスバルに言った。起きたばかりのスバルはまだ眠たいように目を擦りながら聞いた。

「ゴンタが今日学校に提出するはずだった今年の予定表や予算とかをまとめたデーターを全て消しちゃったのよ」

「ええ！？どうして？」

「ウィザードのオックスと暴れまわってその拍子に消しちゃったらしいのよ」

ルナは呆れながら言った。

「・・・まさか、委員長たちの仕事を僕にもやれって言っくんじゃ」

「あら、あなたにしては察しがいいわね。その通りよ。それじゃあ、十分以内に來なさい。分かったわね」

「ちょ、ちょっと待つてよ・・・」

スバルが言いかけたときにはすでに電話は切られていた。スバルがため息をつくウォーロックはあくびをしながらハンターから出てきた。

「お、珍しいこともあるもんだな。今日は雨か？」

「それどうゆう意味だよ」

スバルは不機嫌そうにウォーロックを見た。ウォーロックは苦笑すると改めて聞いた。

「で、いくらなんでも速いな。何かあったのか？」

スバルは手短かにルナとの会話をウォーロックに説明した。話し終わると「ま、がんばりな」と人事のように言う Hunter の中へと戻っていった。スバルは服を着替え下に降りるとご飯を急いで食べると学校へ向かった。

ゴンタが消してしまったデータを作り直すためキザマロとペディアは書類の制作、ルナはその書類のチェック、他スバル、ゴンタ、ウィザード（ウォーロックを除く）はその書類の整理やその他の仕事といゆ分担でやっていた。ルナはなんとしてでも間に合わせるためトロトロやっているゴンタに容赦なく怒ったりした。

作業し始めて時間が経ち生徒たちの声が外から聞こえてきた。部屋の中には全員燃え尽きたように椅子や床に座っていた。

「キザマロ、今ので最後？」

「はい。今ので最後です、スバル君」

「時間ギリギリですね。お疲れ様でした」

ゆういつ疲れた様子のないウィザードのペディアはそう言うところの掃除をしていた。モードはルナのハンターに完成したデータを

送信していた。

「じゃあ、私は先生に渡してくるからスバル君たちは先に教室に行っておきなさい」

ルナは自分のハンターを取りモードをつれて職員室に向かった。スバルたちは荷物を持ち部屋を出ようとするミソラ、ツカサ、竜牙が来た。

「あ、ここに居たんだ」

「おはようみんな」

ミソラ、ツカサの順にそう言った。スバルは「おはようみんな」と言うと廊下に出た。それに続いてゴンタ、キザマロも出てきた。

「何してたの？聞いてみたら朝早くから何か作業していたようだけど」

竜牙はスバルたち三人に聞くとキザマロが話した。話し終わると竜牙はゴンタに言った。

「ゴンタ。牛井の取り合いでデータを全て消去するか？普通」

「くそ。なんか言い返したくなるが何も言えねえ」

ゴンタは悔しそうに言っていると竜牙がさらに言った。

「珍しく朝起きたなら授業は居眠りするんじゃないのか？」

「授業……あ!!」

スバルは突然大きな声を出したのでミソラたちはスバルの方を向くとミソラが聞いた。

「どうしたのスバル君？」

「授業の準備してくるの忘れてたんだよ。委員長に呼び出されてすぐに来たからするの忘れてた」

スバルは自分の荷物の中身を確認しながら言つとミソラが近づいてきた。

「本当だ。今日の授業のノートや教科書が入ってないよ。なんで昨日準備しておかなかったのよ」

「仕方ないね。ミソラちゃんに借りるか見せてもらったら？」

ツカサがスバルに言った。

「スバル君！わざと準備しなかったんじゃないんですか!？」

「そうだぞスバル！お前わざとだろう！いや、わざとだ！」

「え、ちょっと待つてよ。わざとじゃないって」

ゴンタとキザマロはスバルに詰め寄りながら言つとスバルは少しずつ後ずさりしていた。

「ツカサ君、今のわざと言つたでしょう？」

「ん？何のこと？」

竜牙は三人のやり取りを見ながら言うツカサは笑顔で言った。
ゴンタとキザマロはスバルを壁まで追い詰めていた。

「さあ、スバル（君）！素直に白状したらどうだ（ですか）」

スバルは八方塞になったこの状況を何とかしようと考えを巡らせているとキーン・コーン・カーン・コーンと学校のチャイムが鳴った。

「あれ？このチャイムって・・・」

「ホームルーム開始のチャイムだね」

竜牙の一言でその場の時が一瞬止まったように見えた。スバルは荷物をミソラから受け取るとスバル達は教室まで全力で走り出した。

・フレイグタウン ・ フレイグ小学校ー

スバルがルナたちと生徒会室で働いているころ照矢は学校に登校していた。いつものように生徒が自転車をこいで学校に向かっている並木道の下を歩いていた。照矢がボーとして歩いていると頭上から数枚の葉が落ちてくると数本の切られた枝が落ちてきた。照矢に当たることはなかったが、その後すぐに照矢の頭上から声が聞こえた。

「おい、大丈夫か？」

照矢が見上げると木の枝を支えにして立っている男がいた。男の目の下に真直ぐな切り傷がついていた。その男は照矢の姿を見ると近くに脚立が立てかけているのにもかかわらず飛び降りてきた。照矢はいきなり男が飛び降りてきたので「うあ」と声を上げ後ずさりした。

「いや、すまなかった。まさか下に人がいるとは思わなかったんだ」

男はうまく地面に着地すると照矢に言った。一方照矢は目が点になっていた。

「ん、お前フレイグ小学校の生徒か？それは悪かったな」

「い、いえ。べつに大丈夫です。ところで、あなたは？」

「ああ、そうだったな。俺は尾上おがみ 十郎じゅうろう。植木屋だ」

尾上はそういうと照矢も自己紹介した。

「僕は六年の緋・照矢です」

尾上は途中で間を開けた照矢に少し不思議そうに見たが「そうか」と言った。すると学校の方からチャイムの音が聞こえてきた。

「あ、僕もう行きますね。それじゃあ」

照矢は尾上に言うと学校に向かって走っていった。尾上は照矢が見えなくなると仕事に取り掛かった。

照矢は教室に入ると窓ぎわの自分の席に荷物を置くとため息をつきながら椅子に座った。教室の中は後ろのロッカーの近くで男子が数人話しており、前の方は麻衣の周りで何処で買ってきたのか雑誌を広げて

話している女子の姿が見えた。

照矢は教科書などを机の中に入れると外を見ていた。

・コダマ小学校ー

ホームルームが終わり一時間目、二時間目と時間が進んでいった。スバルは持ってくるのを忘れた教科の教科書はミソラに見せてもらっていた。そのたびにスバルは周りから視線を感じていたが。

四時間目終了のチャイムが鳴ると給食の準備を始めた。スバルはミソラに教科書を見せてもらったびに感じる視線のおかげでクタクタだった。

「はゝあ。疲れた」

「だね」

ミソラは背伸びをしながらスバルに言った。二人で話しているとルナたちも周りに集まってきた。

「スバル君大丈夫？疲れてるみたいだけど」

「スバル。まあ、お疲れ様」

ツカサ、竜牙の順に言った。竜牙が言い終わるとスバルは「ハハハ・・」と言った。ルナは教室の空いている机を見ながら言った。

「結局ジャック来なかったわね」

「そうですね。これで、三日目。何をしてるんでしょうね」

それから給食の準備ができるまで世間話をしていた。

・フレイグ小学校ー

照矢の教室では四時間目の授業、国語を受けていた。先生は教科書に書かれている物語を読んでいた。聞いている生徒の大半はうつぶせになって寝ていた。先生は気づいているようだが起こさずに物語を読んでいた。外では体育の授業で生徒達が楽しそうにサッカーをしていた。

照矢は起きてはいたが先生の話はまったく聞いていなくグラウンドでサッカーをしている別の学年を見ていた。

「（は）あ。やっぱりやる気しないな。あと十分で終わりか」

照矢はふと時計を見てそんなことを考えるとまた外の方に視線を戻した。その時、あることに気がついた。学校から数メートル離れた上空に人が立っていたのだ。

「（ん？あれって人・・・じゃないな。あれは電波体？・・・！
」

照矢が見ているとその電波体は歩くような速さで学校に近づいてきていた。照矢がその電波体の姿を確認出来るまで距離が縮まったとき、目が合いそして息を飲んだ。なぜならその電波体は前に一度見たことがあったからだ。

「（あの電波体は確かサイレントと戦ったときに来た）」

照矢と目が合った時にはその電波体、モウメントスウィフトの周りには複数の槍が形成されていた。モウメントスウィフトは手を前に出すと槍はグランドに向かって一直線に飛んだ。そして、大きな音が聞こえたと思うとグランドから悲鳴が聞こえた。

血騒ぐ獣

・フレイグタウン・並木道―

尾上は照矢と別れた後、昼間まで仕事をしていた。

「もう十二時か、そろそろ昼にするか」

尾上は服の中に入れていたハンターを取り出し時間を見ると脚立から降り道具を隅にかためると近くの公園に向かった。道中、ハンターの中にいたウィザードのウルフが出てきた。

「今日はもう終わりか？」

「いや。食べ終わったら残りを終わらせるぜ」

「それより朝お前があつたあの照矢だっけ、なんか気になるんだよな・・・」

「あれからそればかりだぞ」

ウルフは何か気になっているようで照矢と別れた後から尾上と話すたびに言っていた。

「あいつと何処かで会っているような気がすんだよな」

「じゃあ、何処かで会ったんじゃないのか」

尾上はどうでもいいように言つとそのまま公園まで歩いていった。

「地球^{こち}に来てからじゃなくそれより前に……思い出せねえ」

ウルフは頭を抱えて考えていた。尾上はそんなウルフを見てため息をついた。

「あのな……」

尾上が言いかけたとき大きな爆発音が聞こえた。尾上とウルフは顔を変え音が聞こえた方角を見た。その方角には煙が上がっていた。

「あの場所は確か小学校のあたりじゃ……」

「ああ、どうやらその小学校みたいだ。この周波数は……」

「ともかく行くぜウルフ。電波変換」

尾上は光に包まれるとウルフフォレストの姿になり小学校に向かって駆け出した。

・コダマ小学校ー

スバルたちが昼食を食べ終わり教室の中でいつものメンバーで話している。スバルのハンターに電話が掛かってきた。スバルは屋上に行き電話画面を出すと暁の姿が映った。

「あれ、暁さん。どうしたんですか？僕たち今学校に来ているんですけど」

「悪いが今すぐフレイグ小学校に行ってくれないか。FM星人が現れたらしいんだ」

「フレイグ小学校って照矢君のいる？」

「そうだ。もうアオイと宵磨に連絡したからお前たちもすぐに向かってくれ。お前たちの学校には早退ということで話を付けてる」

「暁さんは？」

「悪い。俺は今別件で手が放せないんだ。頼むぞ」

暁はそう言うと言電話を切った。スバルは話が終わると電波変換しフレイグタウンに向かって駆け出した。道中ウォーロックがあることに気づいた。

「おいスバル。ミソラたちに何も伝えてないがいいのか？」

「あ……ウォーロック、メールを送つといて」

スバルはそのままスピードを落とさずに向かった。

ーフレイグ小学校ー

モウメントスウィフトが放った槍はグラウンドに突き刺さった瞬間爆発した。大きな爆発音で、うつ伏せで寝ていた生徒は飛び起き

授業をしていた先生も窓のほうにより外の様子を見た。グラウンドには砂煙が上がり遊具は全て爆風で壊れていた。授業でサッカーをしていた生徒たちの数人は怪我をしたようで倒れている生徒もいれば手で頭を抱え地面に伏せている生徒もいた。

「何があつたんだ!？」

「知らねえよ!いきなり外で大きな音がしたんだよ」

外の様子を見た照矢の同級生たちは何事かと騒ぎ出した。授業をしていた先生も何がどうなっているのかと慌てていた。教室の中で唯一冷静でいられたのは照矢だけだった。

照屋が教室から出ようとするグラウンドの方を見ていたモウメントスウィフトは顔を上げ照矢がいる教室を見た。

「(こつちを見てる。何をする気なんだ)」

照矢はそう思っているとモウメントスウィフトの周りにまた槍が形成された。モウメントスウィフトが手を前に出すと槍が教室に向かって飛んだ。槍を見た生徒たちは「うあああ」と叫びながら伏せるとすぐに窓ガラスが割れガラスの破片があたりに飛び散った。照屋を含め生徒たちが起き上がろうとすると教室を貫通した槍が爆発した。爆風で反対側の窓ガラスも割れ、そのガラスの破片が刺さっている生徒が数人いた。

「う、うあああ!」

「落ち着くんだ。避難訓練と同じように行動するんだ!」

起き上がり辺りの光景を見た一人の生徒が怯え叫ぶと教室を飛び

出した。それに続くように我先にと教室を飛び出しエレベーターに向かった。先生は落ちつくように叫んだがパニック状態になっておりなんの意味もなかった。全教室でも同じような状態になっているようで下の方や隣のクラスで叫び声や泣き声が聞こえた。

廊下ではエレベーターに乗ろうと生徒たちが押し合っておりエレベーターに乗れなかった生徒は階段の方に走り出した。生徒を突き飛ばしたり、ともかく逃げることでしか考えてないようで足を挫いたり怪我をし、廊下に座り込んでいる生徒が続出していた。

照矢の教室にはもう照矢以外誰もいなかった。照矢がモウメントスウィフトと廊下の様子を見ているとハンターからディムネスが出てきた。

「照矢、どうするんですか？」

「どうするって、暁さんにはもう知らせたからそのうちスバル君たちも来てくれると思うけど、速くモウメントスウィフトを何とかしないとイケないし、怪我人も安全なところに避難させないといけないし、くそ！やることが多いいな」

照矢は教室を飛び出すと廊下で座っている生徒の方に向かった。

照矢が廊下に飛び出したのを見るとディムネスはハンターに戻った。

照矢は近くにいた先生を呼ぶと生徒を任せ階段の方に駆け出した。下に降りず屋上に向かって。

屋上に出ると手すりから身を乗り出すとモウメントスウィフトを見た。モウメントスウィフトは今度は槍ではなく岩を形成していた。

「まさかあの岩も飛ばすきなんじゃあ」

「ん？照矢！あそこ」

ディムネスがいつの間にかハンターから出てきてグランドの方を見ると足を怪我したように泣いている生徒を指した。照矢がディムネスが言った方を見ると驚愕した。

「よ、葉平！！逃げてなかったのか！？」

照矢がハンターを取り出したとき狼の姿をした電波体が現れた。モウメントスウィフトが気づいたように後ろを向いた。

「グルル・・・血が騒いできやがった、血を静めてくれ」

そこには闘気を放っているウルフフォレストがいた。モウメントスウィフトは静かに睨むとハンターからスウィフトが出てきた。

「あら、ウルフじゃない。久し振りね。そして、お似合いのパートナーじゃないの」

「スウィフトか。話は聞いていたがお前もアンドロメダを復活させようとしているのか」

「あなたたちが前に失敗したから代わりに私たちがやってあげているんじゃない」

「止めときな。アンドロメダを復活させても何も変わらないぜ」

「そんなの知らないわよ。ただ復活させたいからやってるのよ」

ウルフとスウィフトが話しているとモウメントスウィフトが動いた。作り出した岩をウルフフォレストに向かって飛ばしたのだ。ウルフフォレスト、尾上は雄叫びを上げるとワイドクローとアッパ

クローの連続攻撃で岩を破壊した。

「おい、下にはまだガキがいるんだぞ！」

ウルフは尾上に言った時には遅かった。砕かれた岩はすぐ下にいる生徒たちに向かって落ちていた。岩が当たるか当たらないところまで落ちたとき風を纏った薄緑色の矢が岩を粉々に破壊した。

尾上とモウメントスウィフトは矢が飛んできた方向、学校の屋上を見ると翼があり灰色の電波体、スカイデймネスが弓を構えていた。照矢は翼を羽ばたかせ飛んだ。そのときモウメントスウィフトとそのウィザード、スウィフトが何かに気がつき後ろを向いた。

「ユネクトウォール」

モウメントスウィフトの前に壁が出来るとズガ！、と何かが刺さる音が聞こえた。壁には薄緑色の矢が刺さっていた。

「（落ちた岩を砕いたときに放った矢を操って後ろから攻撃。能力を知らなかったらやばかったかな）」

モウメントスウィフトはそう考えながら再び尾上の方を見た。そのときには照矢が来ていた。

「お前は？」

「スカイデймネス。サテラポリス遊撃隊です」

「お前、朝会った・・・」

尾上が言いかけたとき照矢が遮った。

「あのFM星人を頼んでいいですか？その間に僕が逃げ遅れた生徒を非難させます」

「分かった。こっちは任せな」

尾上はそう言うとモウメントスウィフトに向き直った。照矢はそれを聞くと一目散にグランドに残された生徒の非難に向かった。モウメントスウィフトはしばらく照矢と尾上を見ていると尾上が動いた。

「おい、しっかりしろもう大丈夫だ」

照矢は足を押さえて蹲っている生徒に駆け寄った。生徒は「怖い、怖い・・・」と泣きながら言い恐怖で体が震えていた。照矢とディムネスは手分けをして逃げ遅れた生徒を担ぎ一階の渡り廊下の近くの物陰に連れて行った。渡り廊下に着いたとき学校の影からこちらの様子を見ていた先生を見つけるとその先生を呼んだ。

「これで全員ですか？」

先生は「おそらく」と言ったとき連れてきた生徒の一人が消えそうな声で言った。

「よ、葉平君が・・・まだ」

照矢は荒れ果てたグランドをもう一度見渡すと岩の影に人影が見えた。照矢が駆け出そうとしたとき影がその場にいた全員を覆った。

照矢が生徒の非難に向かった後、尾上が自慢の爪で斬りかかった。モウメントスウィフトはバックステップで華麗にかわすと槍を作り出すと尾上に向かつて飛んだ。尾上は素早い動きで横にかわし、槍が真横を通り抜けたときその槍が突如爆発した。

尾上は予想していなかったように爆風に吹き飛ばされた。近くのウェーブロードに移動すると涼しい顔をしているモウメントスウィフトを睨んだ。

「どうしたのウルフ。動きが前より雑になっているわよ」

スウィフトは余裕と言いたげな顔で言った。ウルフは尾上に何か言いかけたとき尾上には何も聞こえてなかった。今の尾上には騒いでいる血を沈めようと目の前のモウメントスウィフトしかもは見えてなかったからだ。スウィフトはその姿を見ていた。

「どうする？あの物騒な目つきの狼。ほっといたら何しだすかわからないわよ」

「・・・うん。少しの間眠っていてほしいけどな。あれじゃあ、簡単にはいかないだろうね」

モウメントスウィフトとスウィフトが話していると、尾上は爪をギラつかせ再び斬りかかった。モウメントスウィフトはとっさに岩を作り飛ばした。尾上はワイドクローで粉碎した。

「・・・!!」

モウメントスウィフトは岩の破片が飛ぶ先を見ると息を飲んだ。ウルフも見るとその先には後ろを向き、まったく気づいていない照

矢がいた。飛んでいく岩はそれなりの大きさでまともにぶつかれば徒ではすまないだろう。

「後ろだ!!」

ウルフは有りつ丈の大声で叫んだ。照矢が振り向いたときには岩はもう目の前まで来ていた。

来客

照矢が葉平を助けに行こうと後ろを向いたとき大人の体の大きさをゆづに越すほどの岩が飛んできていた。

「（ここでかわしたら後ろは）・・・くそ！」

照矢は弓を使って受け止めた。デймネスはすぐさま風を使いバラバラにした。

「大丈夫ですか!？」

「心配なくていいよ。それより行くぞ」

照矢は弓を持っていた左腕を押さえながら言った。

岩の影に隠れている葉平と呼ばれた生徒の場所まで来ると声をかけた。

「何で逃げずにこんなところに居たんだ」

「うつ、う・・・」

照矢が言ったとき葉平は泣いていた。照矢は「はあ」とため息をつくと葉平を担いだ。

「もう大丈夫だから。泣くな」

泣き止まそうと照矢が言うと先ほど非難させた生徒たちの場所に連れて行こうとした。そのとき後ろから炎が向かってきていた。今

度は気づき弓を構え吹き飛ばそうとしたとき照矢の目の前に庇うように壁が現れた。

「!？」

炎は壁にぶつかるあたりで広がった。照矢は状況を把握する前に葉平を安全な場所に連れて行った。先生に葉平を預けると尾上がいる場所に向かった。

照矢が尾上の隣に来ると辺りを見た。

「おい。何邪魔してくれてんだよ。せっかく殺ったと思ったのによ」

荒々しく言いながらモウメントスウィフトの後ろから赤黒い身体をした電波体、クレイムサイレントが歩きながらやって来た。

「邪魔したのはどっちよ。さっさと消えれば」

「何だと！」

スウィフトがそう言うときサイレントが出てきた。二人のウィザードはガミガミと言い争いを始めた。

「な、何だ？」

「さ、さあ」

興奮していた尾上も呆気にとられていた。クレイムサイレント、西杉はサイレントを無視して不気味な笑みを浮かべながら照矢に向けて言った。

「やっと見つけたぜ。お前には借りがあるからな」

「さあ、知らないね。お前に借りを貸した覚えはないけどね」

照矢は思い出さくなくように顔を顰めて言った。西杉は恐ろしい目つきで一瞬睨むと目を閉じていった。

「フツ。だったら思い出させてやるよ！地獄のような痛みを与えてな！！」

「（おいおい。何か前より言動が荒くなってないか）」

照矢がそんな暢気な事を考えていると西杉が二本の短剣を手に持ち駆け出した。照矢は校舎と反対の方向に移動しながらかわした。

「あゝあ、余計な物までついて来ちゃったわね。ただでさえやりずらいつて言うのに」

「うん。そうだね」

スウィフトのボヤキに静かにモウメントスウィフトが答えた。スウィフトは尾上達に向きなおるとさつきと違い目つきが変わっていた。

「さっさとかたずけて、あのサソリを追っ払うわよ」

「うん」

モウメントスウィフトが両手を前に出すと一番初めに作り出した

槍とは比べ物にならないほどの量を作り出した。スウィフトは勝ち誇ったような笑みを浮かべた。

「この槍。全部さっきと同じように爆発するわよ。素早いあなたでも全部をかわせるのかな？」

「っち」

尾上はスウィフトの言ったことを聞くと舌打ちをした。

「それじゃあ、サヨナラ・・・かな」

スウィフトがウルフに向けて言うのと後ろに形成された無数の槍が四方八方に飛び尾上とウルフに襲いかかった。

照矢と西杉はウルフたちと少し離れたところまで移動していた。西杉は短剣を振り回していた。

「危なっかしいな」

「オラ、オラ！かわしてばかりじゃあ、どうにもならないぜ」

照矢は短剣を振り回しながら迫って来る西杉を蹴飛ばすと距離を取った。西杉はチツと舌打ちをすると校舎の方を向いた。

「そっいゃ、まだあそこでコソコソ見ているガキを助けようとしていたな。ククク・・・」

西杉はそう言いながら先ほど照矢が非難させた葉平と先生の方へ歩み寄っていった。少し歩くと西杉のすぐ横を矢が通り抜けた。矢は西杉の頬を掠っただけで致命傷を与えてなかった。西杉は恐ろしい目で弓を左手で構えている照矢を見るとニヤと笑みを浮かべた。

「相手は僕でしょ」

「そうこないとな。もう、終わりだな」

西杉は右手に持っていた短剣を投げ指を鳴らした。照矢はその行動を見た後、足に何かが刺さった感覚を覚えた。後ろに振り向くとウィザードオンしたサイレントが尻尾の先を照矢に向けており、右足には液体が付着した数本の針が刺さっていた。

「（！・・・右足の感覚がない）」

「気づいてんだろ？さあて。思い出すまでいたぶってやるよ」

西杉は両手に持った短剣に炎を纏わすと笑みを浮かべたまま駆け出した。短剣を振りかぶり振り下ろすとき照矢は目を瞑った。

少し間を空け照矢はゆっくり目を開けると・・・

「危機一髪かな？危なかったね」

鉾で西杉の短剣を受け止めているアイスユニコーン、アオイがいた。

「誰だ、テメエ？」

「うん。スカイディムネスと同じサテラポリス遊撃隊、だよ！」

アオイは短剣を受け止めていた鉾を力一杯振り西杉を吹き飛ばした。西杉は数メートル吹き飛ばされたが体勢を立て直しアオイを睨みつけていた。

「それじゃあ、サヨナラ・・・かな」

尾上とウルフに向かって無数の槍が四方八方に飛び、襲いかかった。

尾上は一か八かで全ての槍をかわそうとしていると目の前に炎の柱が壁を作るように地面から噴き出した。炎は飛んでくる槍を爆発する前に全て焼き尽くした。やがて炎は消えると中からアレスレオパルド、宵磨がいた。

「・・・アレスレオパルド」

「もう来たのね。思ってたよりお速いご到着だこと」

モウメントスウィフトとスウィフトがそう言つと宵磨は持っていた両手剣を構えた。

「そつちは俺たちのこと全て把握済みってことかよ」

「誰だが知らねえが助かったぜ」

「お！あの犬っころウルフじゃないか」

「・・・ディムネスが来てるって分かったとき、すごく嫌な予感がしたがやっぱりか」

ウルフはアレスの姿を見ると面倒くさい奴に会ったと言う顔でため息をついた。

「アレス、話は後にしてくれない。それより、ウルフフォレスト。ちよつとバリアとか防御系のバトルカード使っていてください」

尾上は宵磨の言うことを聞いた後、言われたとおり防御系のバトルカードを使った。モウメントスウィフトは宵磨が笑っている顔を見ると自分を囲むように壁を作り出した。スウィフトは「ちょ、ちよつと」と言ったがその声は壁によって消された。

「おい、その女！今すぐそこをどいた方が身のためだぜ」

「そうかな？それより周りを見てなくて良いのかな？」

アオイは西杉の言葉にあまり動揺せず言い返した。西杉は「ああん！？」とドスの利いた声で言ったとき紫色の炎が落ちた。西杉は上の方を見ると黒い四枚羽がある電波体、ジャックコーヴァスがいた。

「ペインヘルフレイム！！」

ジャックはそのまま巨弾の紫色の炎を乱射した。その様子は尾上

も気づいたようで当たらないようにかわすので必死だった。紫色の炎は見境なく降り注いだ。照矢は矢で、アオイはフリースボールで自分に飛んでくる炎を消していた。

「これで何発目だよ」

「うーん。十発近くは来たかな？」

「加減と言うことを知らないの？学校が燃えるよ」

「ジャック君も放火はしたくないだろうから大丈夫じゃない」

照矢がボヤいているのを簡単に答えた。炎の落ちてくる数が減つてくると地面に落ちた炎が消え煙が辺りから空へ上っていた。

宵磨とウルフはモウメントスウィフトが中にいるはずの壁に歩み寄っていると突然、壁が消え中には誰もいなかった。

「つち、逃げられたか」

宵磨は舌打ちすると西杉の方を見た。照矢とアオイは無事だったようで煙の中にいる西杉の方を見ていた。煙に人影が映ると中から火傷を負った西杉が出てきた。

「よくも、よくも、よくも……よくもやってくれたな!!!」

西杉は恐ろしい形相でそう叫ぶと短剣を持ち直し照矢、アオイ、宵磨、尾上、ジャックの順に睨みつけると赤紫色の肉眼で見える闘気を放った。

「テメエら全員生きて帰れると思うなよ!!!」

その場にいた照矢たち全員は恐怖を感じ体が無意識に震えていた。

「テメエら一生目を閉じてな！！邪光消ま・・・」

西杉が技を放とうとしたとき数発の弾丸が当たった。西杉は振り向くとロックマンがウェーブロードの上に立っていた。

「貴様・・・俺の邪魔ばかりするんじゃないぞ！！」

「おい、西杉。まだやるつもりか」

「当たり前だ！！このまま帰れるか！」

「少しは周りを見ろ！一旦退くぞ」

サイレントは西杉の受け答えを一切聞かず強引に連れて行った。スバルは照矢たちが集まっている場所に行くと言った。全員疲れきっていた。

「みんな大丈夫だった？」

「あ、スバル君。さっきは助かったよ」

「あゝあ、あんな奴二度と会いたくない」

アオイはグラウンドに座り宵磨は空を見上げながら言った。

「あれ？ジャック。いつの間に来ていたの？」

「ん？あ、ちょっとノイズウェーブを調べててな。今サテラポリ

スに連絡したから曉もそのうち来るだろう」

ジャックはそう言いながらハンターを仕舞った。空を見上げていた宵磨は何か見たようでスバルを呼んだ。

「スバル。あれって、ミソラちゃん達じゃない？」

スバルは宵磨が指を指した方を見ると電波変換したミソラたち三人が向かってきていた。ミソラたちグラウンドに降りると電波変換を解いて辺りを見回した。

「あれ？もう終わっちゃったの？」

「ミソラちゃん、スバル君と一緒に来てなかったんだ」

アオイはスバルを見ながらミソラに言うとミソラが思い出したように腕を組んだ。

「そうなんだよ。スバル君、メールだけ送ってきて自分は先に現地向かっているんだから」

それを聞いた照矢、ジャック、アオイ、宵磨はジト目でスバルを見た。スバルは視線を感じると慌てていた。

「え、え？僕なんか悪いことした？」

「いや。気にしなくて良いよ」

アオイは首を横に振るいながら言った。

しばらくするとサテラポリスが到着し操作が始まった。フレイグ
小学校の生徒はすでに先生たちが下校さし自宅待機の指示を出して
いた。スバル達は操作の邪魔にならないようにグラウンドの隅で座っ
ていた。サテラポリスの操作の様子を見てみると暁が歩いてきてい
た。

「よ。みんなお疲れ様。疲れているところ悪いがちょっと手伝っ
てくれないか？特に照矢には状況を詳しく聞きたいから・・・ん？」

暁はスバルたちに歩み寄り話していると照矢に近づきしばらく見
ると左腕を掴んだ。暁はそのまま照矢の左腕の袖を捲った。

「ッッ」

「おいおい、腫れてるじゃないか。どうしたんだ？」

「・・・あの時か？」

近くの茂みで寝ていた尾上が起き上がりスバルたちに言った。

「あの時って何ですか？尾上さん」

暁が尾上に聞くと話し始めた。

「俺がモウメントスウィフトとやりあっていた時そいつは生徒を
非難させていてな。そのとき流れ弾が飛んで生徒を庇って受け止め
てたぜ」

暁が照矢に聞くと静かに頷いた。暁は辺りを見回すとスバルたちの方に向き直った。

「よし。スバル、ミソラとツカサは照矢を自宅まで連れて行ってくれ」

「い、いいですよ。自分でいけますから」

「無茶をするな足もだろ？」

暁は照矢の肩に手を置くとスバルたちに聞こえないように言った。

「スバルには素直に話しても大丈夫だ。俺が保障してやるよ」

照矢は暁の顔を見ると暁はフツと笑うとスバルに「それじゃ頼んだぞ」と言い現場の指示をするため校舎に向かって歩いていった。

照矢の苦しみ

スバルとツカサは照矢に肩を貸して山道を歩いていた。ミソラはスバル達より少し先の道を歩いていた。照矢はたびたびスバルたち三人を見ていた。

「大丈夫？ 苦しそうだけど？」

「あ、うん。大丈夫だよスバル君。もうこの辺でいいから、スバル君たちは戻って暁さんの手伝いをしてよ」

照矢が言った声が聞こえたようでミソラが振り向いていった。

「それもう三回目だよ。それに昨日来た時、照矢君の家を案内されてないじゃない？」

「そうだよ。この際行つていいでしょ？」

ツカサが笑顔で言う。照矢は「う、うん」と言った。それからしばらく歩くとミソラが振り返って言った。

「ねえ、あとどれくらい歩くの？」

「それ、確か昨日も聞いたような」

ツカサが言う。照矢は辺りを見回した。照矢は何か決心したよう。下を向いたまま言った。

「あと少しだよ」

「それ、昨日も言っで、全然あと少じゃな・・・か・・・」

ミソラは上のほうを見上げたまま口を閉じた。スバルとツカサは不思議に思っでミソラに聞くと何も言わなず指で指した。二人はその方向を見ると木々の間から屋敷の屋根が見えていた。

「・・・ま、まさか、あの家？」

「家、と言っより屋敷だね」

スバルは照矢に聞くとツカサが訂正した。照矢は頷いた。

「うわゝ。広ゝい」

ミソラは門から敷地内に入ると辺りを見回しながら言った。スバルとツカサも敷地に入ると歩くのを止め屋敷や周りを見渡していた。

「ねえ、先に中に入らない？話は中で聞くから」

照矢はスバルたちに言っで屋敷の玄関に向かっで歩き出した。ミソラが玄関のインターホンを押し中に入った。

「ごめんください」

「はい、どちら様でしょう？」

ミソラが中に入ると六十歳ぐらいの男性が出迎えた。

「えっと、照矢君のお友達なんですけど・・・」

「照矢様の？」

その男性はミソラを見ると後ろにいるスバルとツカサ、照矢の姿を見ると目を見開いた。

「て、照矢様。どうなさったんですか？」

「析川さん。頼むから今はその言葉遣いやめてもらえる？」

照矢は無理に足を動かそうとしたらしく痛そうな顔をしていた。

析川と呼ばれた男性は「は、はあ」と言うと照矢を抱え中に入った。上に続く階段まで来ると析川は玄関のところで待っているスバルたちに言った。

「皆さんもお上がりください」

析川はそう言うと二階へ向かっていった。スバルたちは靴を脱ぎ揃えると析川の後について二階に上がった。

二階に上がると沢山ある部屋の中から窓際にあるドアを析川が開け中に入った。スバルたちもその部屋の中に入ると壁の方は本棚が置かれてあり沢山の本が入ってた。析川は照矢をゆっくりベットに座らせると腫れている左腕を見るた。析川はすぐに「救急箱を取ってきます」と言うと部屋から出て行った。

スバル達は椅子やベットの上に座り照矢に聞いた。

「ねえ、照矢君って・・・」

「この家のことでしょ。父さんが政治家なんだよ。さっきの人が
執事の析川さん^{せきがわ}」

「あ、だから前WAXAで会った由人さんが知ってたんだ」

スバルが聞く前に照矢が話すとミソラが言った。

「それにしてもまたどうして隠してたの？」

「まあ、それはいいじゃない」

照矢が言ったときドアが開き析川が片手には救急箱を持って中に入ってきた。照矢の腕に包帯を巻き固定させると照矢に心配そうに言った。

「またどうしたんですか？こんな大怪我して」

「気にしないでください。迷惑はかけませんから」

析川は短くため息をつくとき救急箱を持って言った。

「それならいいですが。みなさんも気をつけてくださいよ。物騒なニュースが近頃多いですから。先ほども学校が襲撃されたみたいですから」

析川の話を聞くとスバルたちは顔を見合わせた。

「（私たちさっきまでそこに居たんですけど）」

「（ミソラちゃん。ここは黙っていようよ）」

小声で独り言を言ったミソラにスバルも析川に聞こえないように言った。析川はそのまま「それでは」と言つと部屋からでて行った。

「ところで照矢君、足はもう大丈夫なの？」

「あ、もう大丈夫だよツカサ君」

「それにしても本が多いいね」

ミソラは近くの本棚の本を取り表紙や中を見ていた。照矢が答えようとしたときピリリ・・・と電話が掛かつてきた音が聞こえた。スバルはハンターを取り出し画面を出した。

「おう、スバル。照矢の家にはもう着いたか？」

「あ、暁さん。はい、もう着きました」

「照矢いるな。ちょっと代わってくれないか？」

暁が照矢に変わるように言つとスバルのハンターを照矢が受け取った。

「はい、代わりました。どうしたんですか？」

「今回のことに関係ないと思うが、聞きたいことがあるんだ。これ、誰のかわかるか？」

暁はペンダントを見せた。照矢はそのペンダントを見ると酷く驚

いた様子だった。

「そ、そのロケット何処で見つけたんですか!？」

「おいおい照矢、落ち着けよ。これはロケットじゃないぜ。ロケットってのは宇宙に行く……」

暁は笑いながら話しているところをミソラが笑いながら言った。

「暁さん。それは宇宙にロケットです。照矢君が言ったロケットはペンダントのほうですよ」

「え? そうなのか」

「(暁さん。知らなかったんだ)」

「(おいおい、ペンダントを見せといてそれはないだろう)」

スバルとウォーロックはそう思っていた。ツカサは自信満々に話していた暁が意表を突かれた様な顔になったのが面白かったように笑を押し殺していた。照矢は調子が狂ったのかため息をつきながら顔を片手で抑えていた。

「ま、まあいい。それでえっと……」

考え込んで一向に話し始めない暁に痺れを切らしのか照矢がさつきと同じことを聞いた。

「だから、そのロケットを何処で拾ったんですか!？」

「さあ」

「さあつて、暁さん、ふざけないでくださいよ」

平然と答えた暁に照矢が言った。

「これを見つけたのは俺じゃなくてアオイだからな。ちょっと待ってる」

暁は近くに居たアオイを呼んだ。アオイはハンターで誰かと話していたようで、暁に呼ばれると急いで電話を切り暁の近くに来た。

「ん？どうしたの？」

「アオイちゃん、暁さんが持っているロケット何処で拾ったの？」

「ロケット？ああ、えつと校舎の裏にある木に引っかかっていたんだよ」

「木に？」

「うん。それにおかしなロケットだよ。写真を入れることが出来るみたいなのに写真が入ってないし」

照矢はアオイから聞き考え込んでいるとスバルが言った。

「それで、他に何か分かったんですか？」

「いや、特になにも・・・」

「あ、ちょっと待った。後一つあったよ」

暁が言いかけたときアオイが割り込んだ。アオイは暁からロケットを受け取ると話し始めた。

「このロケットが引つかかっていた木の近くのコンクリートが取り替えられた真新しい跡があったよ。それと木陰や茂みの中から砕かれたコンクリートを見つけたよ」

「コンクリートを？」

「うん」

「おい。それがどう関係あるんだ」

暁は事件に関係のあることかと思っていたようで、まったく関係のない話をしたので不機嫌そうだった。

「だって仕方ないじゃない。砕かれたコンクリートに黒っぽいシミを見つけたんだから」

「シミ？」

「そうなのよ、ミソラちゃん。気になって雪島君に聞いてみたらそれをもって帰ってくれ、って言われるし」

アオイの話からさっき電話していたのは雪島のようにだ。

「まあ、また何かあったら連絡するよ。じゃあね」

アオイは暁に聞かずに勝手に電話を切った。スバルとミソラ、ツカサは話がすむとフレイグ小学校に戻って暁たちを手伝うため照矢に「じゃあね」と言い部屋を出て一階に降りていった。階段を降りていると執事の析川に出合った。析川の手にはお茶とお菓子を載せたお盆を持っていた。

「おや？もうお帰りになるんですか？今からお茶をお出ししようと思っていたんですが」

「はい。お邪魔しました」

「また来て下さいね。照矢さまがお友達を連れてきたのは初めてなんですから」

「え、そうなんですか？」

スバルたちが一階に降りていたが析川の言ったことを聞くと振り返って尋ねた。

「ええ。照矢さまは体が弱かったですからあまり外に出たことがありませんでしたから。そのせいで学校の友達もいなかったそうです。それが近頃急に外出が多くなって、体には気をつけてほしいんですが嬉しい事でもあるんですよね」

析川は思い出すように上を見ると笑顔でスバルたちに言った。ツカサが何か言いかけたとき大広間の方から声が聞こえた。

「析川さん。いないんですか？」

「はい。何でしょうか葉平様？」

葉平が階段の方にいた析川を見つけると近づいてきた。そのとき近くに居たスバルたちに気がついたようだ。

「その人たち誰なんですか？」

「ああ。こちらは照矢さまのお友達ですよ」

「ふん、あいつのね」

葉平は照矢と聞くと不機嫌になり興味がないと言う顔つきになった。

「僕の部屋の問題集が終わったから新しいの買って来てもらえる？」

「はい、分かりました。それより葉平さまお怪我の具合は大丈夫ですか？」

「たいした事ないですよ。それじゃあ、部屋で待ってますね」

葉平は析川に伝えたいことを伝えるとさっさと一階の部屋に戻って行った。

「彼は？」

「照矢さまの弟さまです。先ほどまでフレイグ小学校に登校していたんですが襲撃があったそうで戻られたんです」

「あの、照矢君のことを嫌っていたみたいなんですけど、何かあ

ったんですか」

「葉平さまはとても勉強熱心で長男であるのに関わらず勉強して
いない照矢様に不満を抱いているのです」

析川はお盆を持ったまま葉平の部屋を見ながら話し続けた。

「葉平様は強気ですが本当は弱いと思うんですよ。今日も帰られたときしばらくの間泣いていらして。泣き止むと灰色で翼の生えた電波体に助けられたと仰ってました」

析川は話しすぎたと言う顔をしスバルたちに「このことはどうか秘密に」と言った。スバルは頷いてはいたが何処か腑に落ちない様子だった。

スバルたちは析川に挨拶をすると山を降り小学校に向かった。

「……なんか照矢君大変そうだね。いろいろ」

「だね。あの家じゃあどうやらディムネスのことも、遊撃隊のことも伏せているようだしね」

「辛いだろうね」

スバル達は山道を歩いている時、時々照矢の家の方角を振り向いていた。

儚かった夢

- スピカモール -

フレイグ小学校で起きた襲撃事件から数日後。スバルとミソラはウェーブライナーでスピカモールに向かっていた。

「いやゝ楽しみだな。スバル君とスピカモールにまた行けるなんて」

「ミソラちゃん、何か勘違いしてない？僕達は委員長たちの手伝いをするために行くんだよ」

「分かってるよ」

スバルの隣に座っていたミソラは笑顔で言った。ツカサはスバルの前の席に座っていて微笑ましそうに見ていた。スバルは窓の景色を見ていた。

- 一日前・コダマ小学校 -

「え、イベントを手伝って？」

スバルは荷物をかたづけながらルナの方を見た。

「そうよ。明日の九時からスピカモールで私のお父さんたちが開催するイベントをスバル君たちに手伝ってほしいのよ」

「何のイベントなの？」

近くで話を聞いていたミソラが興味ほんいで聞いた。

「さあ、イベントの内容は詳しく聞いてはいないわ。何でも上の人たちが集まって演説をするそうよ」

「で、俺たちはその会場の準備ってわけだ」

ゴンタが言うのと近くにはキザマロはもちろん、ツカサと竜牙、ジャックが来ていた。ルナはみんなに聞くように「手伝ってくれる？」と言った。

「悪いけど、俺はパスかな。その日はいろいろとやることから」

竜牙はそういうと荷物を持ち教室から出て行った。ルナは「たまには一緒に来なさいよ」と言うスバルたちの方を向き直った。

「僕は大丈夫だよ」

「私も。その日は空いているよ」

「俺はパ……」

「もちろんパスなんて言わず手伝いに来るわよね。ジャック君？」
ジャックがスバルとミソラが言った時、おそらく竜牙と同じで「パス」と言いたかったのだろうが、ルナが顔を近づけ笑顔で言った。

その顔には拒否など断ることを許さないと無言で語っていた。

「……………分かったよ！！行けばいいんだろ行けば。たあく」

「（どんまいジャック）」

「（諦めて正解ですよ）」

ジャックは腕を組んで横を向いた。そんな様子を見ていたミソラとキザマロは心の中で呟いていた。スバルはツカサに「ツカサ君はどうするの」と聞いた。

「うーん。みんなで行くなら僕も行こうかな。ルナちゃん、いつ行けばいいの？」

「八時ぐらいに来てくれればいいわね」

「じゃあ、遅れないで来てよ」

・スピカモール

スバルたちがウェーブライナーの中で話をしているといつの間にかスピカモールについた。スバル達はウェーブライナーから降りると待ち合わせ場所のイベント会場に向かった。

スバルたちがスピカモールに来たところ近くの店の屋上に西杉がシヨッピングモールを見下ろしていた。ハンターからサイレントが出てきており見下ろしている西杉を見ていた。サイレントとは先日あったフレイグ小学校の襲撃後のことを振り返っていた。

「何であの時退いた！！？あのガキども、俺一人でやることが出来たんだぜ！？何故退く必要があった！！」

西杉は電波変換した状態でサイレントとを蹴り飛ばした。サイレントとは抵抗はしたが木に思いつきりぶつかった。ギギギ・・・と木が倒れる音がしていたがそんなことをお構いなしにサイレントの首元を掴んだ。

「速く答えろ！！つまらない理由だったらお前でも殺すぞ！！！」

「俺をデリートしたら・・・お前のその力はなくなるぞ」

サイレントとは負けじと脅すように言った。西杉は「チっ」と舌打ちをすると手を放し言い放った。

「二度と俺の邪魔をするなよ！」

西杉は電波変換を解き帰路につこうとしたときハンターにメールが届いたようだ。西杉はメールを最後まで読むとニヤと笑みを浮かべた。

「おいサイレント、今度スピカモールへ行くぞ」

地面に座っているサイレントに言うと西杉はそのまま何処かへ行った。しばらくの間風の音しか聞こえず草や木が揺れていた。サイレントとは立ち上がると西杉が消えた道の先の方を眺めていた。

サイレントが西杉のウィザードになったのは丁度ユニコーンたちが来た一週間ほど前のときだ。そのとき西杉はある会社の社員だった。西杉は午前から午後まで会社で働きあとは帰宅というのが日程だった。

そんなある日、西杉は午前で仕事を切り上げ帰路についていた。西杉は昼だというのに人気のない道を歩いていた。サイレントが現れたのはそのときだ。

「よう。その人間」

初めは何処から声が聞こえているのか分からないように西杉は辺りを見回していた。サイレントは「ここだ、ここだ」と言いながら電柱の影から出てきた。

「誰だお前は？」

西杉は驚いた様子もなく平然と言った。サイレントは薄気味悪い声で笑いながら近づいた。

「誰か、か。そんなことはどうでもいいじゃねえか。どうだお前、俺を受け入れてみないか？」

「何言ってんだ？受け入れるとは？」

「FM星人って聞いたことあるか？」

「FM・・・ああ、一年前ぐらいに地球侵略だといってやってきた宇宙人ね」

西杉は冷静に言った。

「お、以外に察しがいいんだな。そうだ、その通りだ。どうだ？お前に力を与えてやるぞ」

西杉はサイレントがそう言うため息をつくき何も言わず歩き出した。サイレントは西杉の思わぬ行動に驚き後を追った。

「お、おい、ちょっと待てよ！」

「俺はそんな力はないし興味もない。何を当たってくれ」

西杉はそう言うそのまま歩き出した。

「そんなことないくせに何言ってんだ。本当は必要なんだろう？」

サイレントの一言で足を止め振り向いた。

「・・・何で知ってる？」

「前から見てたんだよ。お前が親しい同僚と話してたのを」

サイレントはゆっくり西杉の目の前まで移動すると西杉の目をジッと見た。

「どうだ？受け入れる気になったか？」

サイレントは西杉に近づきスピカモールで買い物やイベントで賑わっている下の方を見下ろしていた。

「（・・・夢はこの世の中を正すこと、ね。もう欠片も残ってないな）」

スピカモールのほうは恋人同士や今回のイベントの参加者、家族たちが楽しそうに買い物や話を楽しんでいた。

「（力を手に入れた人間なんて簡単に変わるものだな。性格も・・・夢も・・・なにもかも）」

サイレントは始めて会った時の姿が影も形もなくなった西杉を静かに見ていた。

・イベント会場ー

「ちょっとゴンタ、ジャック！席の配置が違っわよ。今すぐ直しなさい」

スバルとミソラ、ツカサの三人はイベント会場に行く。ルナたちはもう来て会場準備をしていた。会場では他にも今回の演説参加者の役員や係員など打ち合わせをしている人も大勢いた。ゴンタとジヤックは相変わらずルナに怒鳴られていた。キザマロがスバルたちに気づくと手を振った。

「おい、こっちですよ。スバル君たちも速く来て手伝ってくださいよ」

「やっと来たわね。さあ、速く手伝ってちょうだい」

ルナはスバルたちに気づくとそう叫んだ。スバルたちも加わり順調に準備は進んでいた。そのイベントに西杉やサイレントとは別にもう一人、訪問者が訪れていることには気づくことはなかった。

「はあ。これまた厄介な奴が来てるもんだな。俺たちは観客席でゆっくり見学か。出ちゃダメなのかフェンリル？」

ウルフ・フォレストに似た灰色でボロボロのマントを着た電波体がイベント会場近くのウェーブロードに座っていた。その隣には今訪れているFM星人のリーダー、フェンリルが腕組みをしていた。

「奴がいるからだろうが今は出ない方がいい。そもそも、お前だろ？ 敵が簡単に現れペラペラお喋りしてちゃあ『僕達はこれから危険なことをします。どうぞ止めてください』って言っているもんだってな」

フェンリルがそう言うと言波体は「フツ、そんなことも言ったな」と懐かしそうに空を見上げながら言った。電波体は再びイベント会に視線を戻した。

「まあ、見学させてもらおうか。君たちが何処まで出来るのか・
・」

ショッピングモールといえば

・イベント会場ー

「それでは皆さん、今日は大変お忙しい中来て頂き誠にありがとうございます。うございました。それでは・・・」

「ふう、どうやら間に合ったようね」

スバル達は会場の観客席の階段の近くにいた。あれからスバル達はルナの指示で大急ぎで会場準備に取り掛かった。結果、開始ギリギリで完了した。ルナは観客席から会場の様子を見ていた。

「演説って聴いていたけど、聞きに来ている人意外といるんだね」

「スバル君の言うとおりだね。観客席もほぼ満席。えっと、確か下の会場だけで千人近く入れて観客席は・・・」

「同じく千人近く座れますよ、ツカサ君。だから見積もって二千人近く来てますね」

キザマロもイベント会場を見渡しながら言った。ジャックは階段の手すりに寄りかかりパンフレットを眺めていた。すると何かに気づいたようでスバルを呼んだ。スバルは「なに？」と言いながらジャックに近づいた。ジャックは何も言わずパンフレットのある場所を指していた。その場所には今日来ている有名な会社の社長や警察の所長、WAXAの長官などの名前が並んでいた。その中には・・・

「三谷由人って、あの・・・」

「ああ。こりゃ、速く帰った方がよさそうだな。晝に聞いたところだと要注意人物らしいからな」

「え、そうなの？」

「知らなかったのか。結構やばいことをしてるらしいぜ」

スバルとジャックが話しているとミソラとルナが近づいてきた。満面の笑みを浮かべて。

「さて、あなたたちこれから暇でしょ」

「あのね、この近くに新しくできた店があるんだ」

スバルはそこまで聞くと勘が働きこの場から離れようとした。ジリジリ・・・とゆっくり後ろに下がっているとある物にぶつかった。「なんだよ、こんなときに」と思いながら後ろを向くとゴンタとキザマロがスバルを見ていた。ジャックはゴンタに捕まっており「離せよ」と足掻いていた。

「（スバル（君）逃がさないぞ）」

スバルは無言で訴えかけているゴンタとキザマロに負け、ため息を付き逃げるのを諦めた。

「（ミソラちゃんと委員長がショッピングモールにいるときといえど・・・）」

― スピカモール・数時間後―

店のドアが開き中からミソラとルナを先頭に荷物を沢山持ったスバル達が出てきた。

「（……………やっぱり）」

「（ゴンタのやろう。こんな雑用に付き合わせやがって）」

スバルとジャックの気も知らずミソラとルナは次の店を詮索していた。

「あの、店もいいわね」

「あ、ルナちゃん。あの店もいいよ」

スバルたちは離れたところからそんな二人を見ていた。

「なんか楽しそうだね。ルナちゃんにミソラちゃん」

「……………ねえツカサ君」

「ん？なにスバル君」

スバルはすぐ隣いるツカサに言った。なぜなら……………

「何で荷物を持ってないの？」

その通り。スバルたち男子の中でツカサだけが荷物を持ってないのだ。

「あれ？この荷物って電波に変えることが出来るようになってハントーで持ち運びが出来るようになったんだよ」

一時の沈黙。

するとスバル、ジャック、ゴンタ、キザマロの四人は同じタイミングで荷物を降ろし、同じタイミングでハントーを操作し荷物をハントーに片付け、同じタイミングで一息ついた。

「さすがに重かったですね」

「前が見えなかったぜ」

「あゝ、やっと楽にできるぜ」

「本当だよ」

「みんな知らなかったんだね。便利になったよね」

「便利になりすぎです。そんなこと知りませんでしたよ」

荷物が消え背伸びをしている四人にツカサが言っているとキザマロが答えた。ミソラとルナが近づいてきてある提案をした。

「ねえ、そろそろ昼だから何処かで昼食を取らない？」

「それもそうだね。じゃあ、行こうか」

スバルたちは再び店の中に入った。

スバル達は食堂に入ると早速料理を注文した。

「お、牛丼セットがあるぜ」

ゴンタは牛丼セットがあることを知るとさっきまでとは違いテンションが上がっていた。スバルたちもそれぞれメニューを選んでいった。

メニューを注文しみんなで楽しく話しているとハンターが鳴った。どうやらスバルにメールが来たようだ。スバルは向きを変メールボックスを見るともう一通来ていた。

「（あれ？もう一通来てたんだ。えっと、雪島君からだ。）」

メールには貸していたエースノジョーカーPGMと一緒に一言書かれていただけだった。そしてもう一通は前にも来たメールと同じ差出人不明のメール。

「（至急イベント会場に来たね。犠牲者を出したくなければ・・・か、前のと同じだ。・・・）」

スバルはハンターを仕舞うと席を立った。

「あれ？どうしたのスバル君？」

「ちよっとトイレに行つて来るよ」

スバルはそう言うとトイレ・・・ではなく食堂の出入り口に向かった。ミソラたちはスバルが外に出るまでは気づかず話を続けた。・・・ツカサを除いて。

・イベント会場ー

スバルはミソラたちと別れるとすぐにイベント会場の観客席に来ていた。中はまだ演説、説明会が続いていた。スバルは手すりから身を乗り出し会場を見回した。

「おい、迷惑メールじゃないのか？確かに前もあったが、お前の考えすぎじゃないのか？」

「そうだったのかな」

「きつとそうだぜ。ここの所事件ばつかったからな」

「・・・そうだね。じゃあ、戻ろうかな」

「もう少しいたほうが良いんじゃないの？」

「それもそうだね。・・・って、ええ！！」

突然隣からツカサの声が聞こえたのでスバルはとつさに大声を出した。ツカサは何も言わず人差し指を立てていた。幸い説明会の発

表していた人たちの声でかき消されていたようだ。スバルは辺りを確認するとツカサに聞いた。

「どうしてツカサ君がいるの？」

「悪いね。見るつもりはなかったんだけど見えちゃってね。で、何かあった？」

「いや、まだ特になにも起きてないよ」

スバルがツカサに言うのと殺気に満ちた視線を感じた。一瞬体が動かなくなったがすぐに動けるようになる。と視線も感じなくなった。

「ツカサ君」

「うん」

スバルはツカサに耳打ちをすると辺りの会場を隅々まで見渡した。ツカサが前の観客席の方を見ているとある一人の男の人と目が合った。

「スバル君。ちょっと、あの人見てよ」

「え……ねえ、ウォーロック」

「ああ、またまたビンゴみたいだぜ」

スバルはツカサが指した人を見るとハンターから出てきたウォーロックに確認を取るように聞いた。スバルたちが見た人は他でもない西杉だった。西杉はスバル達は見ているのに気づくと不敵に笑み

を浮かべた。

「…………あ!!」

何を思ったのか西杉はしばらくスバルたちを見ると階段を使い下の階に向かって走り出した。

「ツカサ君は反対の方から」

「分かったよ」

スバルはそのまま西杉を追いかけてツカサは近くの階段から下に降りた。挟み撃ちにするつもりのようなのだ。

「おいスバル。あいつを外に出したらまずいことになるぞ」

「分かってるよ。ウォーロック先に行つて」

スバルは席に座っている人の邪魔にならないように走っているの
でウォーロックに先に行くように言った。ウォーロックはウェーブ
ロードを使いあつという間に下の階に行った。スバルも下の階に行
くとツカサとウォーロックがいた。

「こっちはいなかったよ」

「すまねえ。俺が来たときにはもういなかった」

「つてことは……」

スバルは自分の後ろにあるエレベーターを見た。階数表示ボード

は屋上のところで止まっていた。

「屋上か」

「行ってみよう！」

すぐさまスバルとツカサはエレベーターに乗り込み屋上に向かった。エレベーターが止まりドアが開くと外に飛び出しあたりを見回した。そこには西杉が居た……。はずだった。

「い、いない……」

「……何処に行ったんだ」

「おい、まさか、まんまとおびき出されたんじゃない」

ウォーロックがあせったように言うイベント会場がある階の壁が爆発と共に碎け散った。それと同時に開いた壁から悲鳴が聞こえた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4263w/>

流星のロックマン 連鎖する運命

2012年1月8日20時50分発行